元総社蒼海遺跡群（31）

前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１０．１２

前橋市教育委員会

oumi031.indd 1 2010/11/17 12:19:34

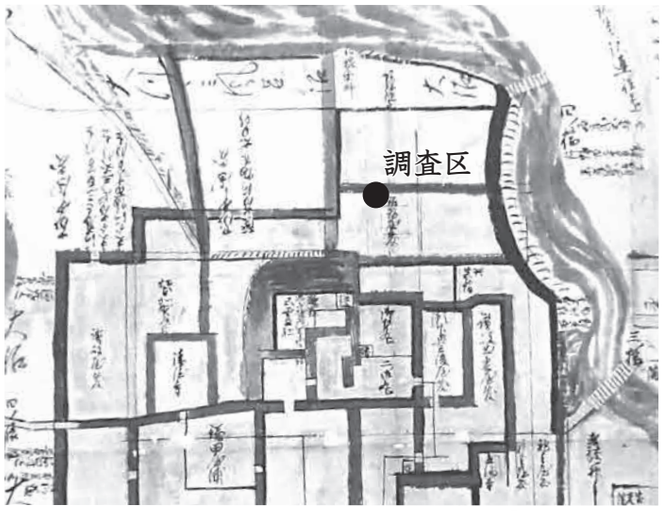
oumi031.indd 2 2010/11/17 12:19:34

oumi031.indd 3 2010/11/17 12:19:34

oumi031.indd 4 2010/11/17 12:19:34

元総社蒼海遺跡群（31）

前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書



『蒼海城絵図』より

２０１０．１２

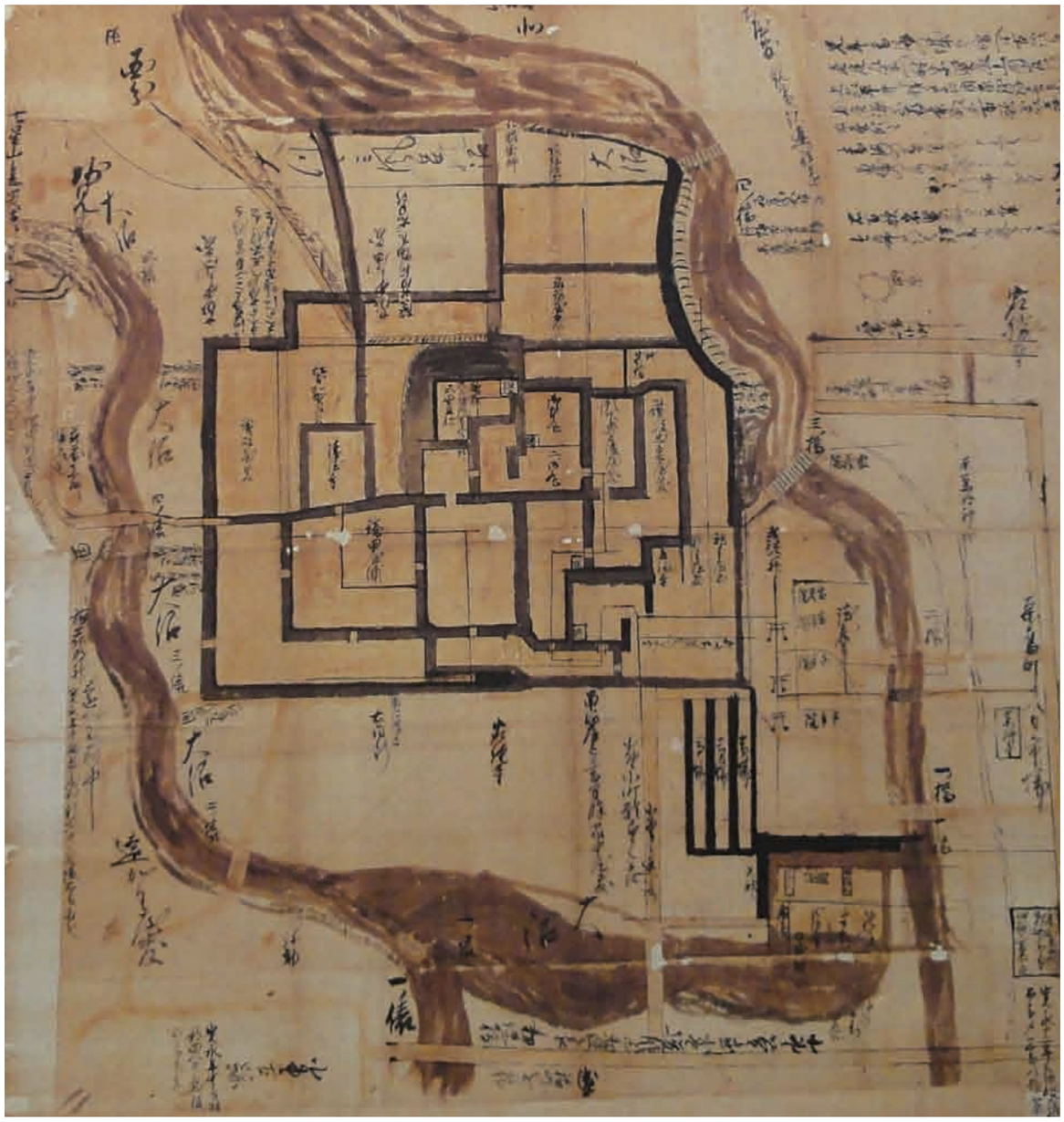
前橋市教育委員会

oumi031.indd 5 2010/11/17 12:19:35

oumi031.indd 6 2010/11/17 12:19:35

元総社蒼海遺跡群（31）調査区全景（合成写真　上が東）

oumi031.indd　7　　2010/11/17　12:19:38



『蒼海城絵図』（複製　前橋市総社資料館蔵）

本絵図は総社長尾氏在城時の蒼海城の姿を現していると考えられているものである。東に牛池川、南に染谷川に囲まれた場所に立地し、両河川が外堀の役目を担っている。城内には幾重もの堀を巡らして郭を形成し、中央部には本丸・二の丸、御霊社がある郭の北西側は沼の存在も窺える。元総社蒼海遺跡群（31）で確認された堀は本丸の北側にみられる諏訪屋敷の堀と考えられる。

oumi031.indd　8　　2010/11/17　12:19:41

はじめに

前橋市は、関東平野の北西部に位置し、名山赤城山を背に利根川や広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情に溢れる県都です。市域は豊かな自然環境に恵まれ、２万年前から人々が生活を始めました。そのため市内のいたる所から、人々の息吹を感ぜられる遺跡や史跡、多くの歴史遺産が存在します。

古代において前橋台地には、広大に分布する穀倉地帯を控え、前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ、王山古墳・天川二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野国の中心地として栄えました。また、続く律令時代になってからは総社・元総社地区に山王廃寺、国分僧寺、国分尼寺、国府など上野国の中枢をなす施設が次々に造られました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎬をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東三名城の一つに数えられる厩橋城が築かれました。

やがて近代になると、生糸の一大生産地であり、横浜港から前橋シルクの名前で遠く海外に輸出され日本の発展の一翼を担いました。

今回、報告書を上梓する元総社蒼海遺跡群 (31) は上野国府の中枢域と推定していた場所に隣接することから、調査成果に期待しておりましたが、古墳時代の竪穴住居跡と中世蒼海城の堀跡を検出するにとどまり、国府そのものに関連する遺構の検出はかないませんでした。今は一本の糸に過ぎない調査成果も織り上げて行けば、国府や国府のまちの姿を再現できるものと考えております。

残念ながら、現状のままでの保存が無理なため、記録保存という形になりましたが、今後、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、この調査事業を円滑に進められたのは、関係機関や各方面のご配慮の結果といえます。また、寒風の中、直接調査に携わってくださった担当者・作業員のみなさんに厚くお礼申しあげます。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

平成 22 年 12 月

前橋市教育委員会
教育長　　佐　藤　博　之

oumi031.indd　9　　2010/11/17　12:19:41

例　　言

1　本報告書は前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う元総社蒼海遺跡群（31）発掘調査報告書である。

2　発掘調査の要項は次のとおりである

遺跡名	元総社蒼海遺跡群（31）
調査場所	群馬県前橋市元総社町 1965 ほか２筆
遺跡コード	21 A 130 － 31
発掘調査期間	平成 22 年１月 18 日～平成 22 年３月 12 日
調査担当者	熊谷　満（技研測量設計株式会社）
整理・報告書作成期間	平成 22 年８月５日～平成 22 年 12 月 17 日
整理担当者	佐野良平（技研測量設計株式会社）

3　本書の編集は佐野が行った。原稿執筆はＩを神宮　聡（前橋市教育委員会）、Ｖの一部を熊谷、他を佐野が担当した。

4　本書はデジタル編集・組版により作成し、その作業は前田和昭（技研測量設計株式会社）が担当した。

5　発掘調査及び整理作業参加者は次のとおりである。

桃薗正志（技研測量設計株式会社）

石川輝子　市村浩一　江幡三雄　木暮孝一　佐藤和彦　佐藤文江　杉山明夫　須藤香織　高山　愛　瀧澤佳子　角田耕二　長田友香　西潟　登　平井君江　福島禄子　堀越晴子　三原一重　山下雅恵　湯浅澄子　横澤百合子　吉田文江　渡辺義雄

（以上、作業員・整理補助員）

6　遺物の分類・実測においては瀬田哲夫（湘南遺跡調査会）・中村岳彦・大川明子（以上、技研測量設計株式会社）の助力を得た。

7　本調査における図面・写真・遺物は、前橋市教育委員会文化財保護課で保管している。

8　下記の諸氏・諸機関にご指導・ご協力を賜りました。記して謝意を表します（順不同、敬称略）。

永井智教　日沖剛史　株式会社測研　山下工業株式会社

凡　　例

1　挿図中に使用した北は座標北である。

2　挿図に国土地理院発行1/200,000『宇都宮』『長野』、1/25,000『前橋』、前橋市発行1/2,500都市計画図を使用した。

3　遺構名称は、住居跡：H、道路状遺構：A、溝：W、土坑：D、井戸跡：Ｉ、ピット：Ｐである。

4　遺構・遺物実測図の縮尺は原則的に次のとおりである。その他各図スケールを参照されたい。

遺構　住居跡・土坑・ピット・・・1/60　竈・・・1/30　道路状遺構・・・1/150　溝・・・1/150
全体図・・・1/200

遺物　土器・石製品・・・1/3、1/4　鉄製品・・・1/2　古銭・・・1/1

5　表中の計測値については（　）は現存値を表す。

6　遺構図、遺物実測図のトーン表現は以下の通りである。

遺構図 ‥‥‥ 硬化面　焼土範囲

遺物実測図 ‥‥‥ 須恵器（還元焔焼成）　釉薬

7　主な火山降下物等の略称と年代は次の通りである。

As-B（浅間Ｂ軽石：1108 年）、Hr-FP（榛名二ッ岳伊香保テフラ：６世紀中葉）、Hr-FA（榛名二ッ岳渋川テフラ：６世紀初頭）、As-C（浅間Ｃ軽石：３世紀後葉～４世紀前半）

oumi031.indd　10　　2010/11/17　12:19:41

目　　次

口絵１
口絵２
はじめに
例言・凡例

Ⅰ　調査に至る経緯・・・

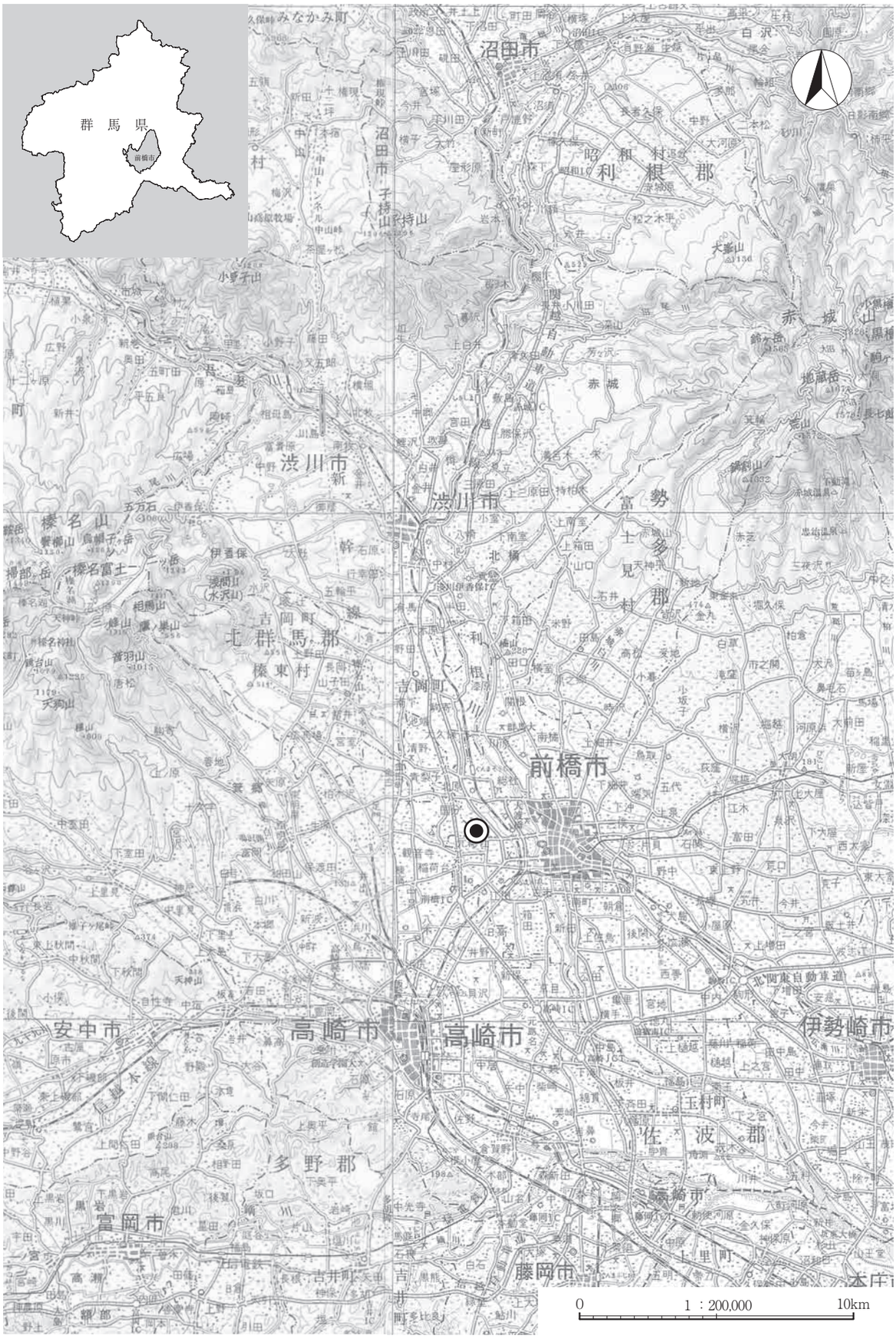


Fig.1　遺跡の位置

oumi031.indd　12　　2010/11/17　12:19:42

Ⅰ　調査に至る経緯

本発掘調査は、前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴い実施され、10年目にあたる。本調査地は、周辺で埋蔵文化財調査が長年にわたって行われていることから、遺跡地であることが確認されている。
平成21年12月2日付けで前橋市長 高木政夫（区画整理第二課）より埋蔵文化財発掘調査依頼が前橋市教育委員会に提出された。教育委員会ではこれを受け、内部組織である前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団長 戸塚良明(以下「調査団」という。)に発掘調査の実施について協議を行った。しかし、調査団では既に直営による発掘調査を実施しており、調査団直営による調査の実施が困難であるため、民間調査組織に業務を委託したいとの回答をした。民間調査組織の導入については、依頼者である前橋市の合意も得られ、平成22年1月7日付けで前橋市と調査団との間で発掘調査業務契約を締結し、その後、1月14日付けで調査団と民間調査組織である技研測量設計株式会社 代表取締役社長 嶋田大和との間で発掘調査業務契約を締結し、発掘調査を開始した。

なお、遺跡名称「元総社蒼海遺跡群(31)」（遺跡コード：21A130-31）の「元総社蒼海」は区画整理事業名を採用し、数字の「(31)」は過年度に実施した調査と区別するために付したものである。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

遺跡の位置　本調査地は、前橋市街地から利根川を隔て、西へ約3kmの地点、前橋市元総社地内に所在し、西約0.7 kmには関越自動車道が南北に、南には国道17号、主要地方道前橋・群馬・高崎線が東西に、また東約0.5kmには市道大友・石倉線が南北にそれぞれ走っている。本調査地の立地する地形は、前橋台地上、榛名山麓を源にする牛池川、染谷川が開析・形成した細長い微高地との比高３～５ｍを測る。遺跡が立地する台地上は主として桑畑などの畠地として利用されているが、本遺跡地の所在する位置は現在住宅地が立ち並ぶ中心地にあたる。

歴史的環境　本遺跡が立地する元総社地域には上野国府推定地や上野国分寺を中心に連綿と遺跡が広がる地域である。周辺では関越自動車道建設や区画整理事業等に伴う発掘調査が行われており、多くの遺物・遺構が確認されている。本遺跡周辺地域における時代ごとの遺跡の概要は以下の通りである。

縄文時代の遺跡は八幡川右岸の微高地上に産業道路東［15］・産業道路西［16］・総社閑泉明神北Ⅲ遺跡［61］、本遺跡の立地する牛池川右岸台地上に上野国分僧寺・尼寺中間地域［22］・元総社小見Ⅲ遺跡［59］・元総社蒼海遺跡群（24）などが挙げられ、竪穴住居跡が確認されている。

弥生時代の遺跡としては日高遺跡［18］・［19］、上野国分僧寺・尼寺中間地域［22］、正観寺遺跡［21］等があるがその分布は散漫である。

古墳時代になると本遺跡周辺の区域は県内でも中心的な地域であったことが窺われる。それを示すものとして総社古墳群が挙げられ、古墳時代後期・終末期に至り、王山古墳［７］、二子山古墳［12］、愛宕山古墳［10］、宝塔山古墳［13］、蛇穴山古墳［８］等の首長墓が多数築造された。

奈良・平安時代に至ると、本遺跡周辺は上野国府、国分寺［２］、国分尼寺［３］、山王廃寺［４］の建設に示されるように古代の政治・経済・文化の中心地として再編成される。

上野国府は本遺跡付近の区域におよそ900ｍ四方に推定され、関連遺跡として元総社小学校校庭遺跡［14］、元総社寺田遺跡［43］、元総社宅地遺跡［55］などがある。また元総社明神遺跡［24］では南北方向の溝跡、閑泉樋遺跡［25］では東西方向の大溝が確認され、国府域の東外郭線が想定された。

国分寺は昭和55年以降の調査により、主要伽藍の礎石、築垣、堀等が確認されている。国分尼寺は昭和44・45年のトレンチ調査により伽藍配置が推定され、その後平成12年の前橋市埋蔵文化財発掘調査団の確認調査により、東南隅と西南隅の築垣、それと平行する溝跡や道路状遺構が確認された。関連遺跡として中尾遺跡［17］、

oumi031.indd　1　　2010/11/17　12:19:43

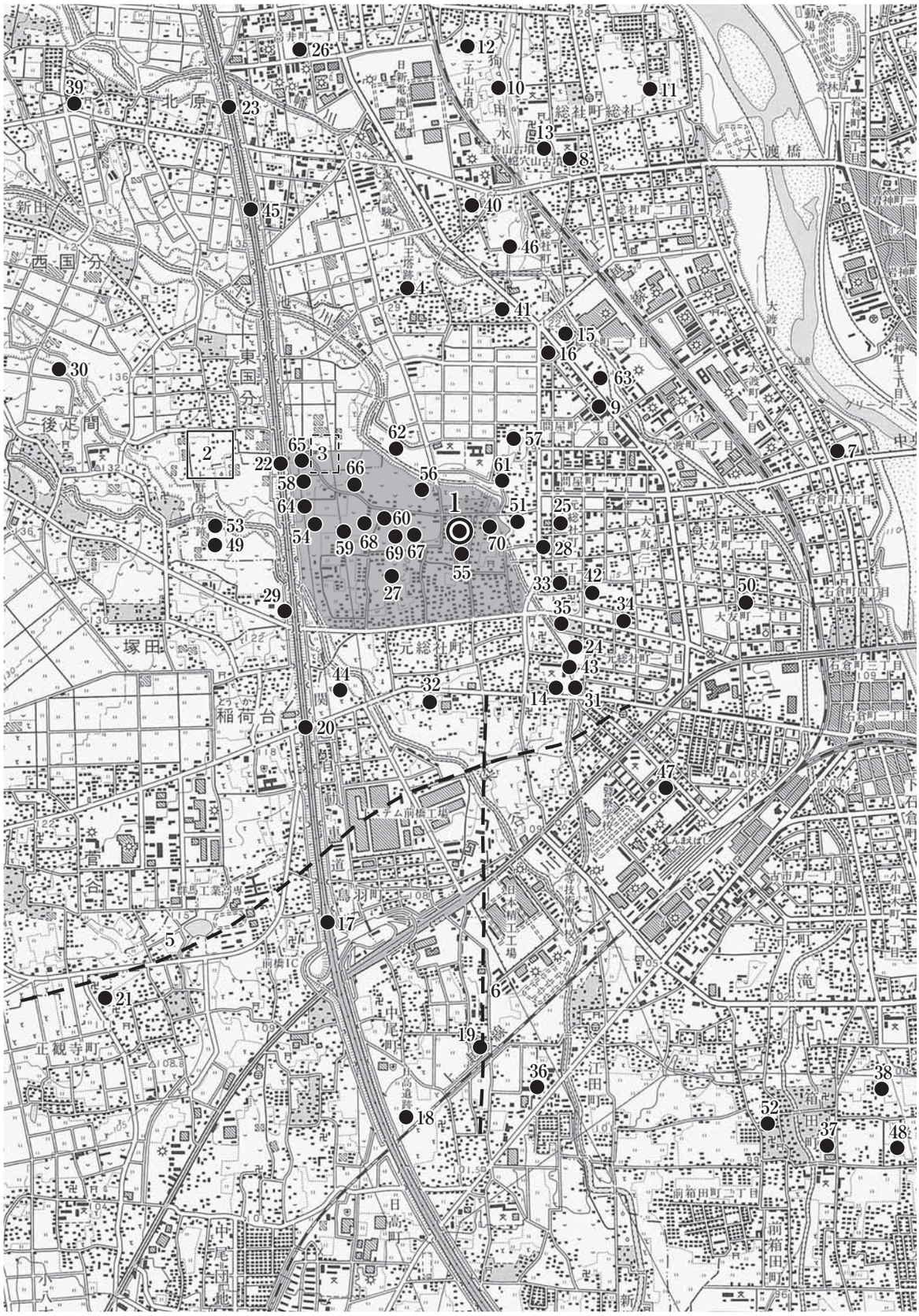


Fig. 2　周辺遺跡図

oumi031.indd　2　　2010/11/17　12:19:44

鳥羽遺跡［20］、上野国分僧寺・尼寺中間地域［22］などが挙げられる。

山王廃寺は昭和３年に日枝神社境内が「山王塔址」として国指定史跡となり、その後昭和 49 ～ 56 年にかけて７次にわたる本格的な発掘調査が行われた。この調査で金堂の検出および「放光寺」箆書の平瓦出土により山王廃寺が「山ノ上碑」「上野交替実録帳」にみられる「放光寺」であることが有力視されるようになった。また平成９～ 11 年の調査でも土坑から大量の塑像が出土、平成 18・19 年の調査では北・東・西面の回廊を検出している。

また本遺跡の南約 1.5km にはＮ－ 64°－ Ｅ方向に東山道（国府ルート）が、日高遺跡［19］では幅約 4.5 ｍの推定日高道が国府方向へ延びると推定されている。これらは当時の交通網を物語る重要な遺構である。

室町時代になると上野国守護上杉氏から守護代に任命された長尾氏が蒼海城を本拠地としこの地を治めた。元総社蒼海遺跡群では蒼海城の堀跡や、南宋～元時代の青白磁梅瓶が出土している。また本遺跡周辺には屋敷に堀を巡らした城館跡が数多く認められる。

天正年間以降は諏訪・秋元氏が蒼海城に入り当地の領主となるが、秋元氏が総社城に移ると同時に蒼海城は廃城となった。

Tab.1　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	調査年度	時代：主な遺構・出土遺物
1	元総社蒼海遺跡群（31）	2009	本遺跡
2	上野国分寺跡（県教委）	1980～88	奈良：金堂基壇・塔基壇
3	上野国分尼寺跡	（1999）	奈良：西南隅・東南隅築垣
4	山王廃寺跡	（1974）	奈良：塔心礎・根巻石・金堂基壇・講堂版築・回廊礎石
5	東山道（推定）	－	
6	日高道（推定）	－	
7	王山古墳	1972	古墳：前方後円墳（６ｃ中）
8	蛇穴山古墳	1975	古墳：方墳（８ｃ初）
9	稲荷山古墳	1988	古墳：円墳（６ｃ後半）
10	愛宕山古墳	1996	古墳：円墳（7ｃ初）
11	遠見山古墳	未調査	古墳：前方後円墳（５ｃ後半）
12	総社二子山古墳	未調査	古墳：前方後円墳（６ｃ末～７ｃ初）
13	宝塔山古墳	未調査	古墳：方墳（７ｃ末）
14	元総社小学校校庭遺跡	1962	平安：掘立柱建物跡・柱穴群・周濠跡
15	産業道路東遺跡	1966	縄文：住居跡
16	産業道路西遺跡		縄文：住居跡
17	中尾遺跡（事業団）	1976	奈良・平安：住居跡
18	日高遺跡（事業団）	1977	弥生：水田跡・方形周溝墓・住居跡・木製農具、平安：条里制水田跡
19	日高遺跡（高崎市）	（1978）	弥生：水田跡
20	鳥羽遺跡（事業団）	1978～83	古墳：住居跡・鍛冶場跡、奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡（神殿跡）
21	正観寺遺跡Ⅰ～Ⅳ（高崎市）	1979～81	弥生：住居跡、古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡、中世：溝跡
22	上野国分僧寺･尼寺中間地域（事業団）	1980～83	縄文：住居跡・配石遺構、弥生：住居跡・方形周溝墓、古墳：住居跡、 奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡、中世：掘立柱建物跡・溝状遺構・道路状遺構
23	北原遺跡(群馬町)	1982	縄文：土坑・集石遺構、古墳：水田跡、奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡
24	元総社明神遺跡Ⅰ～ⅩⅢ	1982～96	古墳：住居跡・水田跡・堀跡、奈良・平安：住居跡・溝跡、中世：住居跡・溝跡
25	閑泉樋遺跡	1983	奈良・平安：溝跡
26	柿木遺跡･Ⅱ遺跡	1983、1988	奈良・平安：住居跡・溝跡
27	草作遺跡	1984	古墳：住居跡、平安：住居跡、中世：井戸跡
28	閑泉樋南遺跡	1985	古墳：住居跡、奈良・平安：溝跡
29	塚田村東遺跡（群馬町）	1985	平安：住居跡
30	後疋間遺跡Ⅰ～Ⅲ（群馬町）	1985～87	古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡、中世：道路状遺構
31	寺田遺跡	1986	平安：溝跡
32	天神遺跡･Ⅱ遺跡	1986、88	奈良・平安：住居跡
33	屋敷遺跡･Ⅱ遺跡	1986、95	古墳：住居跡、平安：住居跡、中世：堀跡・石敷遺構
34	堰越遺跡	1987	奈良・平安：住居跡・溝跡
35	大友屋敷Ⅱ・Ⅲ遺跡	1987	古墳：住居跡、平安：住居跡・溝跡・地下式土坑
36	勝呂遺跡	1987	平安：水田跡
37	村前遺跡	1987	平安：溝状遺構・水田跡
38	五反田遺跡	1987	平安：水田跡
39	熊野谷遺跡	1988	縄文：住居跡、平安：住居跡・溝跡
40	村東遺跡	1988	古墳：住居跡・溝跡、奈良・平安：住居跡、中世：堀跡
41	昌楽寺廻向遺跡･Ⅱ遺跡	1988	奈良・平安：住居跡
42	堰越Ⅱ遺跡	1988	平安：住居跡
43	元総社寺田遺跡Ⅰ～Ⅲ（事業団）	1988～91	古墳：水田跡・溝跡、奈良・平安：住居跡、中世：溝跡
39	熊野谷Ⅱ･Ⅲ遺跡	1989	平安：住居跡
44	弥勒遺跡･Ⅱ遺跡	1989、95	古墳：住居跡、平安：住居跡
45	国分境遺跡（事業団）	1990	古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡
45	国分境Ⅱ遺跡	1991	古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡
45	国分境Ⅲ遺跡（群馬町）	1991	古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡・畠跡、中世：土壙墓
46	大屋敷遺跡Ⅰ～Ⅵ	1992～2000	縄文：住居跡、古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡、中世：掘立柱建物跡・地下式土坑・溝跡
47	元総社稲葉遺跡	1993	縄文：土坑、平安：住居跡・瓦塔
48	五反田Ⅱ遺跡	1995	平安：水田跡
49	上野国分寺参道遺跡	1996	古墳：住居跡、平安：住居跡

oumi031.indd　3　　2010/11/17　12:19:45

番号	遺跡名	調査年度	時代：主な遺構・出土遺物
50	大友宅地添遺跡	1998	平安：水田跡
51	総社閑泉明神北遺跡	1999	古墳：畠跡・水田跡・溝跡、中世：溝跡
52	箱田川西遺跡	1999	古墳：溝状遺構、平安：水田跡
53	元総社西川遺跡（事業団）	2000	古墳：住居跡・畠跡、奈良・平安：住居跡・溝跡
54	元総社小見遺跡	2000	縄文：住居跡、古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡・溝・道路状遺構
55	元総社宅地遺跡１～23トレンチ	2000	古墳：住居跡、平安：住居跡・掘立柱建物跡・鍛冶場跡・溝跡・道路状遺構、中世：溝跡、近世：住居跡
56	元総社小見内Ⅲ遺跡	2001	古墳：住居跡・溝跡、奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡・溝跡、中世：掘立柱建物跡・溝跡
57	総社甲稲荷塚大道西遺跡	2001	奈良・平安：住居跡・溝跡、中世：畠跡、近世：溝跡
57	総社甲稲荷塚大道西Ⅱ遺跡	2001	古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡・溝跡、近世：溝跡
51	総社閑泉明神北Ⅱ遺跡	2001	古墳：住居跡・溝跡、平安：住居跡・溝跡
58	元総社小見Ⅱ遺跡	2002	縄文：住居跡、古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡、中世：溝跡・道路状遺構
59	元総社小見Ⅲ遺跡	2002	縄文：住居跡、古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡・溝跡、中世：溝跡・道路状遺構
59	元総社草作Ⅴ遺跡	2002	古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡、中世：溝跡
60	元総社小見内Ⅳ遺跡	2002	奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡・溝跡、中世：土壙墓
61	総社甲稲荷塚大道西Ⅲ遺跡	2002	古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡・畠跡・溝跡
61	総社閑泉明神北Ⅲ遺跡	2002	縄文：住居跡、古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡
62	元総社北川遺跡（事業団）	2002～04	古墳：水田跡、奈良・平安：住居跡・畠跡、中近世：掘立柱建物跡、水田跡・火葬墓
63	稲荷塚道東遺跡（事業団）	2003	古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡・溝跡・竈構築材採掘痕・井戸跡
64	元総社小見Ⅳ遺跡	2003	縄文：住居跡、古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡、中世：溝跡
65	元総社小見Ⅴ遺跡	2003	縄文：住居跡、古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡、中世：掘立柱建物跡
61	総社甲稲荷塚大道西Ⅳ遺跡	2003	古墳：畠跡、中世：畠跡
60	元総社小見内Ⅵ遺跡	2003	奈良・平安：住居跡・溝跡、中世：井戸跡
66	元総社小見内Ⅶ遺跡	2003	縄文：住居跡、奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡、中世：畠跡・溝跡
67	元総社小見内Ⅷ遺跡	2003	奈良・平安：住居跡・溝跡、中世：竪穴状遺構
64	元総社小見Ⅵ遺跡	2004	縄文：住居跡、古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡
68	元総社小見Ⅸ遺跡	2004	奈良・平安：住居跡、中世：溝跡
68	元総社小見内Ⅸ遺跡	2004	奈良・平安：住居跡、中世：溝跡
69	元総社小見内Ⅹ遺跡	2004	古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡・工房跡・粘度採掘坑、中世：溝跡・土壙墓
70	総社閑泉明神北Ⅴ遺跡	2004	古墳：水田跡、奈良・平安：住居跡
－	元総社蒼海遺跡群（１）	2005	奈良・平安：住居跡・溝跡、中世：溝跡・土壙墓
－	元総社蒼海遺跡群（２）	2005	奈良・平安：住居跡・溝跡、中世：溝跡・土壙墓
－	元総社蒼海遺跡群（３）・元総社小見Ⅶ遺跡	2005	縄文：住居跡、古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡
－	元総社蒼海遺跡群（４）	2005	縄文：住居、古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡
－	元総社蒼海遺跡群（５）	2005	古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡・溝跡、中世：周溝上遺構・土壙墓
－	元総社蒼海遺跡群（６）	2005	奈良・平安：住居跡・溝跡、中世：溝跡・土壙墓
－	元総社蒼海遺跡群（７）	2005	奈良・平安：住居跡・溝跡
－	元総社蒼海遺跡群（８）	2006	奈良・平安：住居跡
－	元総社蒼海遺跡群（９）・（10）	2006	縄文：竪穴住居跡、古墳：竪穴住居跡、奈良・平安：竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝跡・土坑、中世：溝跡
－	元総社蒼海遺跡群（11）	2006	古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡、中世：溝跡
－	元総社蒼海遺跡群（12）	2006	古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡、中世：井戸跡
－	元総社蒼海遺跡群（13）	2008	縄文：住居跡、古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡・工房跡中・溝跡、中世：溝跡・土壙墓
－	元総社蒼海遺跡群（14）	2008	古墳：住居跡・水田跡、奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡、中世：溝跡・竪穴状遺構・井戸跡
－	元総社蒼海遺跡群（15）	2008	奈良・平安：住居跡・溝跡、中世：溝跡
－	元総社蒼海遺跡群（16）	2008	奈良・平安：住居跡・畠跡、中世：溝跡
－	元総社蒼海遺跡群（17）	2008	古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡・竪穴状遺構、中世以降：土壙墓・井戸跡、不明：住居跡・溝跡
－	元総社蒼海遺跡群（18）	2008	平安：住居跡
－	元総社蒼海遺跡群（19）	2008	古墳：小区画水田跡、中世：井戸跡
－	元総社蒼海遺跡群（20）	2008	古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡・竪穴状遺構・溝跡、中世：土壙墓・溝跡
－	元総社蒼海遺跡群（21）	2009	中世：蒼海城の堀跡・盛土状遺構
－	元総社蒼海遺跡群（22）	2009	古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡
－	元総社蒼海遺跡群（23）	2009	古墳：住居跡、平安：土坑、中世：蒼海城の堀跡
－	元総社蒼海遺跡群（24）	2009	縄文：住居跡、古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡・竪穴状遺構、中世：方形竪穴・井戸跡
－	元総社蒼海遺跡群（25）	2009	古墳：住居跡、平安：住居跡、中世：南宋～元時代の青白磁梅瓶２個体
－	元総社蒼海遺跡群（29）	2009	古墳～平安：竪穴住居跡、中近世：掘立柱建物跡・土壙墓・火葬跡・地下式坑・蒼海城の堀跡
－	元総社蒼海遺跡群（30）	2009	古墳：住居跡、平安：住居跡、中世：道路状遺構・土壙墓・火葬跡・堀跡

参考文献

前橋市埋蔵文化財発掘調査団　2000　『元総社小見遺跡』

前橋市埋蔵文化財発掘調査団　2001　『元総社小見内Ⅲ遺跡』

前橋市埋蔵文化財発掘調査団　2002　『元総社小見内Ⅳ遺跡』

前橋市埋蔵文化財発掘調査団　2002　『元総社小見Ⅲ遺跡・元総社草作Ⅴ遺跡』

前橋市埋蔵文化財発掘調査団　2003　『元総社小見内Ⅶ遺跡』

前橋市埋蔵文化財発掘調査団　2003　『元総社小見内Ⅷ遺跡・総社甲稲荷塚大道西Ⅳ遺跡』

前橋市埋蔵文化財発掘調査団　2005　『元総社小見内Ⅸ遺跡・総社閑壱泉明神北Ⅴ遺跡』

oumi031.indd　4　　2010/11/17　12:19:45

Ⅲ　調査の方針と経過

1　調査範囲と基本方針

委託調査箇所は、前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業の道路予定地で、調査面積は 915 ㎡である。グリッド座標については国家座標（日本測地系）X ＝＋ 44000.000 m・Y ＝－ 72200.000 を基点とする 4 m ピッチのものを使用し、経線をX、緯線をYとして、北西隅を基点に付番して呼称とした。

本遺跡のX 200・Y 150 の公共座標は以下のとおりである。

日本測地系	X ＝＋ 43400.0000	Y ＝－ 71400.0000
世界測地系	X ＝＋ 43754.9068	Y ＝－ 71691.7621

発掘調査は調査区内に排土置き場設置の関係上、調査区を西・東に二分割し西側から調査を開始、調査終了後西側調査区を埋め戻し東側調査区へ移行した。表土掘削は試掘調査の結果をふまえ遺構確認面まで重機（0.25 バックホー）で掘削を行った。遺構の確認・掘削は発掘作業員により移植コテ・鋤簾などで慎重に行われた。遺構調査に関しては土層の堆積状況を確認するために土層ベルトを住居跡は主軸方向、土坑・ピット等は長軸方向を基本として設定した。住居跡の遺物に関しては床面直上や住居跡に伴うものは No 遺物とし、覆土中の破片は一括遺物として取り上げた。

遺構図化については空中写真測量と電子平板を用いて平面図・断面図の測量・編集を行った。断面図についてはオルソーフォトに変換して編集を行った。遺構の記録写真については 35mm カラーフィルム・リバーサルフィルム・デジタルカメラの３種類を用いて担当者が撮影、遺跡全体に対してはラジコンヘリコプターによる空中撮影を実施した。

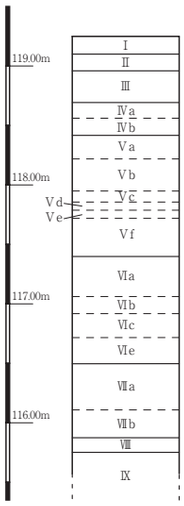
2　調査経過

本遺跡の発掘調査は平成 22 年 1 月 18 日から 3 月 12 日まで実施した。調査経過の概略は以下のとおりである。

1 月 18 日　西側調査区表土掘削開始。	2 月 15 日　西側調査区埋め戻し。	3 月 3 日　東側調査区全景撮影・測量。
1 月 22 日　遺構調査開始。	2 月 18 日　東側調査区表土掘削開始。	3 月 8 日　東側調査区埋め戻し。
2 月 10 日　西側調査区全景撮影・測量。	2 月 22 日　遺構調査開始。	3 月 12 日　発掘調査の全工程を終了する。

Ⅳ　基本層序

本遺跡は牛池川の南岸段丘上の平坦地に立地している。調査区内は南へと緩やかに傾斜しているが堆積状況に大きな差異が認められないため、比較的良好な状態が見られるW－１号溝の掘り込みを利用して基本層序として観察した。



Ⅰ.　表土層
Ⅱ.　暗灰褐色土　近世・近代の堆積層。締まり有、粘性強い。
Ⅲ.　暗褐色土　As-C軽石をやや多量、焼土粒を微量含む。締まりやや有り、粘性やや弱い。
Ⅳa.　黄褐色砂質土　砂礫の小ブロックで構成される。締まり有、粘性弱い。
Ⅳb.　黄褐色砂質土　砂層。締まりやや強い、粘性弱い。
Ⅴa.　黄灰色砂質土　砂層。締まり強い、粘性弱い。
Ⅴb.　黄灰色砂質土　砂礫層とシルト層の互層。締まり強い、粘性弱い。
Ⅴc.　黄灰色砂質土　シルト層。締まり強い、粘性弱い。
Ⅴd.　黄灰色砂質土　砂礫層。締まり強い、粘性弱い。
Ⅴe.　黄灰色砂質土　砂層。締まりやや強い、粘性弱い。
Ⅴf.　黄灰色砂質土　砂礫層。締まり強い、粘性弱い。
Ⅵa.　青灰色砂質土　砂層と砂礫層の互層。締まり強い、粘性弱い。
Ⅵb.　青灰色砂質土　砂礫層。締まり強い、粘性弱い。
Ⅵc.　青灰色砂質土　砂層。葉理が比較的明瞭。締まり強い、粘性弱い。
Ⅵd.　青灰色砂質土　シルト層。締まりやや強い、粘性弱い。
Ⅶa.　黄灰色粘質土　黄灰色粘質土と青灰色シルト質土の互層。締まりやや強い、粘性やや強い。
Ⅶb.　黄灰色粘質土　中位に青灰色シルト質層の間層が入る。締まりやや強い、粘性強い。
Ⅷ.　黒褐色砂質土　黄白色のテフラを少量含む。締まりやや強い、粘性弱い。
Ⅸ.　暗褐色粘質土　締まり強い粘土層。締まり強い、粘性やや強い。

Fig.3　基本層序

oumi031.indd　5　　2010/11/17　12:19:46

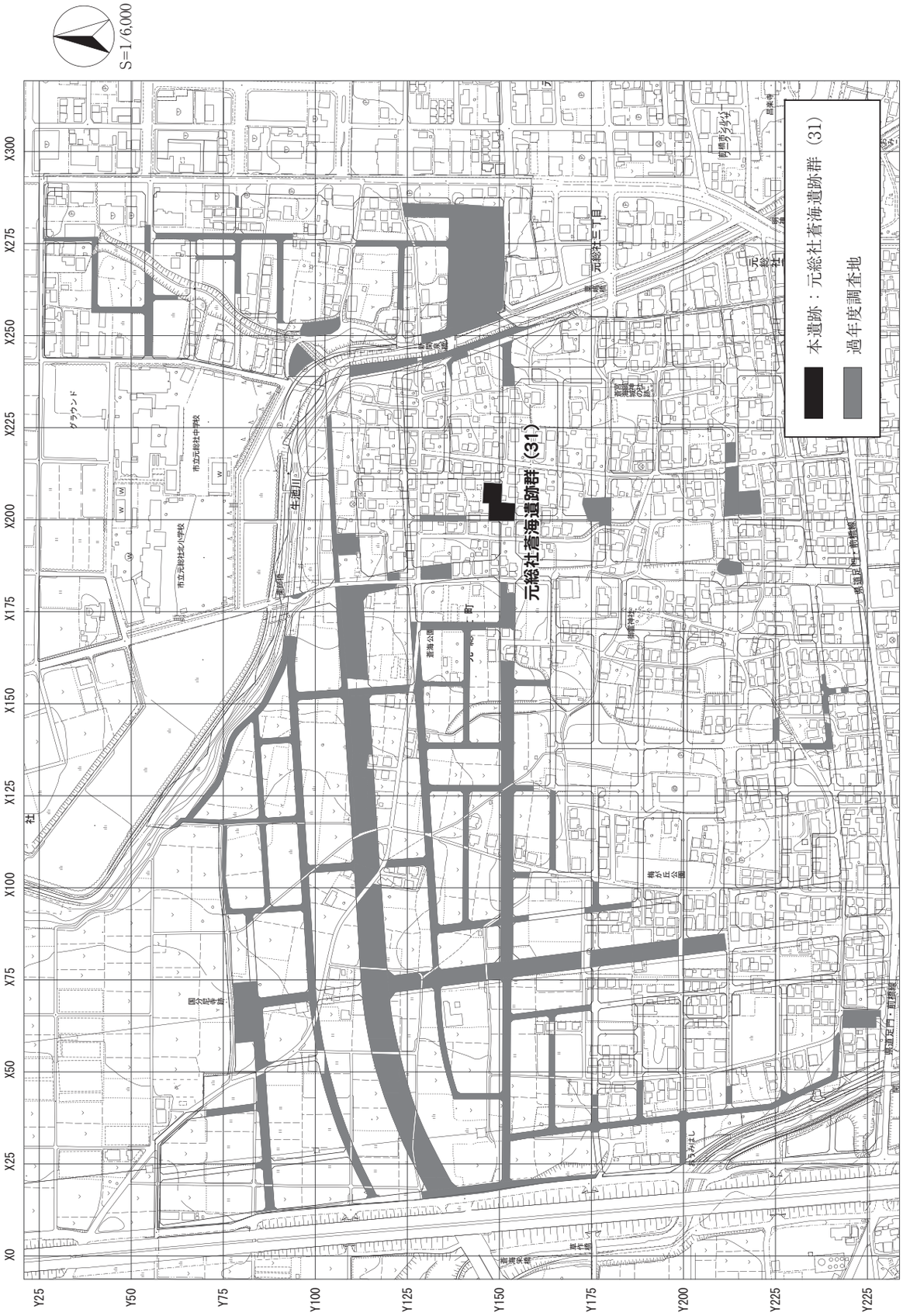


Fig.4　元総社蒼海遺跡群位置図とグリッド設定図

oumi031.indd　6　　2010/11/17　12:19:48

Ⅴ　遺構と遺物

１　竪穴住居跡

Ｈ－１号住居跡（Fig. ６・20、PL ２・６）

位置　X201、Y153・154　**主軸方向**　Ｎ－76°－Ｅ　**規模**　東西軸（2.86）ｍ、南北軸（1.17）ｍ、壁現高0.18m。住居跡範囲の大部分が調査区外。　**面積**　（1.33）㎡　**床面**　地山硬化床。比較的平坦で部分的に硬化面が確認できる。　**竈**　検出されず。　**出土遺物**　北東部床面直上で正位２枚重ねの坏（１・２）と甕（３）を出土。（３）は胎土中に石英・片岩などの小礫がやや多く混じる。　**時期**　出土遺物の傾向から古墳時代後期（６世紀後半～７世紀前半）と想定される。

Ｈ－２号住居跡（Fig. ６、PL ２）

位置　X201、Y153　**主軸方向・規模**　不明。　**硬化面範囲**　長軸 2.22 ｍ、短軸 1.89 ｍ。　**面積**　不明　**壁面**　確認時点で床面が露出しているため部分的に残存も図化しえなかった。　**床面**　暗褐色土・As-C をやや多く含む貼床土。若干被熱し部分的に焼土化する。平坦。　**重複**　Ｈ－３、Ｗ－５と重複しており、新旧関係はＨ－３→Ｗ－５→本遺構である。　**出土遺物**　覆土中から土師器小片を出土。　**時期**　重複関係からＨ－３（古墳時代後期）以降と想定される。　**備考**　床上面まで後世の削平を受けているため、床面硬化範囲のみの検出となった。

Ｈ－３号住居跡（Fig. ６、PL ２）

位置　X200・201、Y152・153　**主軸方向**　Ｎ－３°－Ｅ　**規模**　南北軸（5.69）ｍ、東西軸（5.16）ｍ、壁現高９cm。南部は上面からの削平により消失。　**面積**　（17.88）㎡　**床面**　地山硬化床。比較的平坦、北西部にのみ硬化面がみられる。　**壁面**　北面及び東面の一部のみ浅い立ち上がり。他所は上面からの削平により消失。　**竈**　検出されず。状況から北あるいは東壁面に位置すると想定されるが、Ｗ－５・上面からの削平によって消失。　**重複**　Ｈ－２、Ｗ－５、Ｉ－１と重複しており、新旧関係は本遺構→Ｗ－５→Ｈ－２・Ｉ－１である。　**出土遺物**　覆土中から土師器小片を出土。　**時期**　出土遺物の傾向から古墳時代後期（６世紀後半～７世紀前半）と想定される。　**備考**　掘り方時にピットを３基検出。

Ｈ－４号住居跡（Fig. ７・20、PL ２・６）

位置　X202・203、Y152・153　**主軸方向**　Ｎ－23°－Ｅ　**規模**　南北軸 7.64 ｍ、東西軸（7.14）ｍ、壁現高0.40m。東端部はＷ－２によって消失。　**面積**　（33.22）㎡　**床面**　地山硬化床。比較的平坦で中央部に硬化面が広がる。北・西・南壁付近の一部には浅い掘り込みに貼床が施されている。　**竈**　検出されず。状況から東壁面に位置すると想定。　**壁周溝**　北西部に部分的に残存。浅い掘り込み。　**主柱穴**　３基。深さは P1：0.61 ｍ、P2：0.57 ｍ、P3：0.55 ｍ、柱穴間は 3.80 ～ 3.99 ｍを測る。　**重複**　Ｈ－４、Ｗ－２と重複しており、新旧関係は本遺構→Ｈ－４、Ｗ－２である。　**出土遺物**　須恵器坏（１）、土師器坏（２～６）、土師器高坏（７）を図示。（２・３）は床面直上からの出土。　**時期**　重複関係・出土遺物の傾向から古墳時代後期（６世紀後半～７世紀前半）と想定。　**備考**　中央部やや東側に床下土坑を確認。

Ｈ－５号住居跡（Fig. ８・９・20・21、PL ２・６）

位置　X201・202、Y150・151　**主軸方向**　Ｎ－90°－Ｅ　**規模**　東西軸 5.21 ｍ、南北軸 4.88 ｍ、壁現高0.44m。　**面積**　18.81 ㎡　**壁面**　北・西壁の一部はＨ－６と共通。　**床面**　中央部から北西部にかけて（Ｈ－６）の大部分に貼床が施されている。東・南壁付近では地山硬化床。比較的平坦で竈周辺部では硬化が顕著。

竈　東壁面中央部に位置。確認長 0.84 ｍ、燃焼部幅 0.71 ｍ。天井部は完全に崩落しており、構築材は暗褐色の粘質土を使用している。燃焼部底面と煙道部へと立ち上がる壁面は被熱で焼土化。燃焼部から煙道へはほぼ平坦に近い傾斜角であり、奥壁で急傾斜に立ち上がる。袖は両側とも崩落しており範囲が確認できるのみである。残

oumi031.indd　7　　2010/11/17　12:19:49

存長は右袖 0.50 m、左袖 0.39 m。　**壁周溝**　ほぼ全周を巡り、断面逆台形を呈する。H－６の壁周溝を一部踏襲している可能性が高い。床面からの深さは７～８cm。　**貯蔵穴**　南東部に位置し、平面円形を呈する。深さは 0.58 m。　**主柱穴**　４基。深さは P1：0.50 m、P2：0.40 m、P3：0.20 m、P4：0.44 m、柱穴間は 2.77 ～ 2.85 mを測る。　**重複**　H－４・６、A－１と重複しており、新旧関係はH－４・６→本遺構→A－１である。
出土遺物　床面直上から須恵器蓋（１）、土師器坏（２～６）、覆土中から土師器坏（７・８）が出土。こも編石は住居跡南西壁際の床面直上から列状を成して確認された。　**時期**　出土遺物の傾向から古墳時代後期（６世紀後半～７世紀前半）と想定される。

H－６号住居跡（Fig. ９・10、PL ３）

位置　X201・202、Y150・151　**主軸方向**　N － 90°－ E　**規模**　東西軸 4.32 m、南北軸 4.04 m、壁現高 0.43m。上面はH－５築造時に削平され貼床が施されている。やや小型の住居跡である。　**面積**　13.07 ㎡　**床面**　地山硬化床。比較的平坦である。　**竈**　東壁面に位置。確認長 0.72 m、燃焼部幅 0.48 m。H－５貼床下から確認。構築材として黒褐色の粘質土を使用。燃焼部底面は被熱し部分的に若干焼土化している。燃焼部は若干凹み、煙道部へ向かってやや急傾斜に立ち上がる。袖は両側とも崩落し僅かに残存、右袖には心材（凝灰岩切石）が露出している。残存長は右袖 0.54 m、左袖 0.32 m。　**壁周溝**　ほぼ全周を巡り、断面逆台形を呈する。床面からの深さは７cm 前後。　**貯蔵穴**　南東隅に位置し、平面円形を呈する。深さは 0.38 m　**主柱穴**　４基。深さは P1：0.39 m、P2：0.49 m、P3：0.37 m、P4：0.23 m、柱穴間は 1.80 ～ 1.85 mを測る。　**重複**　H－５と重複しており、新旧関係は本遺構→H－５である。　**出土遺物**　極小であり、図示しえない。　**時期**　判然としないが、重複関係・竈を有することから古墳時代中～後期と想定。　**備考**　H－５壁面・壁周溝の一部がH－６のそれを踏襲している可能性があることから、H－６からH－５への住居域拡張も想定するべきであろう。

H－７号住居跡（Fig.10・11・21、PL ３・６）

位置　X201・202、Y148 ～ 150　**主軸方向**　N － 59°－ E　**規模**　南北軸 5.73 m、東西軸 5.64 m、壁現高 0.51m。　**面積**　（23.95）㎡　**床面**　地山硬化床。比較的平坦、部分的に攪乱を受け消失。　**竈**　西壁面やや南側に位置。確認長 0.98 m、燃焼部幅（0.83）m。天井部は崩落しており、構築材は暗褐色の粘質土を使用。焚口付近の底面が被熱し焼土化している。燃焼部から煙道にかけては緩やかに傾斜する。また燃焼部内底面には支脚が設置されていた穴が確認されたが、支脚と考えられる遺物は確認されていない。袖は右側が後世の削平により消失、左側は心材の凝灰岩切石が残存する。燃焼部には焚口天井に配されたと考えられる凝灰岩切石が崩落している。　**壁周溝**　北・南壁際に部分的に残存。床面からの深さは７cm 前後。　**貯蔵穴**　南西隅に位置し、平面方形を呈する。深さは 0.54 m　**主柱穴**　４基。深さは P1：0.67 m、P2：0.63 m、P3：0.68 m、P4：0.64 m、柱穴間は 2.35 ～ 3.01 mを測る。　**出土遺物**　覆土中から土師器・須恵器が出土しているが少ない。須恵器瓶（１）、土師器坏（２）、土師器甕（３）を図示。　**時期**　出土遺物の傾向から古墳時代後期（６世紀後半～７世紀前半）と想定。

H－８号住居跡（Fig.11・21、PL ３・６）

位置　X200・201、Y147・148　**主軸方向**　N － 27°－ E　**規模**　東西軸 5.62 m、南北軸（3.64）m、壁現高 0.24m。北半部をW－１によって消失。　**面積**　（9.04）㎡　**壁面**　確認時点で床面が露出しているため部分的に残存。　**床面**　西部は地山硬化床。比較的平坦で東部は倒木痕の攪拌土。　**竈**　検出されず。状況から北あるいは東壁面に位置すると想定。　**壁周溝**　南～東壁に残存。西壁際にも部分的にみられる。　**主柱穴**　２基。深さは P1：0.80 m、P2：0.66 m、柱穴間は 3.00 mを測る。　**重複**　W－１と重複しており、新旧関係は本遺構→W－１である。　**出土遺物**　覆土中から土師器が出土しているが少ない。土師器高坏（１）を図示。　**時期**　出土遺物の傾向から古墳時代後期（６世紀後半～７世紀前半）と想定。

oumi031.indd　8　　2010/11/17　12:19:49

Ｈ－９号住居跡（Fig.12・21、PL ３・６）

位置　X205・206、Y147・148　**主軸方向**　Ｎ－16°－Ｅ　**規模**　東西軸3.58ｍ、南北軸（1.12）ｍ、壁現高0.20m。北半部をＷ－１と撹乱によって消失。　**面積**　（2.20）㎡　**床面**　地山硬化床。比較的平坦で一部倒木痕の攪拌土がみられる。　**竈**　検出されず。　**主柱穴**　２基。深さはP1：0.29ｍ、P2：0.30ｍ。　**重複**　Ｗ－１と重複しており、新旧関係は本遺構→Ｗ－１である。　**出土遺物**　覆土から土師器（１～３）・須恵器が少量出土している。　**時期**　出土遺物の傾向から７世紀前半と想定される。

Ｈ－10号住居跡（Fig.12・21、PL ３・６）

位置　X205・206、Y149・150　**主軸方向**　Ｎ－21°－Ｅ　**規模**　東西軸5.19ｍ、南北軸4.47ｍ、壁現高0.23m。全体的に後代の遺構・撹乱を受けている。南西部は上面からの削平で消失。　**面積**　（12.76）㎡　**床面**　地山硬化床。硬化面範囲は捉えきれず。比較的平坦。　**竈**　東壁面中央部に位置。確認長1.12ｍ、燃焼部幅0.49ｍ。天井部は崩落しており、構築材は暗褐色の粘質土を使用。燃焼部底面が被熱し若干焼土化している。燃焼部から煙道にかけては緩やかに傾斜し、奥壁ではＰ－51によって削平されているものの急傾斜に立ち上がると考えられる。袖は左袖がやや崩落し右袖は心材の石が確認できる。左袖と比較して若干ではあるが良好に残存する。共に灰白色の粘質土で構築されている。残存長は右袖0.58ｍ、左袖0.46ｍ。焚口手前には心材として使用されていたであろう石材が散乱しており、竈の破壊行為が行われたことが窺える。　**壁周溝**　北東隅に残存する。床面からの深さは６cm前後。　**貯蔵穴**　南東隅に位置し、平面円形を呈する。深さ0.80ｍ。　**主柱穴**　３基。深さはP1：0.45ｍ、P2：0.38ｍ、P3：0.43ｍ、柱穴間は2.07～2.24ｍを測る。　**住居内施設**　中央部に床下土坑（D1）１基。　**出土遺物**　覆土中から縄文土器、須恵器蓋（１）、高坏（２）、土師器坏（３・４）、土錘（５）が出土。　**時期**　出土遺物の傾向から古墳時代後期（６世紀後半～７世紀前半）と想定。

Ｈ－11号住居跡（Fig.13・21、PL ４・６）

位置　X205・206、Y150　**主軸方向**　Ｎ－16°－Ｅ　**規模**　東西軸5.27ｍ、南北軸（3.35）ｍ、壁現高0.21m。西側はＷ－４・上面からの削平により消失、南半部は調査区外。　**面積**　（9.08）㎡　**床面**　地山硬化床。比較的平坦。　**竈**　検出されず。南東隅のピット覆土に焼土粒がみられるため東壁面に位置する可能性がある。

壁周溝　北・東壁際に残存する。　**主柱穴**　２基。深さはP1：0.46ｍ、P2：0.48ｍ、柱穴間は2.22ｍを測る。　**住居内施設**　P3～７は性格不明。　**重複**　Ｈ－14、Ａ－１、Ｗ－４と重複しており、新旧関係は本遺構→Ｈ－14→Ａ－１・Ｗ－４である。　**出土遺物**　覆土から土師器・須恵器が出土している。須恵器高坏（１）、土師器坏（２・３）を図示。　**時期**　出土遺物の傾向から７世紀と想定。

Ｈ－12号住居跡（Fig.13・22、PL ４・６・７）

位置　X206・207、Y148・149　**主軸方向**　Ｎ－24°－Ｅ　**規模**　東西軸4.88ｍ、南北軸4.81ｍ、壁現高0.31m。北端部をＷ－１、南東部をＷ－４によって消失。　**面積**　（16.20）㎡　**床面**　地山硬化床。比較的平坦で中央部での硬化が顕著。　**竈**　検出されず。東壁面に位置すると想定。　**壁周溝**　西・南壁際に部分的に残存する。床面からの深さは３cm前後。　**主柱穴**　４基。深さはP1：0.24ｍ、P2：0.45ｍ、P3：0.39ｍ、P4：0.31ｍ、柱穴間は2.07～2.13ｍを測る。　**土坑**　１基。貯蔵穴の可能性も考えられるが平面不整形で判然としない印象を受ける。　**重複**　Ｈ－13、Ｗ－１・４と重複しており、新旧関係はＨ－13→本遺構→Ｗ－１・４である。　**出土遺物**　須恵器甕（１）、土師器坏（２～６）、甕（７・９）、甑（８）が出土。（２・９）は床面直上からの出土。　時期　出土遺物の傾向から古墳時代後期（６世紀後半～７世紀前半）と想定される。

Ｈ－13号住居跡（Fig.14、PL ４）

位置　X206・207、Y148　**主軸方向**　Ｎ－31°－Ｅ　**規模**　東西軸（5.58）ｍ、南北軸（3.53）ｍ、壁現高0.14m。北半部をＷ－１によって消失。　**面積**　（8.36）㎡　**床面**　南半部では地山硬化床、北半部では暗褐色土を含んだ貼床が施されている。比較的平坦。北端部では極端に下がり段状になるため別遺構・Ｗ－１の可

oumi031.indd　9　　2010/11/17　12:19:49

能性も考えられる。　竈　検出されず。　壁周溝　ほぼ全周を巡るが２cm 前後と浅い。　主柱穴　２基。深さはP1：0.56 m、P2：0.63 m。土層観察から P2 → P1 への柱の据え換えが行われたと考えられる。　重複　H－12、W－１と重複しており、新旧関係は本遺構→H－12→W－１である。　出土遺物　遺物少量のため図示し得なかった。　時期　判然としないが、重複関係から古墳時代後期（６世紀後半～７世紀前半）と想定。

H－14 号住居跡（Fig.14、PL ４）

位置　X207、Y150　主軸方向　N－24°－E　規模　東西軸（2.10）m、南北軸（1.11）m、壁現高 0.14m。大部分が調査区外。　面積　（0.87）㎡　床面　明確な硬化面は認められないが、調査区壁の土層観察では暗褐色土の貼床が確認できる。比較的平坦である。　竈　検出されず。　主柱穴　１基。深さは 0.49 m。　重複　H－11、A－１と重複しており、新旧関係はH－11→本遺構→A－１である。　出土遺物　覆土中から土師器小片が出土しているが少量。　時期　調査範囲が狭く、出土遺物も少ないため判然としない。

H－15 号住居跡（Fig.14・22、PL ４・７）

位置　X208・209、Y150　主軸方向　N－18°－E　規模　東西軸（3.02）m、南北軸（1.35）m、壁現高 0.08m。大部分が調査区外。　面積　（1.37）㎡　床面　地山硬化床。比較的平坦である。　竈　検出されていないが調査区断面において焼土ブロック（２層土）が確認できることから東壁に想定される。　壁周溝　北東隅に残存。床面からの深さは２～３cm。　主柱穴　１基。深さは 0.18 m。　出土遺物　覆土中から土師器坏（１）、柱穴埋土から土師器甕（長胴甕）小片が出土。　時期　出土遺物の傾向から古墳時代後期（６世紀後半～７世紀前半）と想定。

H－16 号住居跡（Fig.14、PL ４）

位置　X208・209、Y149・150　主軸方向　N－24°－E　規模　東西軸（2.82）m、南北軸（2.74）m、壁現高 0.02m。南半部はW－５によって消失、東半部は調査区外。　面積　（4.56）㎡　床面　大部分が地山硬化床。北壁付近の一部で貼床が認められる。比較的平坦。　竈　検出されず。　壁周溝　北・西壁際で確認。床面からの深さは５cm 前後。　主柱穴　２基。深さはP1：0.54 m、P2：0.32 m。柱穴間は 1.54 mを測る。　重複　A－１と重複しており、新旧関係は本遺構→A－１である。　出土遺物　遺物少量のため図示しえなかった。　時期　出土遺物が少なく判然としないため不明。

２　道路状遺構

A－１号道路状遺構（Fig.15、PL ４）

位置　X201 ～ 209、Y150　走行方向　N－88°－E　規模　長さ（32.61）m　最大幅 2.00 m　形状等　約 1.70 m幅で東西方向へほぼ直線的に伸びる。W－２～４間は上面からの削平により確認できず。断面浅いU字状を呈する。　硬化面　部分的に散在するが、西側では掘り込みを確認できるものの顕著な硬化面は検出されなかった。基盤層となる底面もやや硬化している様子が窺える。　重複　H－10・11、W－２・４と重複しており、新旧関係はH－10・13→本遺構→W－２・４である。　出土遺物　覆土中より土師器坏を出土。小片のため図示し得なかった。　時期　出土遺物が少なく判然としないため不明。

３　溝

W－１号溝（Fig.16・22、PL ４・５・７）

位置　X 199 ～ 209、Y 146 ～ 148　主軸方向　N－85°－W　規模　長さ（38.5）m　W－１ a：最大幅　上幅 4.00 m、下幅 0.52 m　深さ 3.18 m　W－１ b：最大幅　上幅（1.52）m、下幅（0.61）m　深さ 2.86 m　W－１ c：最大幅　上幅（0.81）m、下幅　未確認　深さ（3.81）m　形状等　調査区北端部で東西方向へ直線的に走行。覆土断面観察から３時期の堀跡を確認、 c → b → a の順で造り替えられたと考えられる。堀の形状はW－１ a・

oumi031.indd　10　　2010/11/17　12:19:49

ｂが箱薬研堀、ｃは底面の確認に至らないため不明。底面はW－１ａが平坦、W－１ｂは浅いU字状、共に湛水の痕跡は確認できない。　**出土遺物**　本遺構の時期に帰属すると考えられる遺物は皆無である。江戸時代後期以降に埋没したと考えられる覆土上層（１～５層土）よりかわらけ（１）、陶器（２）、焙烙（３）、擂鉢（４）、甕（５）、五輪塔（６）が出土している　**時期**　３時期の堀跡が造り替えられた時期を示す文献・遺物は今のところ確認されていない。少なくとも蒼海城が機能していた時期（15～17世紀前半）に帰属する。　**備考**　蒼海城の堀跡と考えられる。近隣住民の話によると昭和初期頃までは浅い窪み状に堀跡が確認できたという。

W－２号溝（Fig.17、PL ５）

位置　X 203・204、Y 149～154　**主軸方向**　N－7°－E　**規模**　長さ（20.64）m　最大幅　上幅4.02 m、下幅1.07 m　深さ1.44 m　**形状等**　調査区南北方向に直線的に走行し、中央部にて止まる。断面逆台形の箱掘で底面は平坦である。湛水の痕跡は確認できない。　**出土遺物**　覆土中より土師器・須恵器・陶器の小片が少量出土。大部分が混入したものと考えられる。　**時期**　蒼海城が機能していた時期（15～17世紀前半）と想定される。

備考　W－１とは垂直方向の関係にあり、覆土も共通する点が多い。蒼海城の郭内の堀跡か。

W－３号溝（Fig.17）

位置　X 200・201、Y 151　**主軸方向**　N－89°－W　**規模**　長さ5.4 m　最大幅　上幅0.62 m、下幅43.6 m　深さ0.19 m　**形状等**　東西方向に走行する細くて浅い溝。断面逆台形、底面は比較的平坦。　**重複**　W－５、Ｉ－１と重複しており、新旧関係は本遺構→W－５→Ｉ－１である。　**出土遺物**　覆土中から土師器・火鉢等の小片が出土。　**時期**　覆土の状況から近世以降と考えられる。

W－４号溝（Fig.17）

位置　X 206～208、Y 148～150　**主軸方向**　N－38°－E　**規模**　長さ（12.72）m　最大幅　上幅1.42 m、下幅0.93 m　深さ0.43 m　**形状**　南西－北東方向に直線的に走行。断面逆台形、底面は比較的平坦。　**出土遺物**　覆土中から陶器小片が出土。　**時期**　出土遺物・覆土の状況から近世以降と考えられる。

W－５号溝（Fig.17・22、PL ７）

位置　X 200・201、Y 150～154　**主軸方向**　N－2°－W　**規模**　長さ（13.87）m　最大幅　上幅2.06 m、下幅0.99 m　深さ0.33 m　**形状**　南北方向に直線的に走行。断面逆台形、底面は比較的平坦。　**出土遺物**　覆土中からかわらけ（１）、陶器小片が出土。　**時期**　出土遺物・覆土の状況から中近世以降と考えられる。

４　井戸・土坑・ピット（Fig.10・11・14・16・18・19・22～24、PL ５・７・８）

検出された土坑の内、D－10・11・13・14・16・20・21・28・29・31・32・33は土壙墓の可能性が高く、調査時に桶を据えたような円形の筋状痕跡がみられるものもあった。形状はほぼ全てが円形でD－14のみ長方形である。人骨の出土は無かったがD－11・14・32・33からは埋納された古銭・陶磁器類が出土している。古銭・陶磁器類の時期から18～19世紀に帰属すると考えられる。

井戸・土坑・ピットの計測値についてはTab. ２井戸・土坑・ピット計測表を参考のこと。

oumi031.indd　11　　2010/11/17　12:19:50

Tab.2　井戸・土坑・ピット計測表

遺構名	位置	長軸	短軸	深さ	形状	出土遺物	備考
Ｉ－１	Ｘ200、Ｙ151・152	0.93	0.88	(0.61)	円形		
Ｄ－１	Ｘ199、Ｙ148・149	3.21	(1.29)	0.13	不整形		
Ｄ－２	Ｘ200、Ｙ148	1.18	0.82	0.11	長方形		
Ｄ－３	Ｘ200、Ｙ148	1.14	0.78	0.08	楕円形		
Ｄ－４	Ｘ200、Ｙ148	1.42	0.96	0.20	不整形		
Ｄ－５	Ｘ200、Ｙ150	2.22	1.21	0.10	長方形		
Ｄ－６	Ｘ199・200、Ｙ153	(0.92)	(0.42)	0.26	不明		
Ｄ－10	Ｘ202、Ｙ153	1.33	1.28	0.45	円形		土壙墓か。
Ｄ－11	Ｘ202、Ｙ152	0.90	0.90	0.38	円形	陶磁器・古銭	土壙墓か。
Ｄ－13	Ｘ202、Ｙ153	0.86	0.80	0.30	円形		土壙墓か。
Ｄ－14	Ｘ200・201、Ｙ149・150	2.30	1.53	0.75	長方形	磁器・小刀・土製模造貨・古銭	土壙墓か。
Ｄ－16	Ｘ202、Ｙ153	1.12	1.10	0.45	円形		土壙墓か。
Ｄ－17	Ｘ202、Ｙ148	2.20	1.68	0.58	長方形		
Ｄ－18	Ｘ200・201、Ｙ149	(2.58)	1.88	0.14	長方形	土師器坏	
Ｄ－19	Ｘ201・202、Ｙ148	1.51	1.02	0.45	長方形		
Ｄ－20	Ｘ201・202、Ｙ148・149	1.29	1.19	0.22	円形		土壙墓か。
Ｄ－21	Ｘ202、Ｙ148	1.70	1.69	0.55	円形		土壙墓か。
Ｄ－25	Ｘ208、Ｙ149	0.86	0.70	0.08	楕円形		
Ｄ－28	Ｘ205・206、Ｙ149	1.34	1.24	0.37	円形		土壙墓か。
Ｄ－29	Ｘ205、Ｙ149	(1.13)	(1.10)	0.29	方形		土壙墓か。
Ｄ－30	Ｘ205、Ｙ148	(1.87)	1.18	0.09	楕円形		
Ｄ－31	Ｘ204、Ｙ149	1.32	1.00	0.20	円形		土壙墓か。
Ｄ－32	Ｘ204・205、Ｙ148・149	1.34	(1.16)	0.28	円形	陶磁器・火鉢・砥石	土壙墓か。
Ｄ－33	Ｘ204・205、Ｙ148	(1.12)	(1.12)	0.37	円形	磁器・焜炉・石硯・古銭	土壙墓か。
Ｐ－２	Ｘ199、Ｙ150	0.48	0.44	0.20	円形		
Ｐ－３	Ｘ199、Ｙ150	0.26	0.25	0.11	円形		
Ｐ－４	Ｘ199、Ｙ150	(0.63)	0.55	0.19	楕円形		
Ｐ－５	Ｘ200、Ｙ149・150	(1.16)	(1.10)	0.11	不整形		
Ｐ－６	Ｘ200、Ｙ149・150	(71.2)	61.6	0.25	楕円形		
Ｐ－７	Ｘ200、Ｙ150	0.62	0.56	0.48	円形		
Ｐ－８	Ｘ200、Ｙ150	0.27	0.26	0.13	円形		
Ｐ－９	Ｘ200、Ｙ150	0.57	0.53	0.13	円形		
Ｐ－10	Ｘ200、Ｙ150	0.44	0.41	0.27	円形		
Ｐ－11	Ｘ200、Ｙ151	0.26	0.23	0.48	円形		
Ｐ－12	Ｘ200、Ｙ150・151	0.48	0.44	0.41	円形		
Ｐ－13	Ｘ200、Ｙ150・151	0.33	0.27	0.23	楕円形		
Ｐ－14	Ｘ200、Ｙ151	0.36	0.33	0.35	円形		
Ｐ－15	Ｘ200、Ｙ151	0.35	0.33	0.30	円形		
Ｐ－16	Ｘ199、Ｙ153	(2.15)	1.11	0.12	楕円形		
Ｐ－17	Ｘ202、Ｙ152	0.58	0.51	0.29	方形		
Ｐ－18	Ｘ202、Ｙ151・152	0.72	0.41	0.21	長方形		
Ｐ－19	Ｘ200・201、Ｙ148・149	0.39	0.33	0.07	円形		
Ｐ－20	Ｘ201、Ｙ149	0.39	0.30	0.09	円形		
Ｐ－21	Ｘ201、Ｙ148	0.46	0.43	0.07	円形		
Ｐ－23	Ｘ208、Ｙ148	0.50	0.47	0.12	楕円形		
Ｐ－24	Ｘ208、Ｙ148	0.28	0.29	0.09	方形		
Ｐ－25	Ｘ208、Ｙ149	0.44	0.29	0.04	長方形		
Ｐ－26	Ｘ209、Ｙ149	0.46	0.45	0.30	方形		
Ｐ－27	Ｘ209、Ｙ149	0.74	0.69	0.06	方形		
Ｐ－28	Ｘ209、Ｙ149	0.74	(0.70)	0.31	不整形		
Ｐ－29	Ｘ208、Ｙ149	0.58	0.34	0.07	長方形		
Ｐ－30	Ｘ209、Ｙ149	0.53	(0.30)	0.06	方形		
Ｐ－31	Ｘ208、Ｙ149	0.48	0.47	0.08	円形		
Ｐ－32	Ｘ207・208、Ｙ149	0.54	0.46	0.09	方形		
Ｐ－33	Ｘ207、Ｙ149	0.37	0.33	0.09	円形		
Ｐ－34	Ｘ207、Ｙ149	0.19	0.16	0.08	方形		
Ｐ－35	Ｘ207、Ｙ149	0.23	0.21	0.07	方形		
Ｐ－36	Ｘ207、Ｙ149	0.31	0.22	0.09	楕円形		
Ｐ－37	Ｘ207、Ｙ149	0.27	0.24	0.07	円形		
Ｐ－38	Ｘ207、Ｙ149	0.22	0.18	0.33	方形		
Ｐ－41	Ｘ205、Ｙ148	0.29	0.29	0.13	円形		
Ｐ－42	Ｘ205、Ｙ148	0.23	0.23	0.11	円形		
Ｐ－43	Ｘ206、Ｙ148	0.54	0.33	0.11	楕円形		
Ｐ－44	Ｘ206、Ｙ148・149	0.49	0.39	0.08	楕円形		
Ｐ－45	Ｘ206、Ｙ149	0.42	0.36	0.30	方形		
Ｐ－46	Ｘ206、Ｙ149	0.22	0.26	0.16	円形		
Ｐ－47	Ｘ206、Ｙ149	0.31	0.27	0.15	円形		
Ｐ－48	Ｘ206、Ｙ149	0.46	0.54	0.20	楕円形		
Ｐ－49	Ｘ206、Ｙ149	0.46	0.42	0.20	円形		
Ｐ－50	Ｘ206、Ｙ149	0.30	0.36	0.19	楕円形		
Ｐ－51	Ｘ206、Ｙ149	0.28	(0.11)	0.18	楕円形		
Ｐ－52	Ｘ206、Ｙ149	0.16	0.20	0.17	方形		
Ｐ－53	Ｘ205、Ｙ149	(0.19)	(0.33)	0.13	楕円形		
Ｐ－54	Ｘ209、Ｙ149	(0.38)	(0.42)	0.27	方形		
Ｐ－55	Ｘ205、Ｙ148	0.35	0.36	0.15	円形		

※Ｄ－７～９・12・15・22～24・26・27・34・35、Ｐ－１・22・39・40は欠番。

oumi031.indd　12　　2010/11/17　12:19:50

Fig. 5　調査区全体図

oumi031.indd　13　　2010/11/17　12:19:50

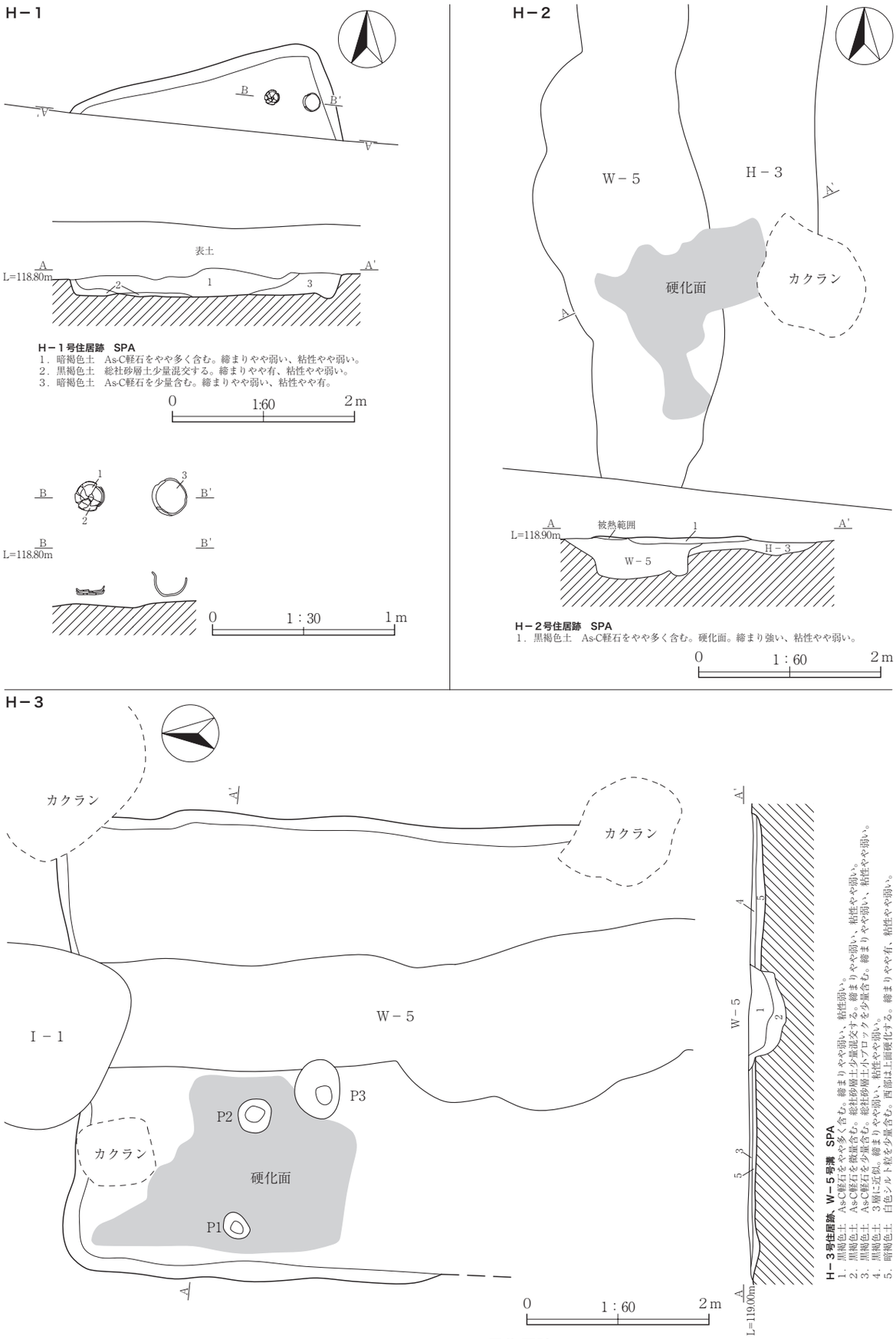
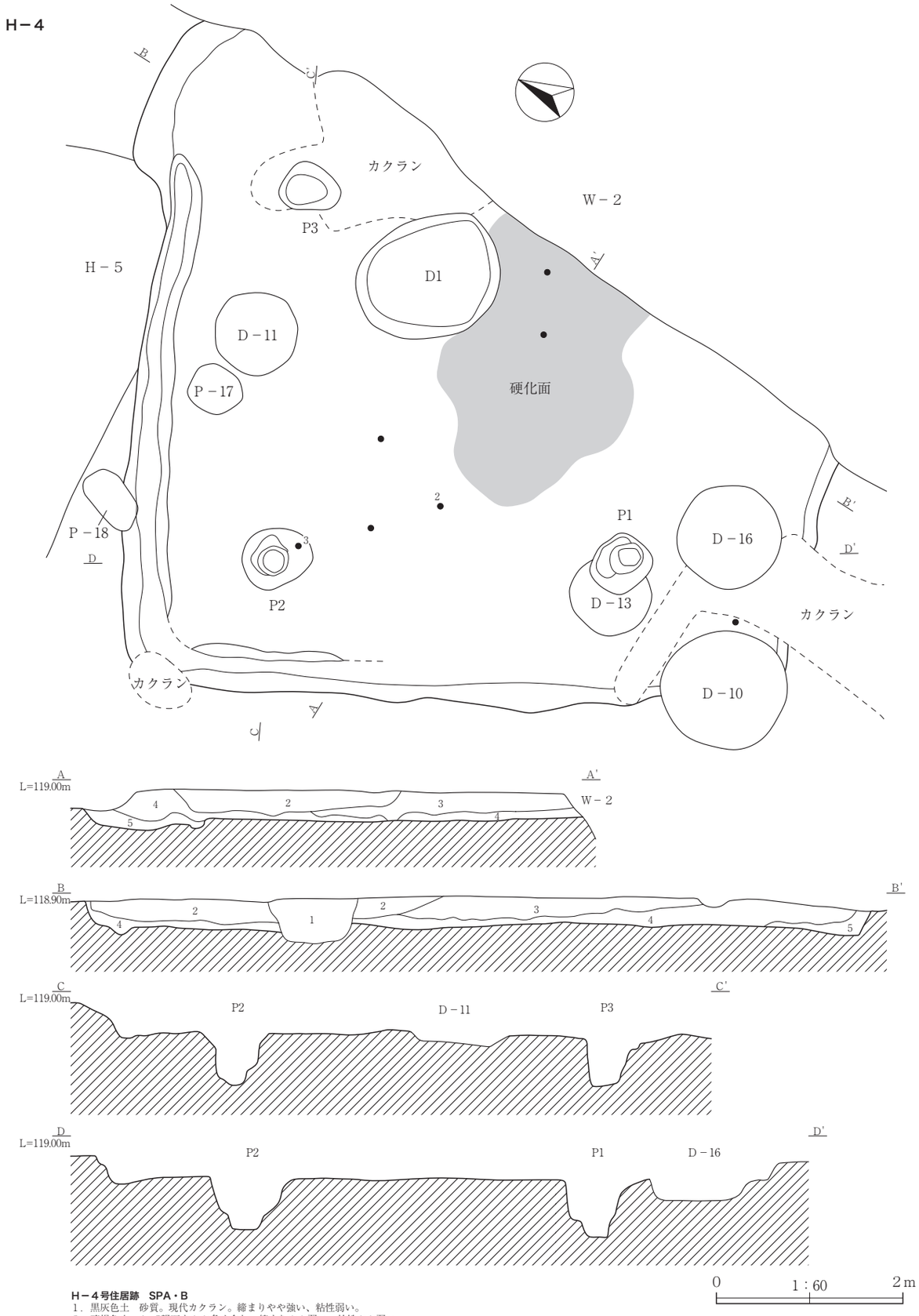


Fig.6　H－1～3号住居跡

oumi031.indd　14　　2010/11/17　12:19:51



H－4号住居跡　SPA・B

1．黒灰色土　砂質。現代カクラン。締まりやや強い、粘性弱い。
2．暗褐色土　As-C軽石をやや多く含む。締まりやや弱い、粘性やや弱い。
3．暗褐色土　橙色細粒（スコリアか）を少量含む粘質土。
4．暗褐色土　As-C軽石をやや多く含む。総社砂層土小ブロックを微量含む。
5．暗褐色土　総社砂層土小ブロックをやや多く含む。締まり弱い、粘性やや弱い。

Fig.7　H－4号住居跡

oumi031.indd　15　　2010/11/17　12:19:51

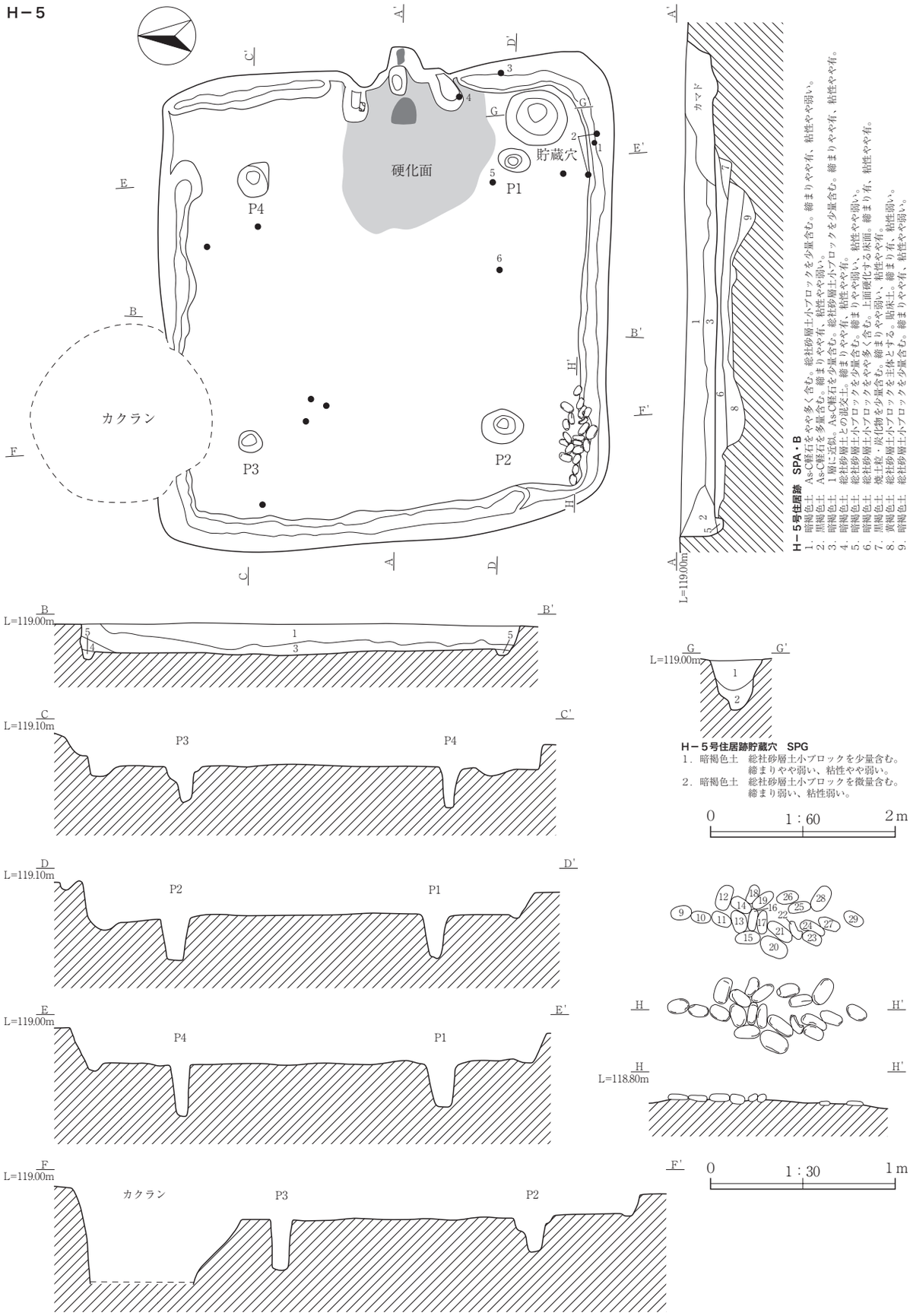


Fig.8　H－5号住居跡

oumi031.indd　16　　2010/11/17　12:19:51

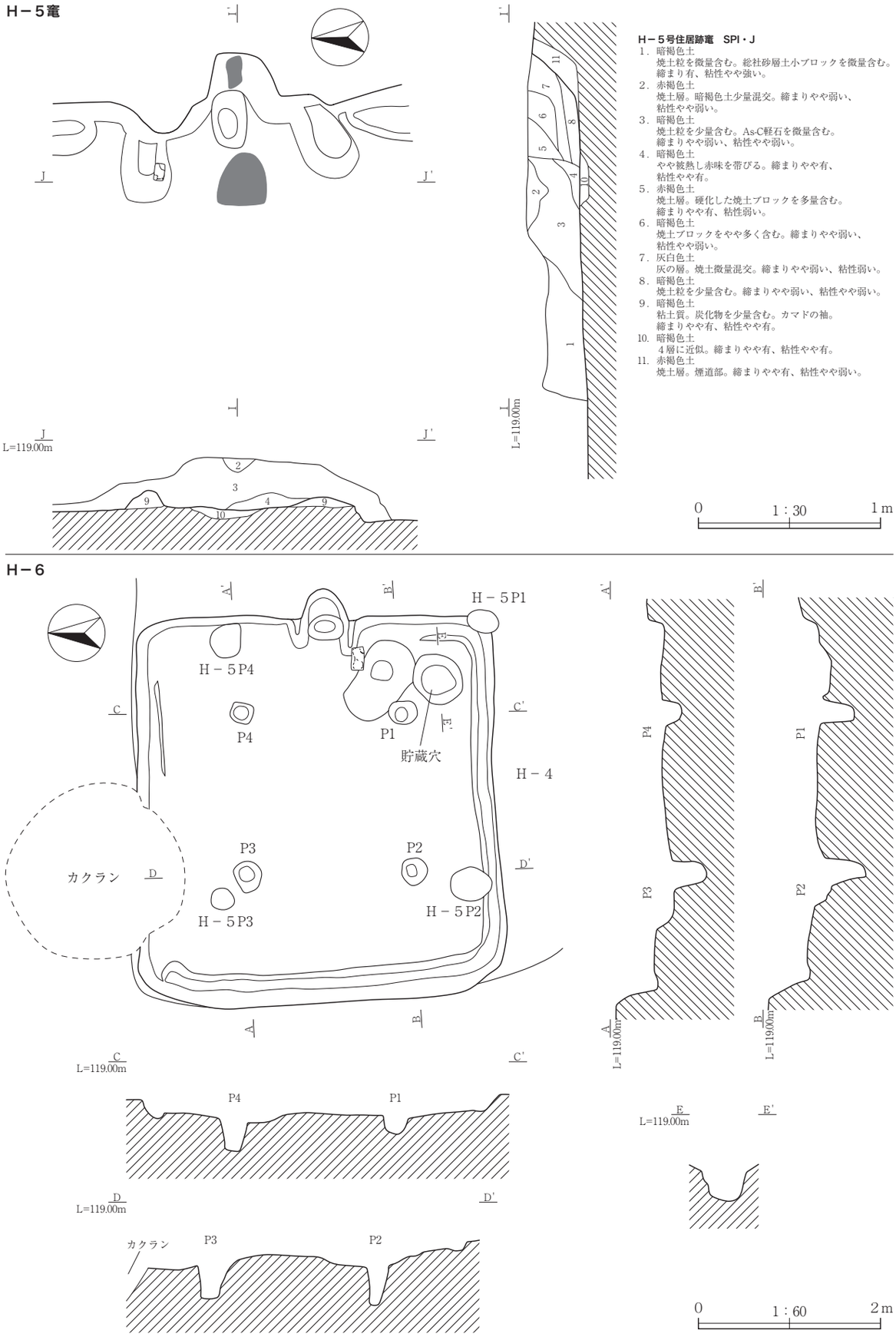
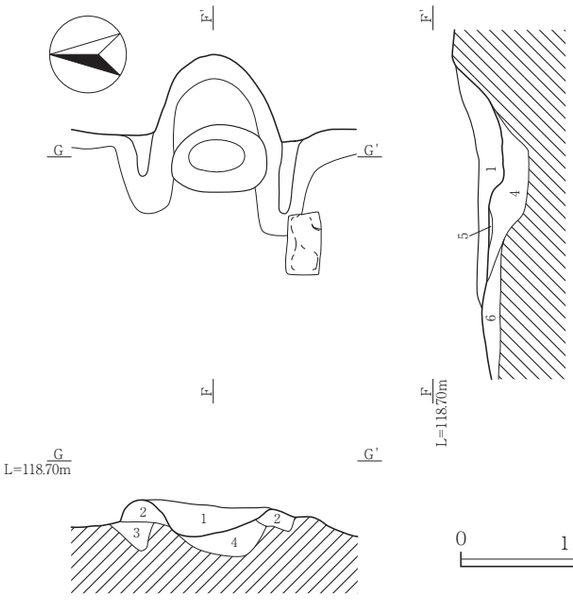


Fig.9　H－5号住居跡竈、H－6号住居跡

oumi031.indd　17　　2010/11/17　12:19:52

H－6竈



H－6号住居跡竈　SPF・G

1．黒褐色土　焼土粒をやや多く含む。黒褐色粘質土混交。締まりやや有、粘性やや有。
2．暗褐色土　被熱し、やや赤味を帯びる粘質土。カマドの袖。締まりやや有、粘性やや有。
3．暗褐色土　総社砂層土小ブロックを少量含む。締まりやや弱い、粘性やや弱い。
4．暗褐色土　総社砂層土小ブロックをやや多く含む。締まりやや有、粘性やや弱い。
5．赤褐色土　焼土層。カマドの焚口か。締まりやや弱い、粘性やや弱い。
6．黄褐色土　総社砂層土小ブロックを主体とする、住居貼床層。締まり有、粘性弱い。

0　1：30　1m

H－7、D－19・20

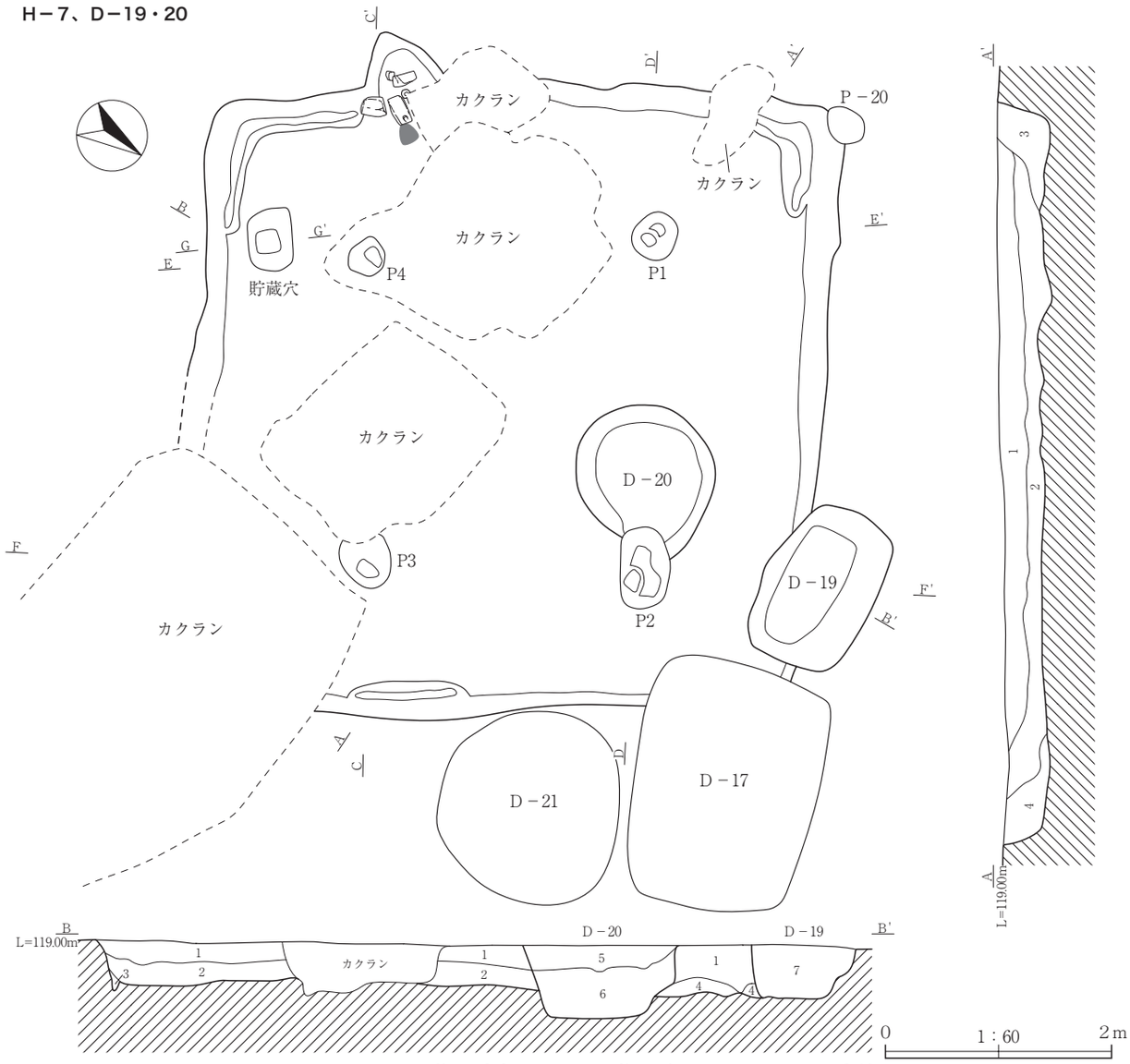
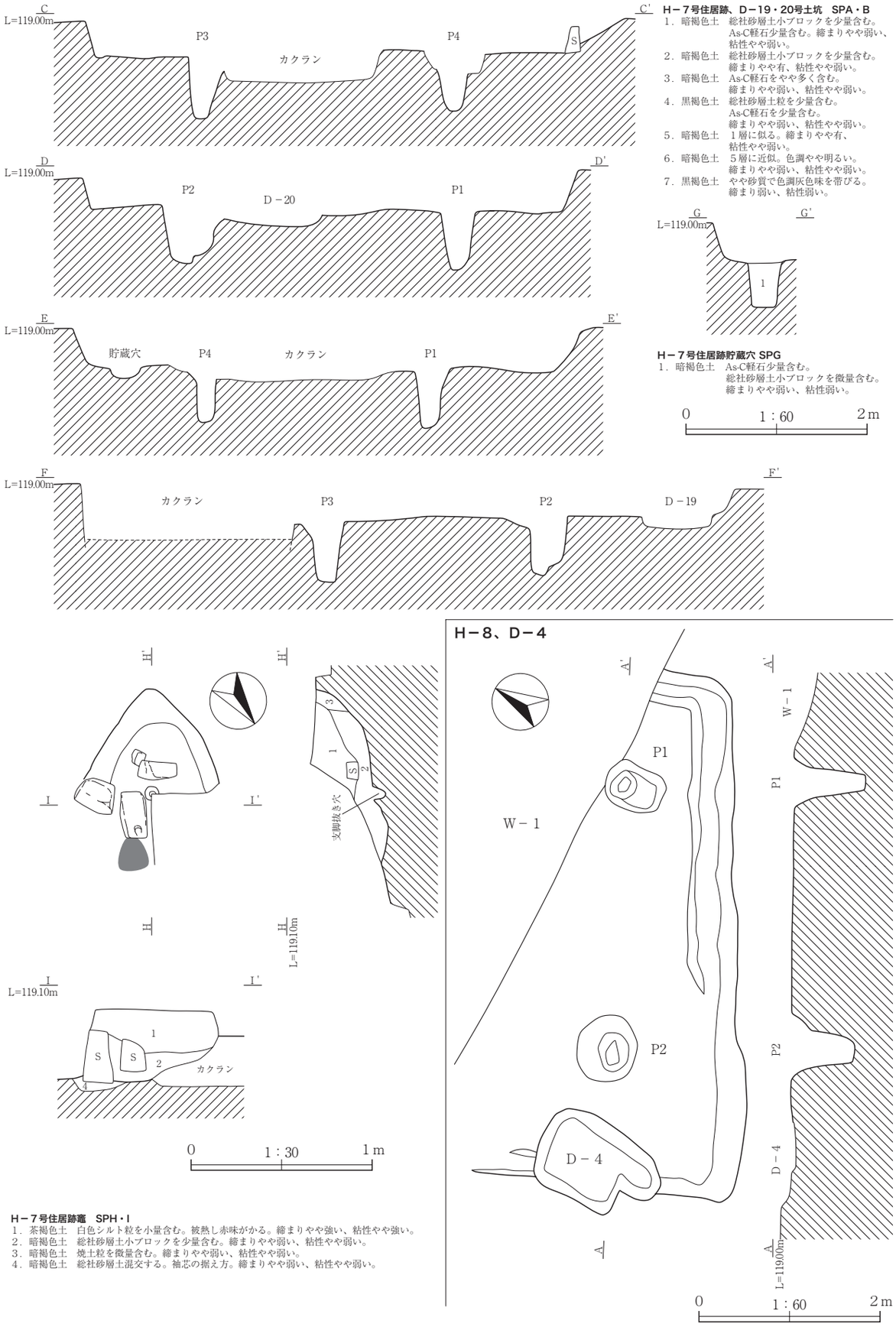


Fig.10　H－6号住居跡竈、H－7号住居跡、D－19・20号土坑

oumi031.indd　18　2010/11/17　12:19:52



H－７号住居跡、D－19・20号土坑　SPA・B

1．暗褐色土　総社砂層土小ブロックを少量含む。As-C軽石少量含む。締まりやや弱い、粘性やや弱い。
2．暗褐色土　総社砂層土小ブロックを少量含む。締まりやや有、粘性やや弱い。
3．暗褐色土　As-C軽石をやや多く含む。締まりやや弱い、粘性やや弱い。
4．黒褐色土　総社砂層土粒を少量含む。As-C軽石を少量含む。締まりやや弱い、粘性やや弱い。
5．暗褐色土　１層に似る。締まりやや有、粘性やや弱い。
6．暗褐色土　５層に近似。色調やや明るい。締まりやや弱い、粘性やや弱い。
7．黒褐色土　やや砂質で色調灰色味を帯びる。締まり弱い、粘性弱い。

H－７号住居跡貯蔵穴 SPG

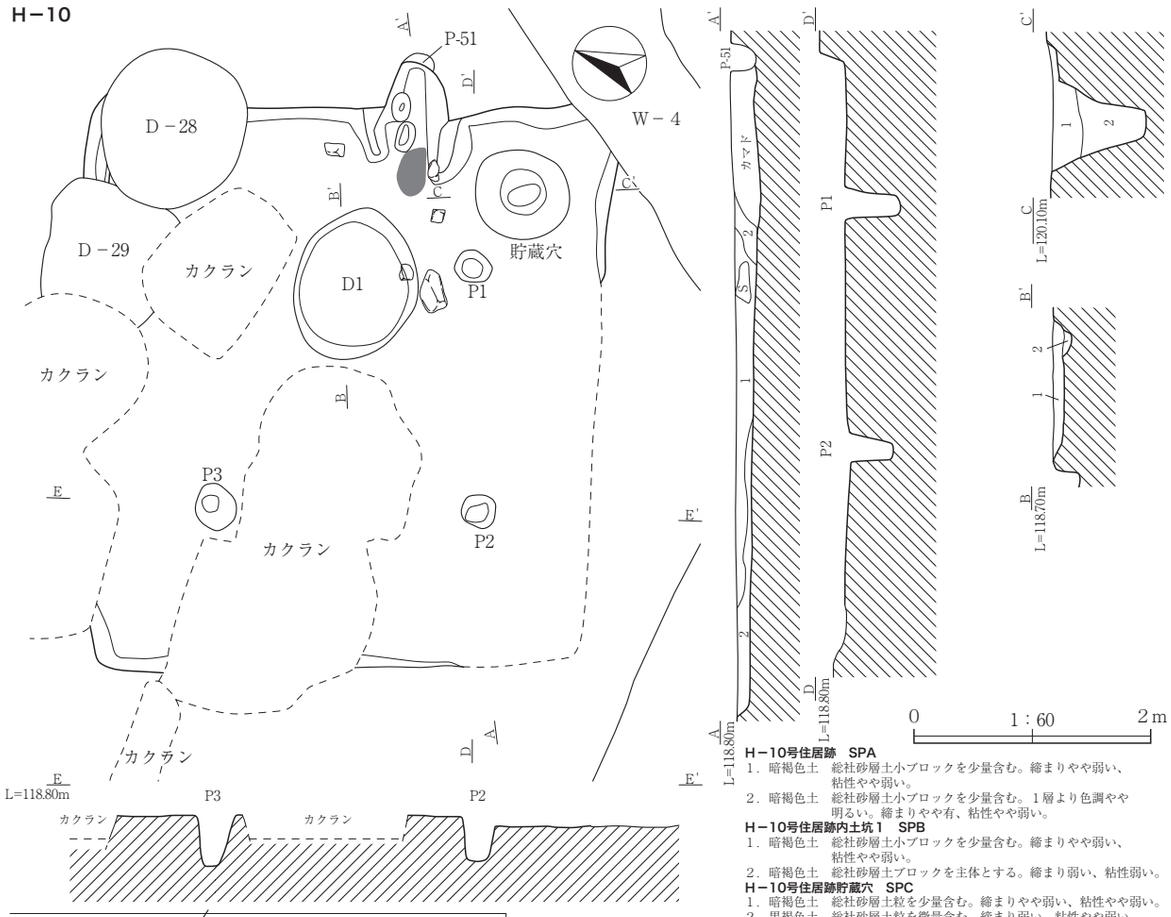
1．暗褐色土　As-C軽石少量含む。総社砂層土小ブロックを微量含む。締まりやや弱い、粘性弱い。

H－７号住居跡竈　SPH・I

1．茶褐色土　白色シルト粒を小量含む。被熱し赤味がかる。締まりやや強い、粘性やや強い。
2．暗褐色土　総社砂層土小ブロックを少量含む。締まりやや弱い、粘性やや弱い。
3．暗褐色土　焼土粒を微量含む。締まりやや弱い、粘性やや弱い。
4．暗褐色土　総社砂層土混交する。袖芯の据え方。締まりやや弱い、粘性やや弱い。

Fig.11　H－７・８号住居跡、D－４・19・20号土坑

oumi031.indd　19　　2010/11/17　12:19:53



H－10号住居跡　SPA

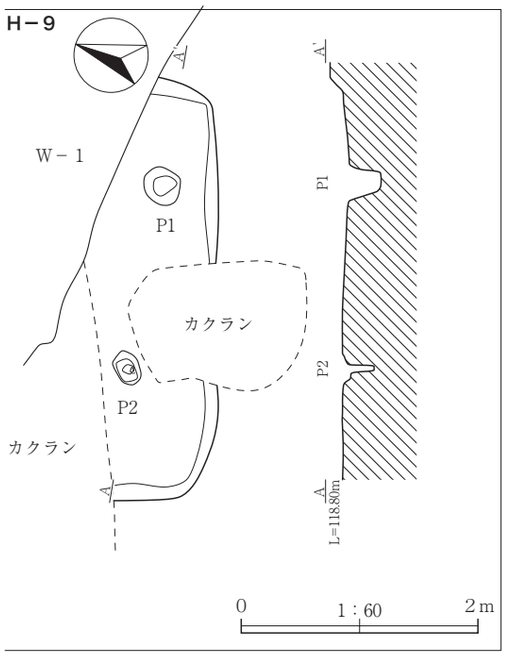
1．暗褐色土　総社砂層土小ブロックを少量含む。締まりやや弱い、粘性やや弱い。
2．暗褐色土　総社砂層土小ブロックを少量含む。1層より色調やや明るい。締まりやや有、粘性やや弱い。

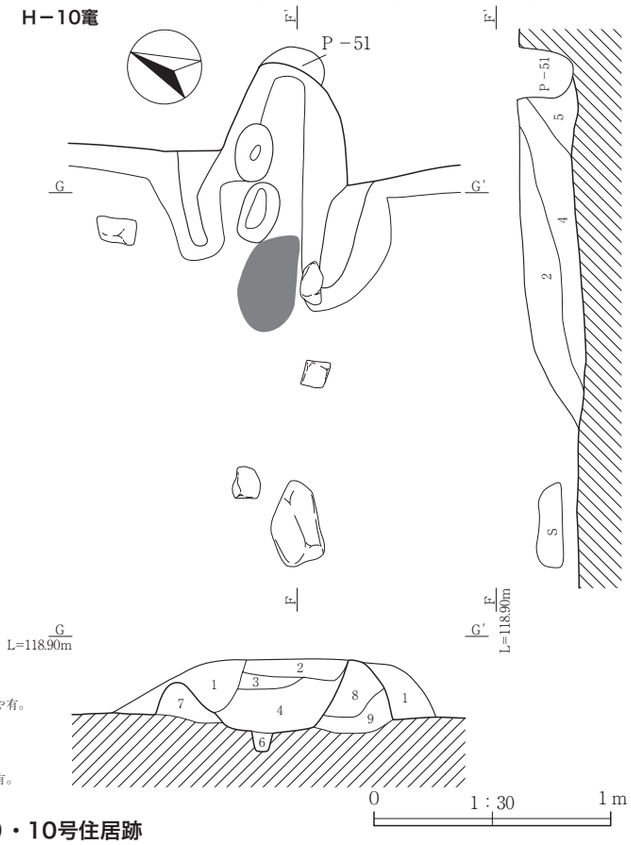
H－10号住居跡内土坑1　SPB

1．暗褐色土　総社砂層土小ブロックを少量含む。締まりやや弱い、粘性やや弱い。
2．暗褐色土　総社砂層土ブロックを主体とする。締まり弱い、粘性弱い。

H－10号住居跡貯蔵穴　SPC

1．暗褐色土　総社砂層土粒を少量含む。締まりやや弱い、粘性やや弱い。
2．黒褐色土　総社砂層土粒を微量含む。締まり弱い、粘性やや弱い。





H－10号住居跡竈　SPF・G

1．暗褐色土　被熱した焼土粒をわずかに含む。締まり弱い、粘性やや弱い。
2．暗褐色土　被熱した粘土粒を微量含む。締まりやや弱い、粘性やや弱い。
3．灰白色土　灰白色粘質土を主体とする。暗褐色土少量混交。締まりやや弱い、粘性やや有。
4．暗褐色土　被熱した粘土粒をやや多く含む。締まりやや有、粘性やや弱い。
5．暗褐色土　被熱した粘土粒を少量含む。灰白色粘土小ブロックを微量含む。締まり弱い、粘性やや弱い。
6．暗褐色土　4層に近似する。締まりやや弱い、粘性やや弱い。
7．暗灰色土　総社砂層土粒を少量含む。灰白色粘質土混交。締まりややあり、粘性やや有。
8．灰白色粘質土　総社砂層を少量含む。締まり有、粘性有。
9．暗灰色土　7層に近似する。締まりやや有、粘性やや有。

Fig.12　H－9・10号住居跡

oumi031.indd　20　　2010/11/17　12:19:53

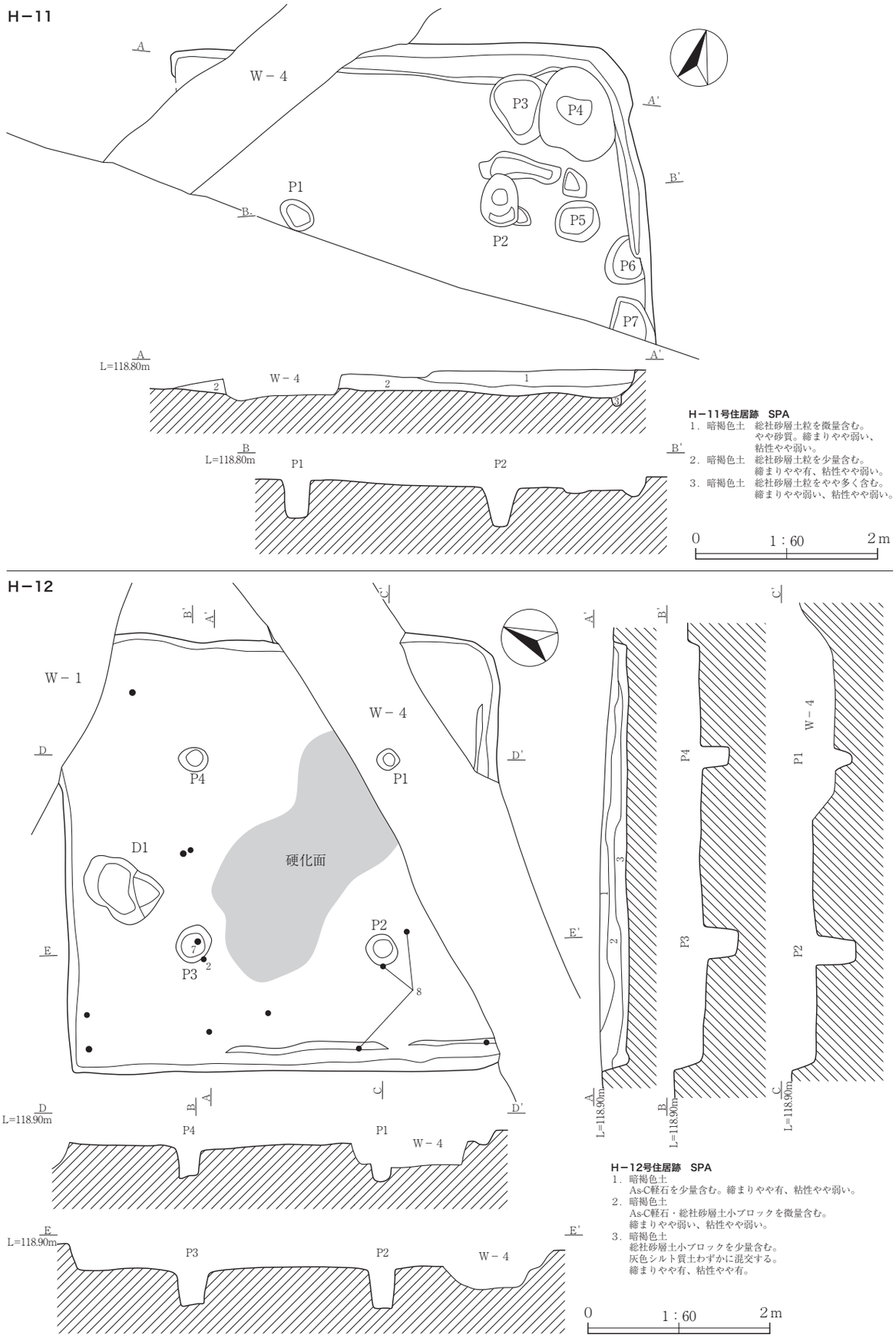
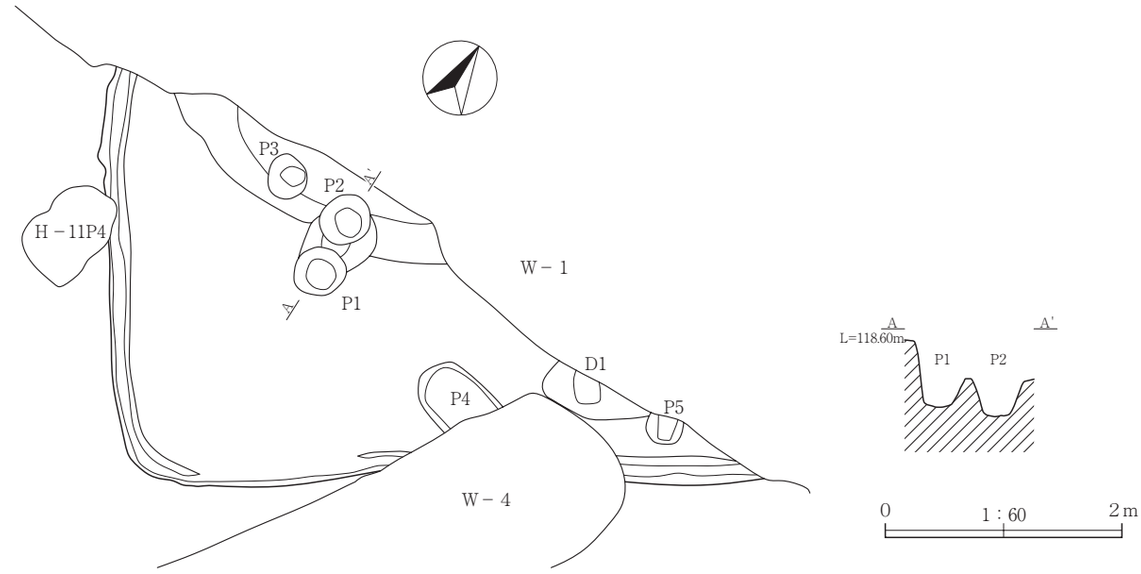


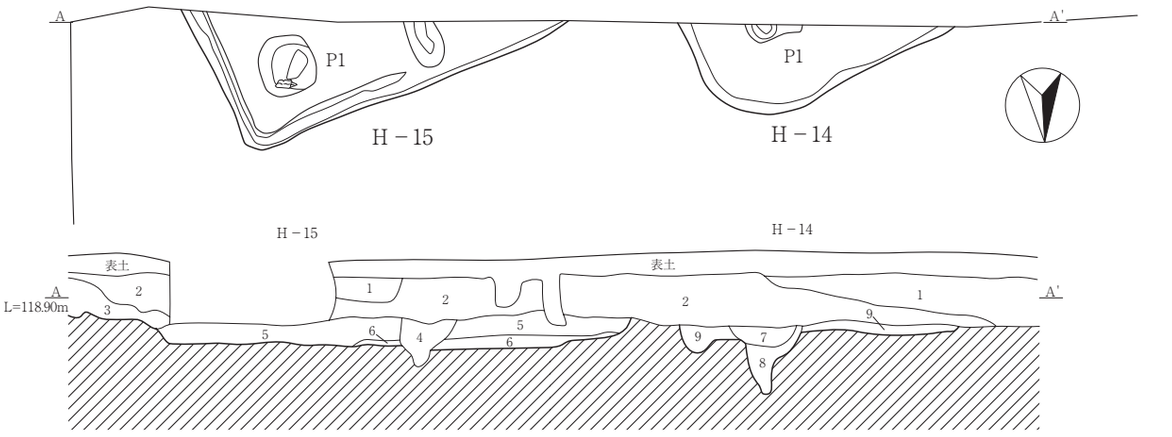
Fig.13　H－11・12号住居跡

oumi031.indd　21　2010/11/17　12:19:53

H－13



H－14・15



H－14・15号住居跡　SPA

1．暗灰褐色土　砂質。近世～近代の堆積層か。締まり有、粘性弱い。
2．暗褐色土　As-C軽石をやや多く含む。焼土粒を微量含む。締まりやや有、粘性やや弱い。
3．黒褐色土　焼土小ブロックを少量含む。締まり弱い、粘性やや弱い。
4．暗褐色土　As-C軽石・総社砂層土粒を少量含む。締まりやや弱い、粘性やや弱い。
5．暗褐色土　As-C軽石・総社砂層土粒を少量含む。締まりやや弱い、粘性やや弱い。H－15号住居跡覆土。
6．暗褐色土　As-C軽石を微量含む。暗灰色粘質土小ブロック・総社砂層土小ブロックを少量含む。締まりやや有、粘性やや弱い。H－15号住居跡覆土。
7．暗黄褐色土　総社砂層土との混交土。総社砂層土小ブロックを微量含む。締まりやや弱い、粘性やや弱い。H－14号住居跡覆土。
8．暗褐色土　総社砂層土小ブロックを微量含む。締まり弱い、粘性やや弱い。H－14号住居跡覆土。
9．暗褐色土　As-C軽石を少量含む。総社砂層土小ブロックを微量含む。締まりやや有、粘性やや弱い。H－14号住居跡覆土。

H－16・D－25

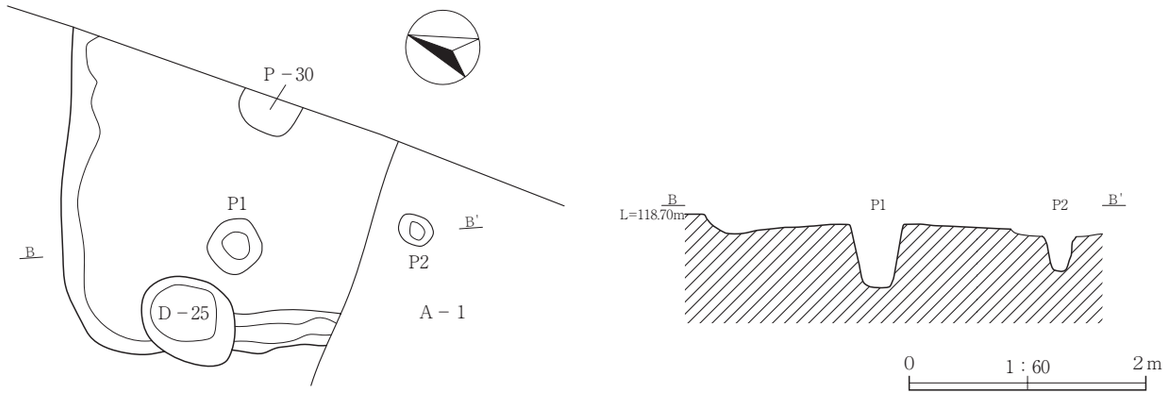
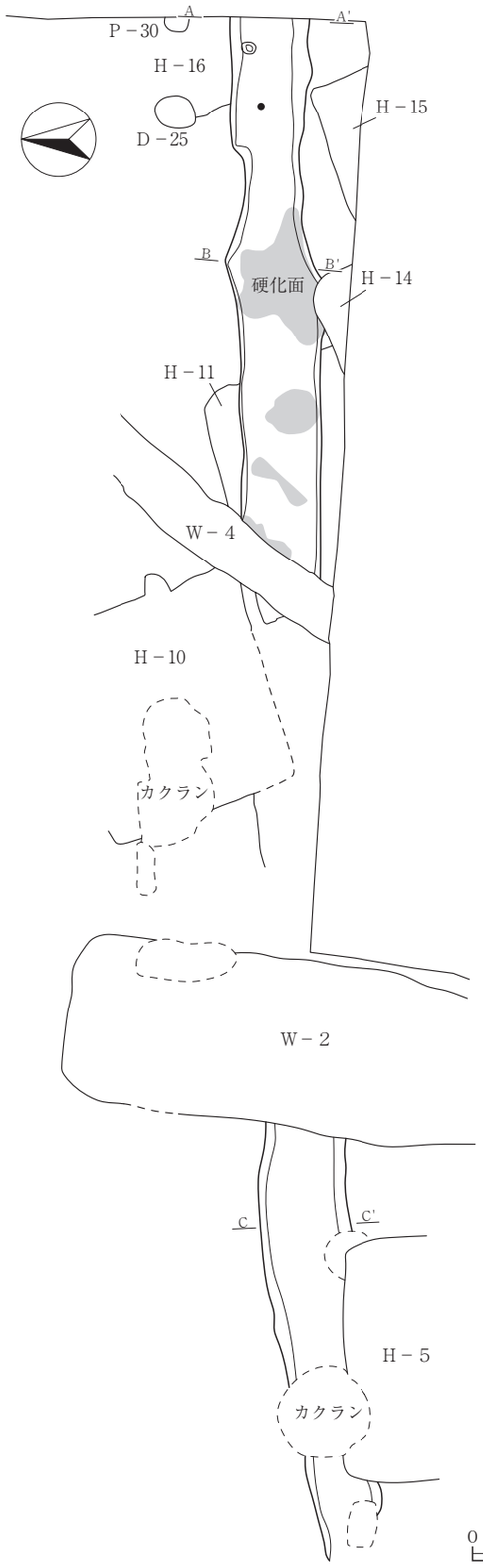
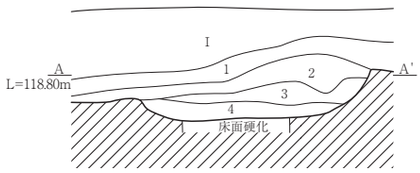


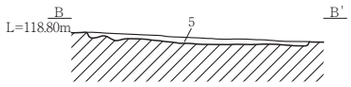
Fig.14　H－13～16号住居跡、D－25号土坑

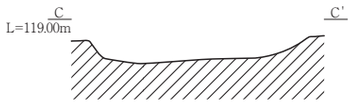
oumi031.indd　22　　2010/11/17　12:19:54

A－1









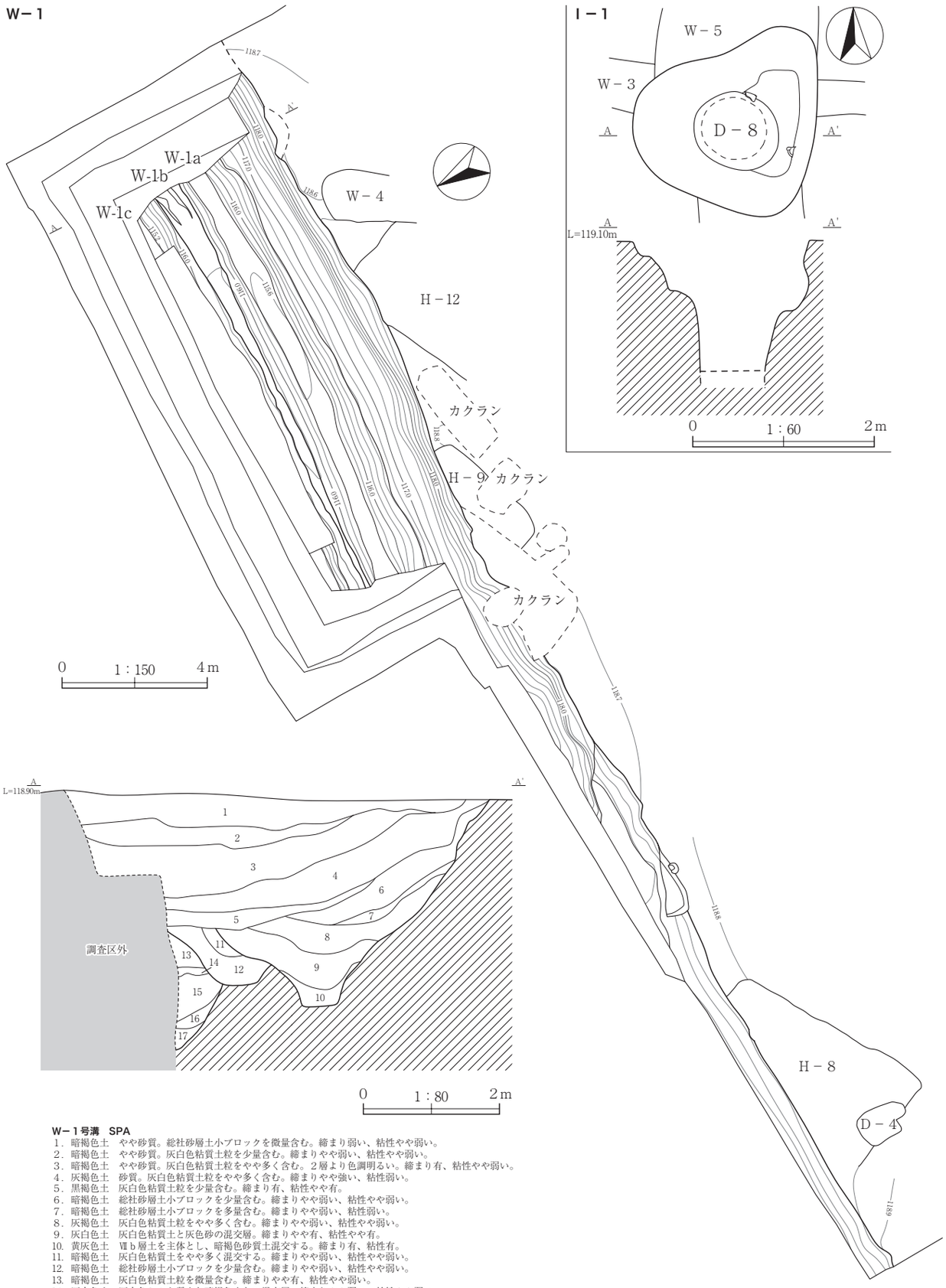
0　1：60　2m

A－1号道路状遺構　SPA・B

1．暗褐色土　やや砂質。部分的に焼土小ブロック散見される。
締まりやや有、粘性弱い。
2．暗褐色土　総社砂層土小ブロックを少量含む。焼土粒を微量含む。
締まりやや弱い、粘性やや弱い。
3．暗褐色土　総社砂層土粒をやや多く含む。
締まりやや弱い、粘性やや弱い。
4．暗褐色土　As-C軽石を少量含む。総社砂層土小ブロックを少量含む。
上面は硬化するほどではないが、締まりやや強い。
締まりやや有、粘性弱い。
5．黒褐色土　As-C軽石を少量含む。総社砂層土粒を微量含む。
上面やや硬化する。締まり有、粘性やや弱い。

Fig.15　A－1号道路状遺構

oumi031.indd　23　　2010/11/17　12:19:54

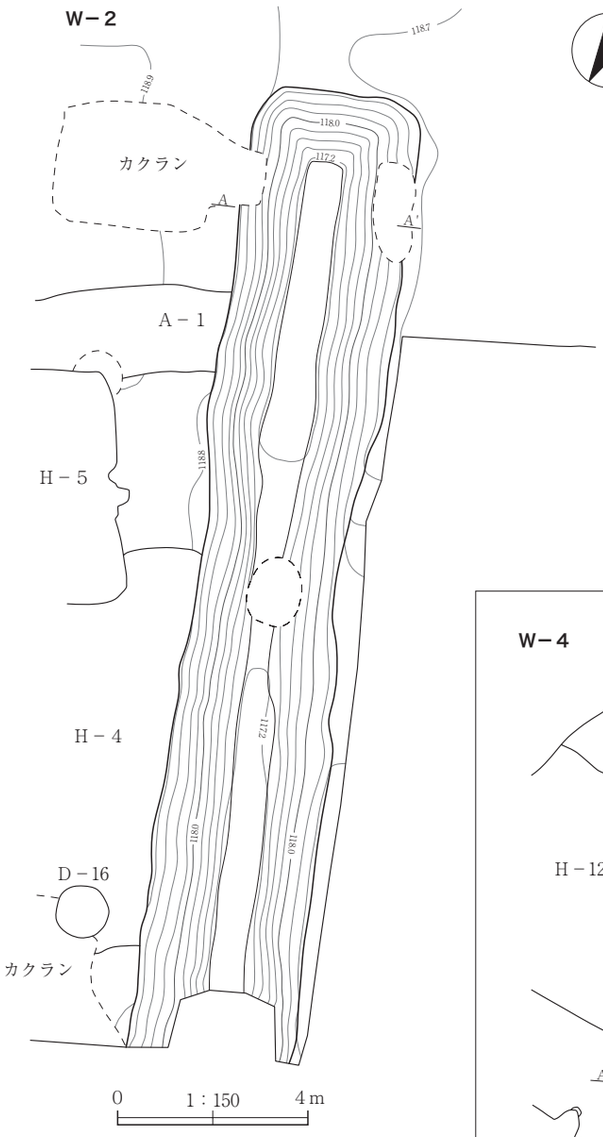


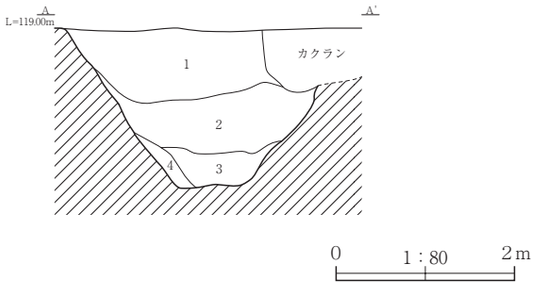
W－1号溝　SPA

1．暗褐色土　やや砂質。総社砂層土小ブロックを微量含む。締まり弱い、粘性やや弱い。
2．暗褐色土　やや砂質。灰白色粘質土粒を少量含む。締まりやや弱い、粘性やや弱い。
3．暗褐色土　やや砂質。灰白色粘質土粒をやや多く含む。２層より色調明るい。締まり有、粘性やや弱い。
4．灰褐色土　砂質。灰白色粘質土粒をやや多く含む。締まりやや強い、粘性弱い。
5．黒褐色土　灰白色粘質土粒を少量含む。締まり有、粘性やや有。
6．暗褐色土　総社砂層土小ブロックを少量含む。締まりやや弱い、粘性やや弱い。
7．暗褐色土　総社砂層土小ブロックを多量含む。締まりやや弱い、粘性弱い。
8．灰褐色土　灰白色粘質土粒をやや多く含む。締まりやや弱い、粘性やや弱い。
9．灰白色土　灰白色粘質土と灰色砂の混交層。締まりやや有、粘性やや有。
10．黄灰色土　Ⅶb層土を主体とし、暗褐色砂質土混交する。締まり有、粘性有。
11．暗褐色土　灰白色粘質土をやや多く混交する。締まりやや弱い、粘性やや弱い。
12．暗褐色土　総社砂層土小ブロックを少量含む。締まりやや弱い、粘性やや弱い。
13．暗褐色土　灰白色粘質土粒を微量含む。締まりやや有、粘性やや弱い。
14．灰白色土　灰白色シルト質土と暗褐色土との混交層。締まりやや弱い、粘性やや弱い。
15．暗褐色土　黄灰色粘土粒を少量含む。締まりやや弱い、粘性やや弱い。
16．黄灰色土　黄灰色粘質土を主体とし、暗褐色土少量混交する。締まりやや有、粘性やや弱い。
17．暗褐色土　黄灰色粘質土少量混交する。締まり有、粘性やや弱い。

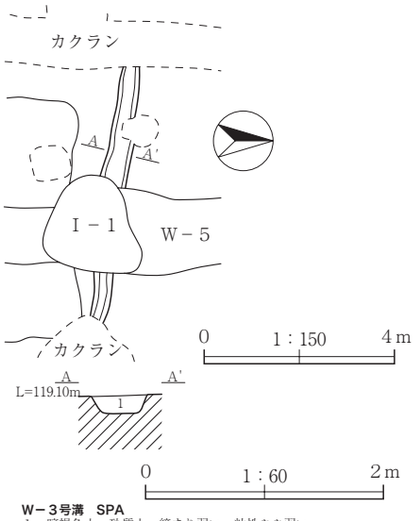
Fig.16　W－1号溝、I－1号井戸

oumi031.indd　24　　2010/11/17　12:19:54

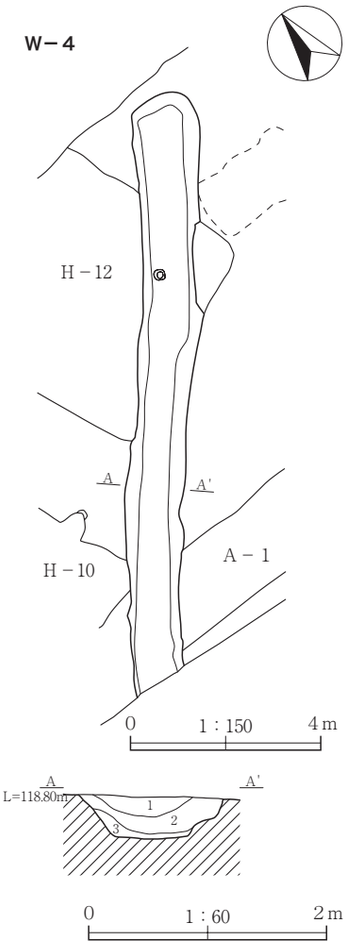




W－2号溝　SPA
1．暗灰褐色土　砂質。As-C軽石を少量含む。締まりやや強い、粘性強い。
2．暗褐色土　総社砂層土粒を少量含む。締まり弱い、粘性弱い。
3．暗褐色土　総社砂層土小ブロックをやや多く含む。締まりやや有、粘性やや弱い。
4．黄灰色土　砂質。総社砂層土を主体とする。締まりやや弱い、粘性弱い。



W－3号溝　SPA
1．暗褐色土　砂質土。締まり弱い、粘性やや弱い。

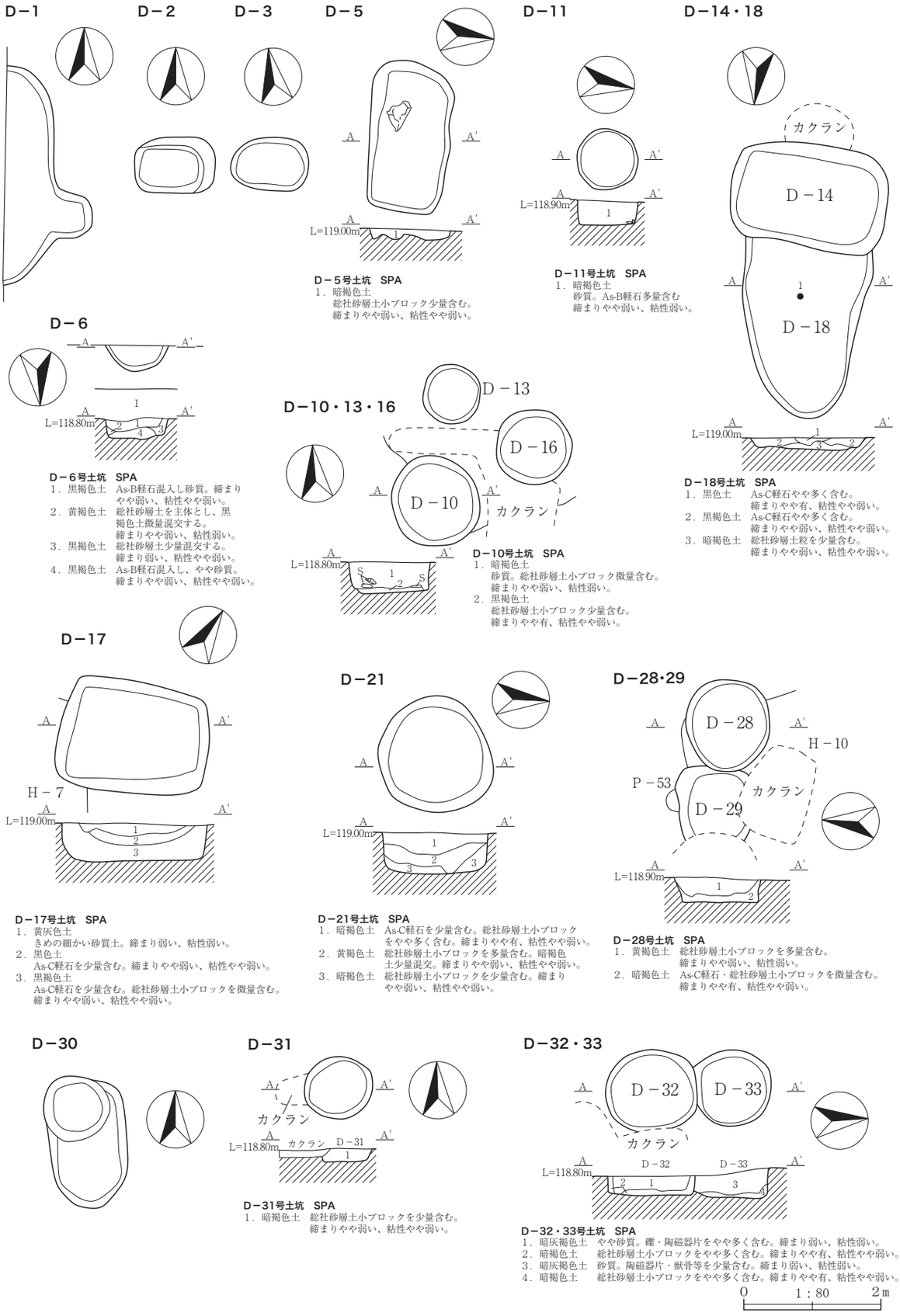


W－4号溝　SPA
1．暗灰褐色土　やや砂質。As-C軽石を少量含む。
締まり有、粘性弱い。
2．暗褐色土　As-C軽石及び総社砂層土粒を少量含む。
締まりやや有、粘性やや弱い。
3．暗褐色土　総社砂層土混交する。
締まりやや弱い、粘性弱い。

W－5号溝　SPA
1．暗褐色土　As-C軽石を少量含む。
締まりやや弱い、粘性弱い。
2．黒褐色土　As-C軽石を少量含む。
締まり弱い、粘性やや弱い。

Fig.17　W－2～5号溝

oumi031.indd　25　　2010/11/17　12:19:55



D－5号土坑　SPA
1．暗褐色土
総社砂層土小ブロック少量含む。
締まりやや弱い、粘性やや弱い。

D－11号土坑　SPA
1．暗褐色土
砂質。As-B軽石多量含む
締まりやや弱い、粘性弱い。

D－6号土坑　SPA
1．黒褐色土　As-B軽石混入し砂質。締まりやや弱い、粘性やや弱い。
2．黄褐色土　総社砂層土を主体とし、黒褐色土微量混交する。締まりやや弱い、粘性弱い。
3．黒褐色土　総社砂層土少量混交する。締まり弱い、粘性やや弱い。
4．黒褐色土　As-B軽石混入し、やや砂質。締まりやや弱い、粘性やや弱い。

D－10号土坑　SPA
1．暗褐色土
砂質。総社砂層土小ブロック微量含む。
締まりやや弱い、粘性弱い。
2．黒褐色土
総社砂層土小ブロック少量含む。
締まりやや有、粘性やや弱い。

D－18号土坑　SPA
1．黒色土　As-C軽石やや多く含む。
締まりやや有、粘性やや弱い。
2．黒褐色土　As-C軽石やや多く含む。
締まりやや弱い、粘性やや弱い。
3．暗褐色土　総社砂層土粒を少量含む。
締まりやや弱い、粘性やや弱い。

D－17号土坑　SPA
1．黄灰色土
きめの細かい砂質土。締まり弱い、粘性弱い。
2．黒色土
As-C軽石を少量含む。締まりやや弱い、粘性やや弱い。
3．黒褐色土
As-C軽石を少量含む。総社砂層土小ブロックを微量含む。
締まりやや弱い、粘性やや弱い。

D－21号土坑　SPA
1．暗褐色土　As-C軽石を少量含む。総社砂層土小ブロックをやや多く含む。締まりやや有、粘性やや弱い。
2．黄褐色土　総社砂層土小ブロックを多量含む。暗褐色土少量混交。締まりやや弱い、粘性やや弱い。
3．暗褐色土　総社砂層土小ブロックを少量含む。締まりやや弱い、粘性やや弱い。

D－28号土坑　SPA
1．黄褐色土　総社砂層土小ブロックを多量含む。
締まりやや弱い、粘性弱い。
2．暗褐色土　As-C軽石・総社砂層土小ブロックを微量含む。
締まりやや有、粘性やや弱い。

D－31号土坑　SPA
1．暗褐色土　総社砂層土小ブロックを少量含む。
締まりやや弱い、粘性やや弱い。

D－32・33号土坑　SPA
1．暗灰褐色土　やや砂質。礫・陶磁器片をやや多く含む。締まり弱い、粘性弱い。
2．暗褐色土　総社砂層土小ブロックをやや多く含む。締まりやや有、粘性やや弱い。
3．暗灰褐色土　砂質。陶磁器片・獣骨等を少量含む。締まり弱い、粘性弱い。
4．暗褐色土　総社砂層土小ブロックをやや多く含む。締まりやや有、粘性やや弱い。

Fig.18　土坑

oumi031.indd　26　　2010/11/17　12:19:55

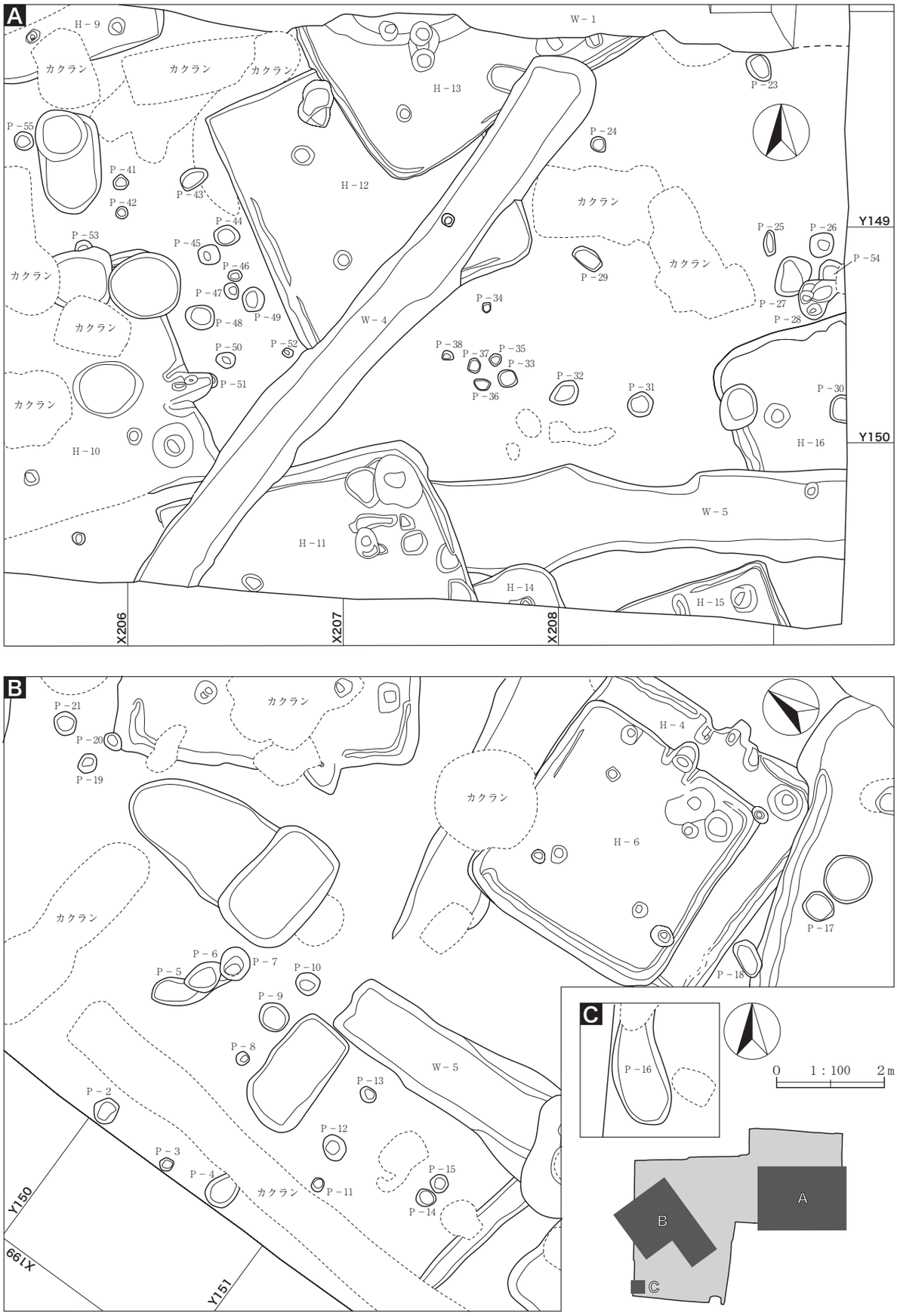


Fig.19　ピット群

oumi031.indd　27　　2010/11/17　12:19:56

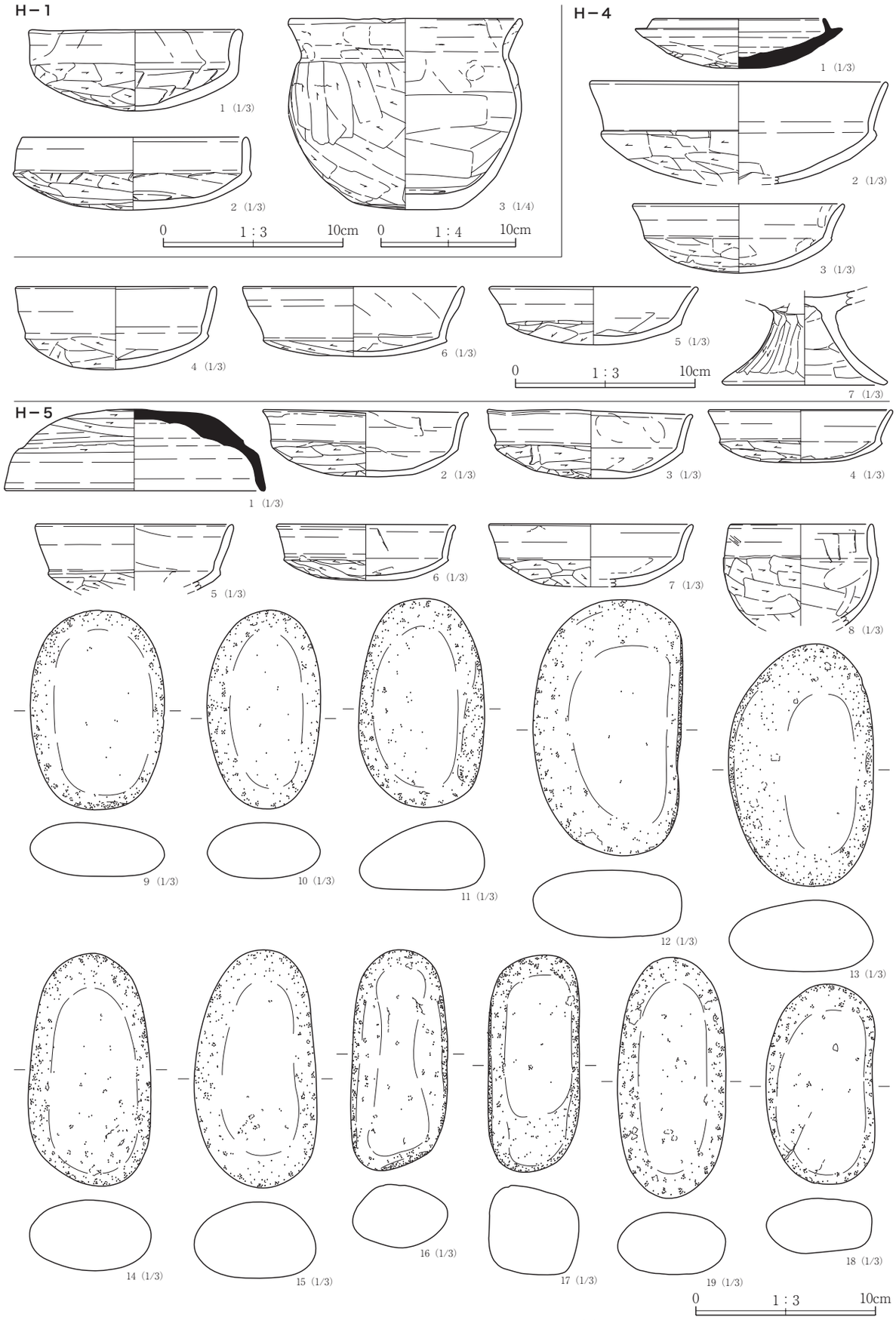


Fig.20　H－1・4・5号住居跡出土遺物

oumi031.indd　28　　2010/11/17　12:19:57

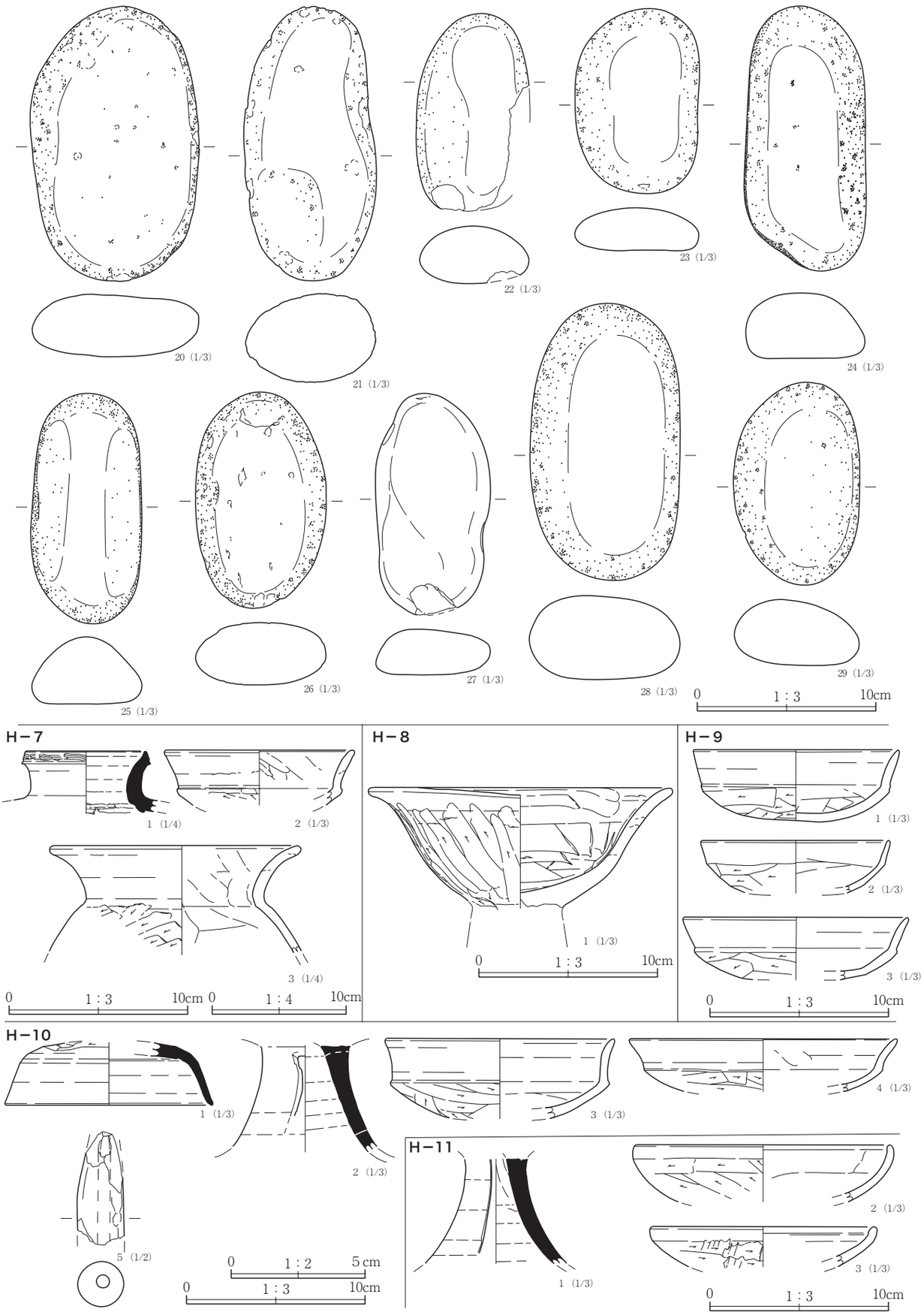


Fig.21　H－5・7～11号住居跡出土遺物

oumi031.indd　29　　2010/11/17　12:19:58

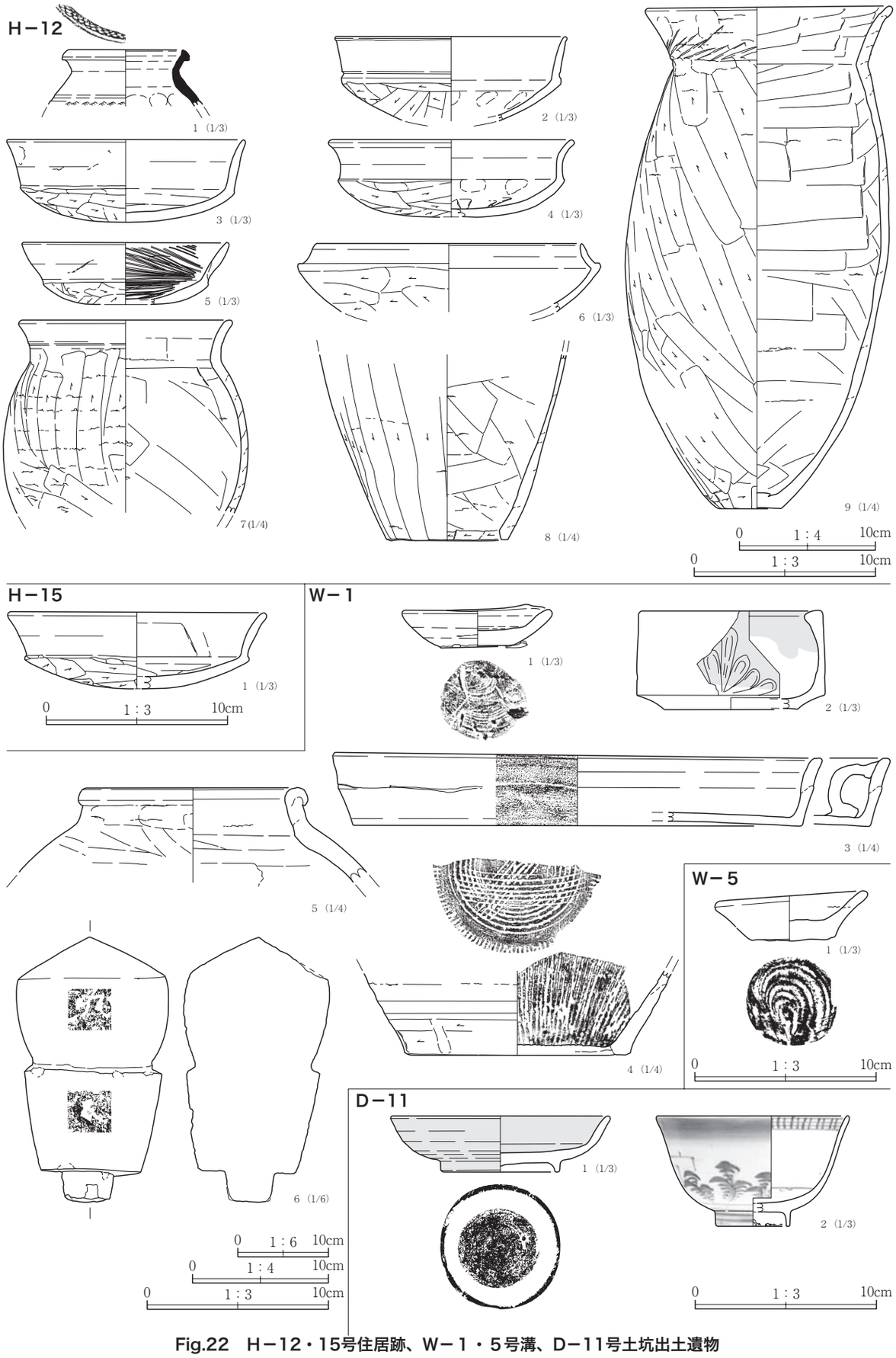


Fig.22　H－12・15号住居跡、W－1・5号溝、D－11号土坑出土遺物

oumi031.indd　30　　2010/11/17　12:20:01

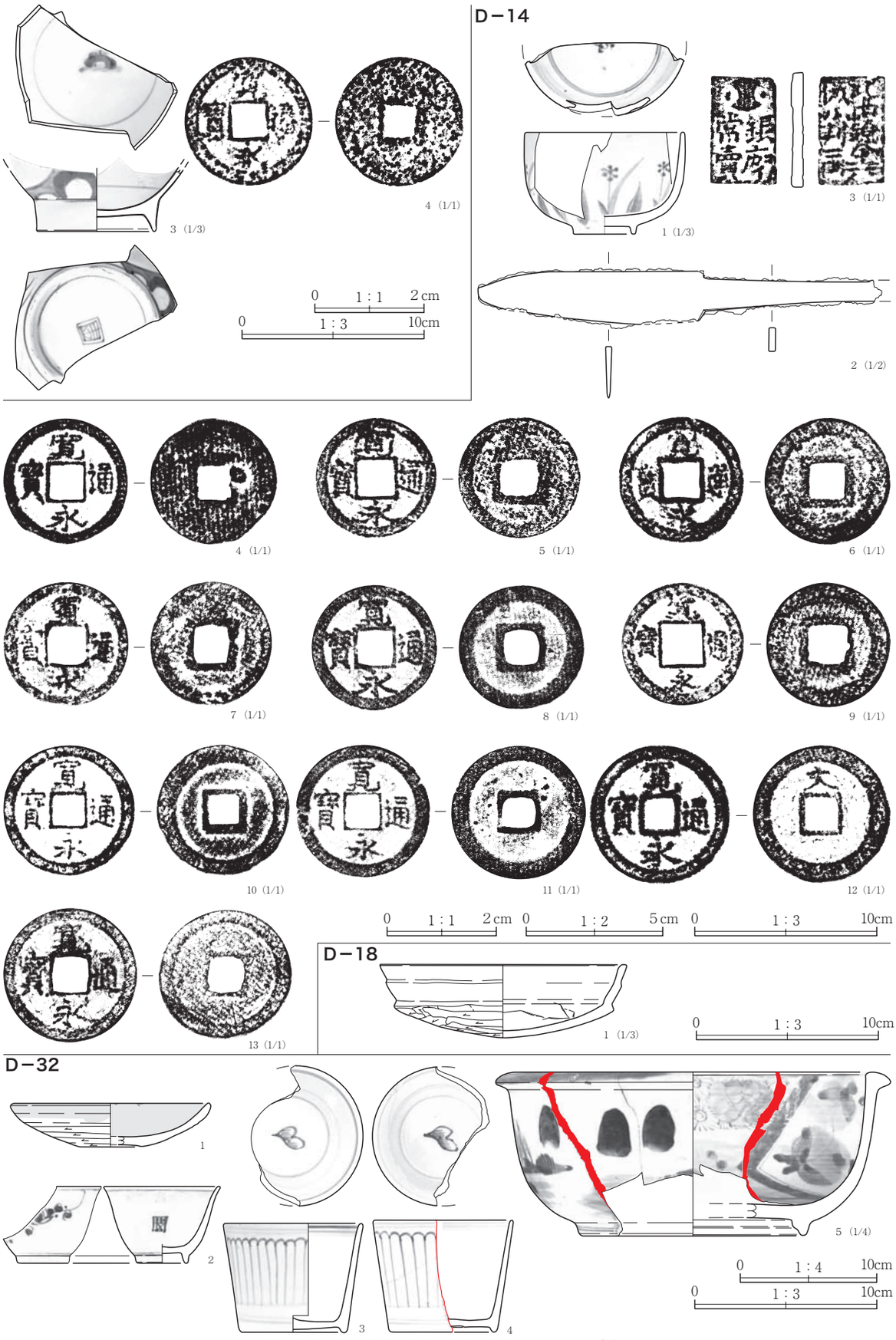


Fig.23　D−11・14・18・32号土坑出土遺物

oumi031.indd　31　　2010/11/17　12:20:03

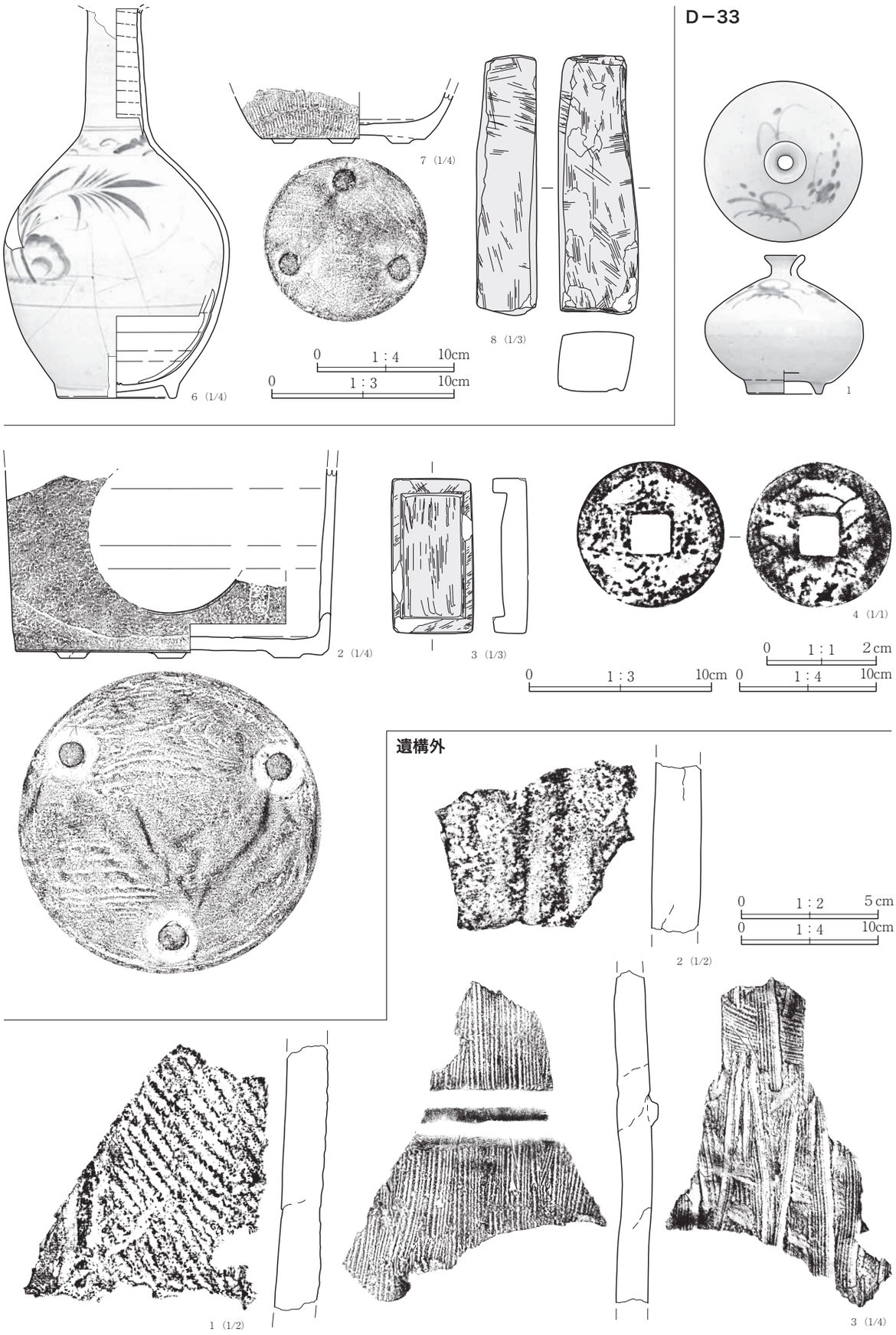


Fig.24　D－32・33号土坑、遺構外出土遺物

oumi031.indd 32　2010/11/17 12:20:10

遺構外

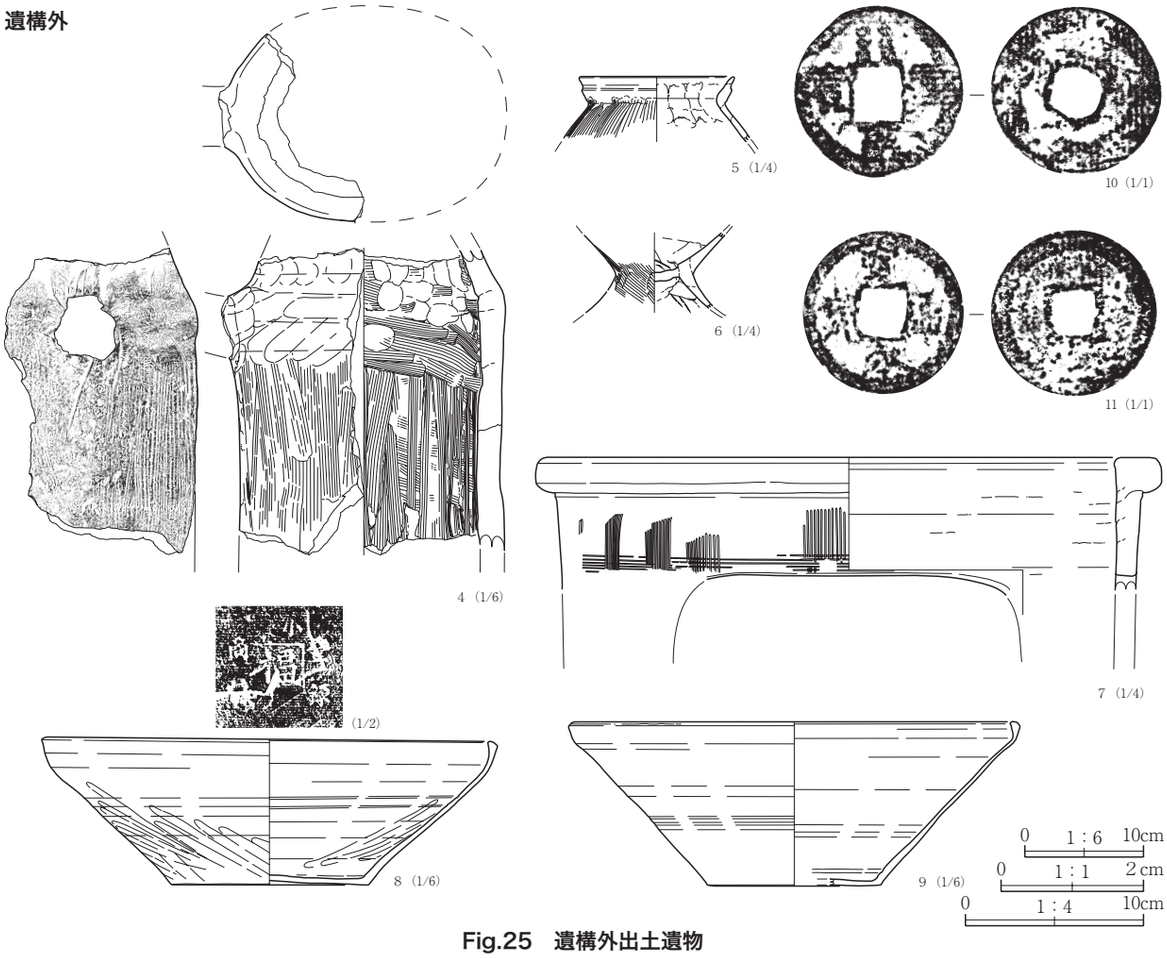


Fig.25　遺構外出土遺物

Tab.3　出土遺物観察表

H－1

番号	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況、備考
1	床面直上	土師器　坏	11.8	丸底	4.5	白・黒色粒、チャート、黒雲母	良好	橙色	外面口縁部ヨコナデ　以下ヘラケズリ。 内面口縁部ヨコナデ　以下ヘラナデ。	4/5残存。
2	床面直上	土師器　坏	12.5	丸底	4.1	白・黒・赤色粒、水晶	良好	明赤褐色	外面口縁部ヨコナデ　以下ヘラケズリ調整。 内面口縁部ヨコナデ　以下ヘラナデ調整。	ほぼ完存。
3	床面直上	土師器　甕	(17.1)	7.8	14.2	白・黒・橙色粒、石英･チャート、小石	良好	にぶい黄橙色	外面口縁部ヨコナデ　以下胴上半縦位ヘラケズリ、下半斜位ヘラケズリ。 内面口縁部ヨコナデ　以下ヘラナデ。　底部ヘラケズリ。	3/4残存　外面煤付着。

H－4

番号	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況、備考
1	覆土	須恵器　坏	(9.5)	－	(2.8)	白・黒・橙色粒	堅緻	灰黄色	外面ロクロによるヨコナデ　天囲部から中位ヘラケズリ。 内面ロクロによるヨコナデ。	1/4残存。
2	床面直上	土師器　坏	(16.4)	－	(5.7)	白・黒色粒、橙色粗粒	良好	橙色	外面口縁部ヨコナデ　以下ヘラケズリ。 内面口縁部ヨコナデ　以下ナデ。	1/3残存。
3	床面直上	土師器　坏	11.6	－	3.9	黒・橙色粒	良好	橙色	外面口縁部ヨコナデ　以下ヘラケズリ。 内面口縁ヨコナデ　以下ナデ。	完形。
4	P1覆土	土師器　坏	11.0	－	4.6	黒・橙色粒	良好	橙色	外面口縁部ヨコナデ　以下ヘラケズリ。 内面口縁部ヨコナデ　以下ナデ。	2/3残存。
5	覆土	土師器　坏	(11.4)	－	(3.3)	白・黒・橙色粒	良好	橙色	外面口縁部ヨコナデ　以下ヘラケズリ。 内面口縁部ヨコナデ　以下ヘラナデ。	1/4残存。
6	覆土	土師器　坏	12.2	－	3.9	白・黒色粒	良好	にぶい赤褐色	外面口縁部ヨコナデ　以下ヘラケズリ。 内面口縁部ヨコナデ　以下ヘラナデ後ユビナデ。	3/4残存。
7	覆土	土師器　高坏	－	(8.8)	(5.2)	黒・橙色粒	良好	橙色	外面台部ヘラケズリ　端部ヨコナデ。 内面台部ヘラナデ　端部ヨコナデ。	脚部のみ1/4残存。

H－5

番号	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況、備考
1	床面直上	須恵器　蓋	14.4	－	4.5	白・灰色粒、小礫	堅緻	黄灰色	外面ロクロ成形後、天囲部～中位回転ヘラケズリ調整。 内面ロクロナデ。	口縁部一部欠損。
2	床面直上	土師器　坏	11.3	丸底	3.6	白・黒・橙色粒	良好	橙色	外面口縁部ヨコナデ　以下ヘラケズリ。 内面口縁部ヨコナデ　以下指ナデ。	ほぼ完存。
3	床面直上	土師器　坏	11.3	丸底	3.8	灰・黒・橙色粒	良好	橙色	外面口縁部ヨコナデ　以下ヘラケズリ。 内面口縁部ヨコナデ　以下ヘラナデ及び指ナデ。	3/4残存。
4	床面直上	土師器　坏	(10.2)	丸底	2.95	白・黒・橙色粒	良好	明赤褐色	外面口縁部ヨコナデ　以下ヘラケズリ。 内面口縁部ヨコナデ　以下ヘラナデ。	1/3残存。
5	床面直上	土師器　坏	(11.0)	丸底	(3.6)	白・黒･橙色粒	良好	橙色	外面口縁部ヨコナデ　以下ヘラケズリ。 内面口縁部ヨコナデ　以下ヘラナデ及び指ナデ。	1/4残存。
6	床面直上	土師器　坏	(9.8)	丸底	3.1	白・黒・橙色粒	良好	明赤褐色	外面口縁部ヨコナデ　以下ヘラケズリ。 内面口縁部ヨコナデ　以下ヘラナデ及び指ナデ。	1/2残存。
7	覆土	土師器　坏	(11.2)	丸底	3.5	白・黒色細粒	良好	明赤褐色	外面口縁部ヨコナデ　以下ヘラケズリ。 内面口縁部ヨコナデ　以下ヘラナデ。	1/2残存。
8	覆土	土師器　坏	(7.9)	丸底	(5.6)	白・灰･橙色粒	良好	橙色	外面口縁部ヨコナデ　以下体部中位横位ヘラケズリ、下位、斜位ヘラケズリ。内面ヘラナデ及び指ナデ。	1/4残存。

oumi031.indd　33　　2010/11/17　12:20:12

番号	出土位置	種別、器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	石質	焼成	色調	重さ(g)	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況、備考
9	床面直上	石器 こも編石	11.1	7.5	3.0	粗粒安山岩	−	−	414.1		完存。
10	床面直上	石器 こも編石	11.0	6.4	3.2	砂岩	−	−	320.5		完存。
11	床面直上	石器 こも編石	11.6	7.0	3.8	石英閃緑岩	−	−	487.2		完存。
12	床面直上	石器 こも編石	14.3	8.3	3.8	安山岩	−	−	705.6		完存。
13	床面直上	石器 こも編石	13.5	8.1	4.4	粗粒安山岩	−	−	690.7		完存。
14	床面直上	石器 こも編石	13.0	6.9	4.1	粗粒安山岩	−	−	510.4		完存。
15	床面直上	石器 こも編石	13.2	6.8	4.3	粗粒安山岩	−	−	628.8		完存。
16	床面直上	石器 こも編石	12.3	5.4	4.0	粗粒安山岩	−	−	366.5		完存。
17	床面直上	石器 こも編石	12.1	5.1	5.0	粗粒安山岩	−	−	507.0		完存。
18	床面直上	石器 こも編石	11.2	6.1	3.2	石英閃緑岩	−	−	345.8		完存。
19	床面直上	石器 こも編石	13.4	6.0	3.5	粗粒安山岩	−	−	431.6		完存。
20	床面直上	石器 こも編石	15.4	9.5	3.5	粗粒安山岩	−	−	699.9		完存。
21	床面直上	石器 こも編石	15.4	7.5	5.0	粗粒安山岩	−	−	759.0		完存。
22	床面直上	石器 こも編石	11.1	(6.4)	3.6	粗粒安山岩	−	−	300.1		完存。
23	床面直上	石器 こも編石	10.4	6.9	2.6	粗粒安山岩	−	−	296.8		完存。
24	床面直上	石器 こも編石	14.8	6.8	3.7	粗粒安山岩	−	−	641.3	裏面平坦、磨耗。 磨石として併用か。	完存。
25	床面直上	石器 こも編石	12.9	6.2	3.8	安山岩	−	−	503.6	裏面平坦。	完存。
26	床面直上	石器 こも編石	12.1	7.4	3.8	粗粒安山岩	−	−	424.9		完存。
27	床面直上	石器 こも編石	12.4	6.5	3.7	頁岩	−	−	337.4		一部欠損。
28	床面直上	石器 こも編石	15.5	8.5	4.7	粗粒安山岩	−	−	1038.9		完存。
29	床面直上	石器 こも編石	11.4	7.1	3.7	粗粒安山岩	−	−	408.1		完存。

H−7

番号	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況、備考
1	覆土	須恵器　瓶	(8.9)	−	(4.6)	白・黒色粒	堅緻	褐灰色	外面ロクロ成形。口縁部3条櫛描波状文。 内面ロクロ成形。	口縁〜肩部片。
2	覆土	土師器　坏	(10.5)	丸底	(3.1)	白・黒色粒	良好	橙色	外面口縁部ヨコナデ　以下ヘラケズリ。 内面口縁部ヨコナデ及びナデ。	口縁〜体部上位片。
3	覆土	土師器　甕	(18.3)	−	(8.0)	白・黒･茶色粒	良好	橙色	外面口縁部ヨコナデ　以下ヘラケズリ。 内面口縁部ヨコナデ及び指ナデ、以下ヘラナデ。	口縁〜肩部片。

H−8

番号	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況、備考
1	覆土	土師器　高坏	(16.9)	−	(6.7)	白・黒色粒	良好	橙色	外面口縁部ヨコナデ　以下ヘラケズリ後縦位指ナデ。 内面口縁部ヨコナデ　以下ヘラナデ後指ナデ。	坏部4/5。

H−9

番号	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況、備考
1	貯蔵穴	土師器　坏	11.4	丸底	4.1	白・黒色粒、 小礫	良好	橙色	外面口縁部ヨコナデ　以下ヘラケズリ。 内面口縁部ヨコナデ　以下ナデ。	完存。
2	覆土	土師器　坏	(10.5)	丸底	(3.0)	白・黒色粒	良好	橙色	外面口縁部ヨコナデ　以下ヘラケズリ。 内面口縁部ヨコナデ　以下ユビナデ。	1/8残存。
3	覆土	土師器　坏	(12.5)	丸底	(3.5)	黒色粒、水晶	良好	にぶい褐色	外面口縁部ヨコナデ　以下ヘラケズリ。 内面口縁部ヨコナデ　以下ナデ。	口縁〜体部片。

H−10

番号	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況、備考
1	覆土	須恵器　蓋	(11.5)	−	(3.5)	白・黒色粒	堅緻	灰黄色	外面ロクロ成形後、天囲部回転ヘラケズリ調整。 内面ロクロ成形後。	天囲部中位〜口縁部片。
2	覆土	須恵器　高坏	−	−	(5.9)	白・黒色粒	堅緻	黄灰色	ロクロ成形。	脚部片。
3	覆土	土師器　坏	(12.7)	丸底	(4.5)	黒・灰･赤色粒	良好	明赤褐色	外面口縁部ヨコナデ　以下ヘラケズリ。 内面口縁部ヨコナデ　以下ナデ。	2/5残存。
4	竈	土師器　坏	(14.9)	丸底	(2.9)	茶･黒色粒	良好	明赤褐色	外面口縁部ヨコナデ　以下ヘラケズリ。 内面口縁部ヨコナデ　以下ナデ。	口縁〜体部片。
5	床下土坑	土製品　土錘	−	−	−	白・黒・赤色粒	良好	灰黄褐色	指ナデ成形・調製。	1/2残存　重量9.0g。

H−11

番号	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況、備考
1	覆土	須恵器　高坏	−	−	(6.1)	白・黒色粒	堅緻	黄灰色	ロクロ成形。	脚部片。
2	覆土	土師器　坏	(14.2)	丸底	(3.1)	白・黒色粒	良好	にぶい褐色	外面口縁部ヨコナデ　以下ヘラケズリ。 内面口縁部ヨコナデ　以下ナデ。	口縁〜体部片。
3	覆土	土師器　坏	(12.3)	丸底	(2.2)	黒雲母	良好	明赤褐色	外面口縁部ヨコナデ　以下ヘラケズリ。 内面口縁部ヨコナデ　以下ナデ。	口縁〜体部片。

H−12

番号	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況、備考
1	覆土	須恵器　甕	(6.3)	−	(3.0)	白・黒色細粒	堅緻	灰色	外面口縁部ヨコナデ後端部に文様あり。胴部ハケ目あり。 内面口縁〜肩部ロクロによるヨコナデ。	口縁部片。
2	床面直上	土師器　坏	(12.7)	丸底	(4.7)	白・黒･茶色粒	良好	明赤褐色	外面口縁部ヨコナデ　以下ヘラケズリ。 内面口縁部ヨコナデ　以下指オサエ後ナデ。	1/4残存。
3	覆土	土師器　坏	13.0	丸底	4.5	白・黒色粒	良好	明赤褐色	外面口縁部ヨコナデ　以下ヘラケズリ。 内面口縁部ヨコナデ　以下ユビナデ。	3/4残存。
4	覆土	土師器　坏	(13.3)	丸底	(4.3)	白・黒色細粒	良好	明赤褐色	外面口縁部ヨコナデ　以下ヘラケズリ。 内面口縁部ヨコナデ　以下ヘラナデ後ユビオサエ後ヨコナデ。	1/3残存 内外面煤付着。
5	覆土	土師器　坏	(11.3)	丸底	(3.4)	白・黒・橙色粒	良好	明赤褐色	外面口縁部ヨコナデ　底部ヘラケズリ後ミガキ。 内面口縁部ヨコナデ後ミガキ　底部ミガキ。	1/8残存。
6	覆土	土師器　坏	(14.6)	丸底	(3.7)	白・黒・ 橙色粒少量	良好	にぶい黄橙色	外面口縁〜底部ヨコナデ。 内面口縁部ヨコナデ　以下ヘラケズリ。	1/8残存　体部煤付着。

oumi031.indd　34　　2010/11/17　12:20:13

番号	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況、備考
7	床面直上	土師器　甕	(15.4)	−	(14.3)	白・黒色粒	良好	にぶい黄色	外面口縁部ヨコナデ　以下肩部～胴中位縦位ヘラケズリ、下位斜位ヘラケズリ。 内面口縁部ヨコナデ　以下ヘラナデ。	口縁～胴部片。
8	床面直上	土師器　甑	欠損	9.0	(13.6)	白・黒・茶色粒	良好	明赤褐色	外面口縁部ヘラケズリ。底部ヘラケズリ 内面胴部ヘラナデ、下端部横位ヘラケズリ。	胴下半～底部3/4。
9	覆土	土師器　甕	17.9	4.6	36.9	白・黒色粒、黒雲母	良好	にぶい黄橙色	外面口縁部ヨコナデ　以下斜位ヘラケズリ、下端部横位ヘラケズリ。底部ヘラケズリ。 内面口縁部ヨコナデ　以下ヘラナデ。	3/4残存 外面口縁部にヘラ止め痕顕著。

H−15

番号	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況、備考
1	覆土	土師器　坏	(14.1)	丸底	(4.25)	白・黒・橙色粒	良好	明赤褐色	外面口縁部ヨコナデ　以下ヘラケズリ。 内面口縁部ヨコナデ　以下ヘラナデ。	1/4残存。

W−1

番号	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況、備考
1	覆土上層	かわらけ	8.3	3.9	2.3	白色粒、黒雲母	良好	にぶい褐色	外面ロクロナデ、底部回転糸切り。 内面ロクロナデ。	ほぼ完存 内・外面煤付着。
2	覆土上層	陶器 筒形香炉	(9.8)	(7.5)	5.5	粘土質	堅緻	明黄褐色	ロクロ成形。	1/4残存 瀬戸美濃　18ｃ前。
3	覆土上層	軟質陶器 焙烙	(35.8)	(33.0)	5.4	白・黒色細粒	良好	褐灰色	外面ロクロ成形後、底部ヘラナデ調整。 内面ロクロ成形後、底部ヘラナデ調整。	1/5残存　外面煤付着。
4	覆土上層	焼締陶器 擂鉢	−	(16.1)	(6.2)	石英粗粒　小礫	堅緻	橙色	外面ロクロ成形後体部下位ヘラケズリ調整　底部ヘラケズリ。 内面ロクロ成形後7条の櫛状工具による溝を施す。	体部～底部片。信楽。
5	覆土上層	瓦器　甕	(15.7)	−	(6.9)	白・黒・橙色粒 黒雲母	良好	にぶい黄橙色	外面口縁部ヨコナデ　以下ヘラケズリ後指ナデ調整。 内面口縁部ヨコナデ　以下ヘラナデ後指ナデ調整。	口縁～肩部片。

番号	出土位置	種別、器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	石質	焼成	色調	重さ（g）	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況、備考
6	覆土	石製品　五輪塔 空風輪	29.2	16.8	−	粗粒安山岩	−	−	7100	種子「キャ」「カ」	ほぼ完存。

W−5

番号	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況、備考
1	覆土	かわらけ	(8.1)	4.5	2.8	白・黒・橙色粒 黒雲母	良好	暗灰黄色	外面回転ナデ成形　底部回転糸切り。 内面回転ナデ成形。	2/3残存。

D−11

番号	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況、備考
1	覆土	陶器　皿	(12.0)	6.3	3.1	粘土質	堅緻	灰オリーブ色	ロクロナデ成形。 底部回転糸切り後回転ヘラケズリ後付高台。	3/5残存 瀬戸美濃　18ｃ前。
2	覆土	磁器　端反碗	(10.5)	(4.0)	6.1	粘土質	堅緻	灰白色	ロクロ成形　外面染付。 内面染付　縁格子。	2/5残存 肥前系　18c後～19c中。
3	覆土	磁器　広東碗	−	(6.5)	(3.5)	粘土質	堅緻	灰白色	ロクロ成形　外面染付　見込み・底部。	体部～底部片 肥前系　18c後～19c中。

番号	出土位置	銭種名	初鋳年代	材質	外径	穿幅	厚さ	重量	残存状況、備考
4	覆土	寛永通寶（古寛永銭）	1636年	銅	23.70㎜	5.77㎜	1.55㎜	2.6ｇ	完存。

D−14

番号	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況、備考
1	覆土	磁器　碗	(8.6)	(3.3)	5.6	粘土質	堅緻	灰白色	ロクロ成形　外面染付。	2/5残存 肥前系　18c後～19c中。

番号	出土位置	種別、器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径（㎝）	焼成	色調	重さ（g）	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況、備考
2	覆土	鉄製品 小刀	(14.8)	2.0	0.2	−	−	−	20.1		刀部数ヶ所。 基部先端欠損。

番号	出土位置	銭種名	初鋳年代	材質	縦	横	厚さ	重量	残存状況、備考
3	覆土	文政南鐐二朱銀 （土製摸造貨）	−	土製	20.10㎜	10.2㎜	2.0㎜	0.8ｇ	完存。

番号	出土位置	銭種名	初鋳年代	材質	外径	穿幅	厚さ	重量	残存状況、備考
4	覆土	寛永通寶（古寛永銭）	1636年	銅	19.70㎜	6.13㎜	1.15㎜	2.6ｇ	完存。
5	覆土	寛永通寶（古寛永銭）	1636年	銅	22.45㎜	7.20㎜	1.08㎜	2.1ｇ	完存。
6	覆土	寛永通寶（古寛永銭）	1636年	銅	23.16㎜	7.16㎜	1.12㎜	2.5ｇ	完存。
7	覆土	寛永通寶（古寛永銭）	1636年	銅	22.80㎜	7.01㎜	0.94㎜	1.5ｇ	完存。
8	覆土	寛永通寶（古寛永銭）	1636年	銅	23.16㎜	6.50㎜	0.98㎜	2.5ｇ	完存。
9	覆土	寛永通寶（古寛永銭）	1636年	銅	22.75㎜	7.46㎜	1.24㎜	2.5ｇ	完存。
10	覆土	寛永通寶（古寛永銭）	1636年	銅	24.58㎜	6.19㎜	1.32㎜	2.9ｇ	完存。
11	覆土	寛永通寶（古寛永銭）	1636年	銅	24.83㎜	5.85㎜	1.14㎜	2.6ｇ	完存。
12	覆土	寛永通寶（文銭）	1688年	銅	25.27㎜	6.30㎜	1.20㎜	3.2ｇ	完存。
13	覆土	寛永通寶（新寛永銭）	1697年	銅	24.53㎜	6.71㎜	0.84㎜	1.8ｇ	完存。

D−18

番号	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況、備考
1	床面直土	土師器　坏	13.5	丸底	4.0	白・黒･橙色粒	良好	橙色	外面口縁部ヨコナデ　以下ヘラケズリ。 内面口縁部ヨコナデ　以下ヘラナデ。	5/6残存　外面煤付着。

D−32

番号	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況、備考
1	覆土	陶器　灯明皿	10.8	3.4	2.4	粘土質	堅緻	にぶい黄橙色 にぶい褐色	外面ロクロ成形後　体部中位以下回転ヘラケズリ。 底部回転糸切り後　回転ヘラケズリ調整。 内面ロクロ成形。鉄釉。	ほぼ完存 口端部に炭化物付着 瀬戸美濃　19ｃ中。
2	覆土	磁器　盃	(6.3)	2.7	4.2	粘土質	堅緻	灰白色	ロクロ成形　外面染付　銘。	3/4残存。 肥前系　17ｃ中。
3	覆土	磁器 そば猪口	(7.5)	5.7	6.0	粘土質	堅緻	明青灰色	ロクロ成形。 外面染付　見込み　花弁。	1/2残存 肥前系　18c後～19c中。
4	覆土	磁器 そば猪口	(7.6)	5.7	6.1	粘土質	堅緻	明赤灰	ロクロ成形。 外面染付　見込み　花弁。	2/3残存　焼き接ぎ痕 肥前系　18c後～19c中。
5	覆土	磁器　鉢	(20.0)	(12.3)	9.0	粘土質	堅緻	灰白色	ロクロ成形。 内・外面染付。	2/5残存。焼き接ぎ痕 肥前系　18c。

oumi031.indd　35　　2010/11/17　12:20:14

D－32

番号	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴		残存状況、備考
6	覆土	磁器　瓶	－	(8.6)	(28.5)	粘土質	堅緻	灰白色	ロクロ成形　外面染付。		2/3残存。 肥前系　17c。
7	覆土	軟質陶器 焜炉	－	11.9	(3.7)	白・黒色粒	良好	黄灰色	外面ロクロ成形後5本単位ハケナデ 底部ヘラケズリ調整後、3ヶ所に脚添付。 内面ロクロ成形。		底部のみ残存 脚部直径1.4cm。
番号	出土位置	種別、器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	石材	焼成	色調	重さ（g）	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況、備考
8	床面直上	石製品 砥石	14.3	3.3	3.3	砥沢石	－	－	381.4	表・裏左右側面・上下面、 全面に研磨痕有り。	ほぼ完存。

D－33

番号	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴		残存状況、備考
1	覆土	磁器　油壺	2.1	4.0	7.6	粘土質	堅緻	灰白色	ロクロ成形　外面染付。		完存 肥前系　18c。
2	覆土	軟質陶器 焜炉	－	22.4	(13.8)	白･黒色粒 黒雲母	良好	オリーブ黒色	ロクロ成形　底部糸切り後ヘラナデ　脚添付。 体部に円形の窓。外面に刻銘「鈴岩」。		胴部～底部残存。 脚部直径1.8～1.9cm。
番号	出土位置	種別、器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	石質	焼成	色調	重さ（g）	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況、備考
3	覆土	石製品　硯	8.5	4.5	1.9	砥沢石	－	－	131.8	硯縁に若干墨が残存。 四隅が目面取りされている。	ほぼ完存。 携帯用か。

番号	出土位置	銭種名	初鋳年代	材質	外径	穿幅	厚さ	重量	残存状況、備考
4	覆土	文久永寶	1863年	銅	26.85㎜	7.11㎜	1.41㎜	3.3ｇ	完存　背面十一波。

遺構外

番号	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴		残存状況、備考
1	表採	縄文　深鉢	－	－	(9.7)	白・黒・橙色粒 黒雲母	良好	にぶい黄橙色	縦位隆線1条。隆線区画内縄文施文。ＲＬ。		胴部片　加曾利Ｅ式。
2	表採	縄文　深鉢	－	－	(6.2)	白・黒色粒 水晶	良好	橙色	縦位隆線2条。（隆線区画内）縄文施文。		胴部片　加曾利Ｅ式。
3	表採	埴輪 円筒埴輪	－	－	(24.5)	白・黒色粒 黒雲母	良好	明赤褐色	外面ハケメ7本単位。垂直及び左傾斜ハケ。 内面深いハケメ7本単位。垂直及び垂平ハケ。		胴部片 透孔又は副次孔有り。
番号	出土位置	種別、器種	高さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴		残存状況、備考
4	表採	形象埴輪 戟形埴輪か	(25.7)	－	(16.5)	白・黒色粒 黒雲母	良好	明赤褐色	外面肩部ナデ、胸部以下縦ハケ。 内面肩部～胸部横ハケ、以下横ハケ後縦ハケ。		矛・戈付根部破片。
番号	出土位置	種別、器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴		残存状況、備考
5	表採	土師器 台付甕	(8.6)	－	(3.6)	白・黒色粒 水晶	良好	暗灰黄色	外面口縁部ヨコナデ　以下縦位ハケナデ。 内面口縁部ヨコナデ　以下指ナデ。		口縁～肩部片。
6	表採	土師器 台付甕	－	－	(4.4)	白・黒色粒 チャート	良好	にぶい黄橙色	外面ヘラケズリ後ハケ状工具によるナデ。 内面坏部ヘラケズリ。脚部ヘラナデ及び指ナデ。		坏部底部～脚部中位。
7	表採	軟質陶器 焜炉	(34.2)	(32.0)	(7.7)	白色粒	良好	黒色	外面ロクロ成形後12条の櫛状工具による調整。 内面ロクロ成形。体部に窓。		1/4残存 全面煤付着。
8	表採	軟質陶器　鉢	38.4	16.7	12.5	白・黒・橙色粒	やや軟質	灰色	外面ロクロ成形後体部下半指ナデ調整。底部回転ヘラケズリ。 内面ロクロ成形。見込みに刻銘「『福』。		ほぼ完存。
9	表採	軟質陶器　鉢	(37.2)	(14.6)	13.8	粘土質	普通	オリーブ黒	外面ロクロ成形　底部ヘラケズリ。 内面ロクロ成形。		1/4残存。

番号	出土位置	銭種名	初鋳年代	材質	外径	穿幅	厚さ	重量	残存状況、備考
10	表採	紹聖元寶か	1094年	銅	23.79㎜	6.98㎜	1.27㎜	3.2ｇ	完存　表面磨滅。
11	表採	寛永通寶（古寛永銭）	1636年	銅	23.57㎜	6.32㎜	1.18㎜	2.2ｇ	完存。

oumi031.indd　36　　2010/11/17　12:20:14

Ⅵ　まとめ

今回の調査では古墳時代後期、中世、近世の遺構が確認された。ここでは調査成果を基に本遺跡の主たる遺構である竪穴住居跡・蒼海城堀跡を中心に考察しまとめとしたい。

1　竪穴住居跡

確認された竪穴住居跡16軒の内、年代が特定できないＨ－２・14・16以外の13軒は概ね古墳時代後期（６世紀後半～７世紀前半）の年代が与えられる。周辺遺跡においても概期の住居跡が主体を占めるため本遺跡もその集落の一部を形成していたと考えられる。

住居跡の規格は６×６ｍ前後の方形が多く、Ｈ－６・９のような４ｍ四方程度の小形も見受けられる。主軸方向は主に東－西・北東－南西方向に分かれる。四隅には主柱穴が掘られ、竈を有する住居跡については竈正面右脇で貯蔵穴が確認された（Ｈ－７は左脇）。竈は東・北東方向（３基）と南西方向（１基）の４基確認され、共通項として壁面への掘り込みが浅く奥壁が直立するため煙道部が短い、焚口から燃焼部にかけての落ち込みが緩い、袖・天井の補強材として石材が用いられている等が挙げられる。出土遺物では「模倣坏」の範疇に収まる土師器坏、長胴の土師器甕、須恵器蓋・高坏が共に古墳時代後期の様相を示している。本遺跡周辺の集落は７世紀前半頃で一旦途切れる。その後に集落が続かないのは国府造営に関係するのか単に集落が移動しただけなのか判然とせず、今後の調査課題でもある。

2　蒼海城堀跡

今回の調査で確認された調査区を東西方向に横断するＷ－１、調査区中央から南方向へと伸びるＷ－２は共に蒼海城の堀跡と考えられる。以下では本遺跡と周辺での調査結果を基に蒼海城の堀跡を検討し、本遺跡の堀跡の位置付けと現状での蒼海城に対する認識と課題を明示したい。

蒼海城の歴史

蒼海城が立地する元総社地区は古代に上野国府が存在し、その地割りを利用して城が造られたと云われているが、それを明確に示す文献･考古史料は見つかっていない。築城年代は定かではないが、『上毛伝説雑記拾遺』「総社記」に「長元元年戊辰（1028）六月、上総介平忠常下総国より引移らる、其の嫡子下総介常重、其の長子千葉介常胤、此の時城鎮護の為めに、五智の如来を城の四方に数箇寺を建立有って安置す」とあり、城（館か）としての存在が窺える。また『吾妻鏡』に「治承四庚子年（1180）九月晦日巳卯（中略）足利太郎俊綱、平家方人の為、同国府中の民居を焼き払う、是源家に属す輩の居住故也」とある。これは元総社地域を支配していた千葉常胤（源氏方）に対して足利俊綱（平氏方）が府中（国府周辺）を焼き払ったとの記載であり、国府あるいは国府周辺に千葉氏の居館が存在したことが証明できる史料である。こういった居館が初期蒼海城の姿ではないだろうか。

建武四年（1337）、山内上杉憲顕が上野国守護となる。上杉氏の家宰である長尾氏は14世紀中頃までには上野国に入部したと考えられる[(1)]。その後、長尾氏は白井城の白井長尾氏、蒼海城の総社長尾氏とに分立し守護代として栄えていくことになる。

享徳三年（1454）に開始される享徳の乱は東国全体が戦乱の渦中に巻き込まれていく。上野国でも長尾景春の乱（文明九年、1477）、長享の乱（長享元年、1487～）が相次いで起こる。これらの戦乱を契機として蒼海城も防御施設の拡張を行い城郭化していったと考えられる。「蒼海城絵図」（総社資料館蔵）に描かれている蒼海城はこの時代の姿であろうか。

大永七年（1527）、北条氏綱と誼を結ぶようになった白井・総社長尾氏と上杉方である箕輪・厩橋長野氏との間に抗争が勃発し、蒼海城は長野方業の攻撃を受ける。後に両長尾氏は上杉家との関係を修復するが、長野氏とは依然緊張関係にあった。

永禄九年（1566）九月、甲斐国の武田信玄によって箕輪城が落城、翌年蒼海城も攻略され西上野は武田氏の

oumi031.indd　37　　2010/11/17　12:20:14

支配域となる。蒼海城攻略の論功行賞により高井・川曲・上野・阿弥陀寺（以上前橋市）・粟崎・中島・釈尊寺分（前橋市）などが瀬下豊後守に与えられる。高井、阿弥陀寺、釈尊寺は元総社周辺にみられる地名である。甘楽郡瀬下郷（富岡市）を本貫地とする瀬下氏は、妙見寺梵鐘銘や「関東幕注文」の総社衆の一人として記載されていることからも長尾氏の有力被官であった。永禄四年（1561）、甘楽に攻め込まれた時に武田方に降伏し、それ以後従っていたと考えられている。[2]

その後、元総社地域は武田・上杉・織田・北条の支配を繰り返し、天正十八年（1590）の小田原落城により徳川家康の支配域となる。蒼海城には同年に諏訪頼忠、慶長六年（1601）には諏訪頼水（頼忠の子）に替わって秋元長朝が入部する。当時の城内は『上毛伝説雑記』に「戦後荒廃に帰し、普請成り兼ねたるにより城地艮（東北）に長屋を建てて居住した」と記されている。諏訪氏在城時は戦乱に明け暮れた城に対して一時凌ぎの修築に留めたと考えられる。秋元長朝は荒廃した城を大改築するよりも父景朝のゆかりの地である植野勝山（現在の総社町付近）に新城（総社城）を築くことを選んだようである。総社城築城までの間は蒼海城の東側に位置する八日市城に居住、慶長十五年（1610）に完成し入城、蒼海城は廃城となった。

周辺遺跡で確認された蒼海城の遺構

蒼海城周辺では近年継続的に行われている区画整理事業に伴う発掘調査により調査成果の増加傾向にある。以

Fig.26　蒼海城縄張図（山崎　一　1978　『群馬県古城塁址の研究　上巻』より）

oumi031.indd　38　　2010/11/17　12:20:15

Tab.4　蒼海城関連年表

年　号	西　暦	月　日	事　　項	原書・引用文献等
長元元年	1028		上総介平忠常が下総国より移り住む。	『上毛伝説雑記拾遺』「総社記」
	12世紀中頃		平忠常の孫千葉介常胤、城（館か）鎮護のために、城の四方に数箇寺を建立し五智の如来を安置する。	『上毛伝説雑記拾遺』「総社記」
治承四年	1180	九月三十日	平家方の足利太郎俊綱、上野国府中にある源家方の居住（千葉氏の館か）を焼き払う。	『吾妻鏡』
建長三年	1251	四月二十六日	四月十九日に赤城山が焼けた（火事・噴火か不明）のを、上野国在庁が「先例兵革の兆」と幕府に注進する。	『吾妻鏡』
建武四年	1337		山内上杉憲顕、上野国守護となる。	『上杉家文書』
応安元年	1368	三月九日	長尾忠房（総社長尾氏の祖）、相州の御霊宮を総社へ勧請する。	『修史館本惣社長尾系図』
応永十七年	1410	十一月三日	長尾左金吾憲明と瀬下弾正忠成忠、祈願成就のため府中妙見寺に梵鐘を奉納する。	群馬町（現高崎市）東国分出土梵鐘銘文
永享元～三年	1429～31		蒼海城水不足のため橘山の麓より利根川の水を引く。	『上毛伝説雑記拾遺』「総社記」
文明十七年	1486		上杉顕定と長尾顕忠、上野国府（蒼海城か）に出陣し長野氏と戦う。	『北国紀行』
長享二年	1488	九月二十九日	僧万里、馬上より上野総社を望拝してみると、数年前の戦乱で数株の老樹に斧の傷跡を残すが、村落は平和に回復している様子が窺える。	『梅花無尽蔵』
大永七年	1527	十二月	総社の長尾顕景、厩橋宮内大輔（長野方業）の攻撃を受け越後の長尾為景に救援を求める。	『上杉家文書』
享禄元年	1528	正月二十四日	白井の長尾景誠、家臣に殺害される。長野業政、白井を攻略し総社の長尾景房（のち憲景）を招き白井長尾の当主とする。	『双林寺伝記』
永禄元年	1558	八月	上杉憲政の越後入りについて白井・総社長尾氏、長野氏、太田氏が同意し長尾景虎（上杉謙信）がこれを受け入れる。	『双林寺伝記』
永禄三年	1560		景虎、関東へ出陣。総社長尾氏これに参陣。	『関東幕注文』
永禄五年	1562	九月	武田信玄、上野に出兵し箕輪、総社（蒼海）、倉賀野を攻める。	『茨城県小田部庄右衛門氏所蔵文書』
永禄七年	1564	六月二十三日	信玄、長尾能登守（総社長尾氏）の息女らの人質交換について命じる。	『羽田文書』
		十二月	上杉輝虎（謙信）、総社（蒼海）城防備のため沼田在城衆、松本石見守らを入城させる。	『群馬県史』資料編７・二二三八
永禄八年	1565	二月七日	信玄、信濃新海社・諏訪上宮などに箕輪、総社（蒼海）、白井、嶽山、尻高の掌握を祈願する。	『茅野市守矢家文書』
		二月二十六日	信玄、三ノ宮（吉岡町）の陣を払い、総社口へ移動する。	『永禄日記』
永禄十年	1567		信玄、蒼海城を攻略。総社長尾氏、越後へ退去。	『長尾氏の研究』
		五月五日	信玄、総社攻略の功により瀬下豊後守に高井、川曲、上野、阿弥陀寺、釈迦寺（釈尊寺）などを宛行。	『上州瀬下氏由緒書』、『上州諸家所蔵古文書』
天正十年	1582	三月	武田氏滅亡。滝川一益、厩橋城に入城し上州諸将これに恭順する。	『群馬県史』通史編３中世
		六月	神流川の合戦。滝川一益、伊勢に退去。	『群馬県史』通史編３中世
天正十一年	1583	二月二十八日	北条氏邦、宇津木氏久に総社の瀬下氏が氏邦に恭順していることを伝える。	『宇津木家文書』
天正十三年	1585	六月十七日	上杉景勝、瀬下豊後守に日頃の忠節をねぎらい、関東への出兵がないことを伝える。	『丸山文庫』
天正十七年	1589	十月二十四日	総社の瀬下豊後守、秀吉侵攻のため北条氏より出陣を求められていたが免除される。	『高崎市史』資料編４中世・五八八
天正十八年	1590		北国勢（豊臣方）によって厩橋、石倉、総社（蒼海）、和田、大戸、金山以下の諸城が相次いで陥落。	『群馬県史』通史編３中世
		七月五日	小田原城開城。	『群馬県史』通史編３中世
			徳川家康の関東入封。	『群馬県史』通史編３中世
		十一月	諏訪頼忠、総社（蒼海）に一万二千石で封ぜられる。城は荒廃し普請し難いため城の東北に長屋を築き居住する。	『上毛伝説雑記拾遺』「総社記」
慶長六年	1601		諏訪頼水、信濃高島城へ移封。秋元長朝が入部（六千石）し、総社城の築城を始める。仮の居住として八日市城へ移る。	『前橋市史』第一巻
慶長十五年	1610		総社城が完成し、蒼海城は廃城となる。	『日本城郭大系』４茨城・栃木・群馬

下では確認された蒼海城の遺構について概観したい。(3)

元総社蒼海遺跡群（１）４トレンチではW－３が確認されている。縄張図によれば城域北西端部の沼として描かれているが、調査結果からは湛水の痕跡は検出されておらず空堀の可能性が高い。

元総社蒼海遺跡群（６）西側調査区では薬研堀の形態をもつW－３が確認されている。縄張図においては元総社蒼海遺跡群（１）の堀跡と同一のものであり、底部においては空堀に雨水等が流れた痕跡が確認され同様の調査結果を示している。

元総社蒼海遺跡群（14）では１トレンチでW－１、５トレンチでW－31が堀跡として確認されており、共に東西方向へと走行する。W－１は位置関係からみて後述する元総社蒼海遺跡群（23）23地点、W－２と同一のものと考えられる。

元総社蒼海遺跡群（21）の９地点１区では「鎌田屋敷」に隣接する２時期の堀跡が確認され（W－１・３）、断面観察から古段階であるW－３を埋め戻す際に新段階のW－１の掘削土を使用したことがわかっている。また断面のみではあるがW－１に付随すると考えられる土塁の痕跡も確認されている。27地点については後述する。

元総社蒼海遺跡群（23）23地点ではW－１とW－２が確認され、W－１は土層観察から作り直しの可能性が推測されている。W－２はW－１に対して垂直方向に位置しており規模・位置関係からW－１に付随する堀跡と考えられる。縄張図においてW－１は城域中央部を南北に貫く堀跡に比定される。共に流水の痕跡は確認されていない。24地点及び元総社蒼海遺跡群（21）27地点では700基にも及ぶピット群が確認され蒼海城に関連する建物跡が想定される。また堀跡も古段階とされるW－２（27地点）・５、新段階とされるW－１とW－３・６（27地点）との時期差があることがわかった。縄張図においてはW－１が北方に位置する本丸と二の丸とを分断する堀跡と描かれている。W－３・６の円形に回る堀跡は丸馬出に伴うものであり、本丸への進入口と考えられる。「松井屋敷」脇の堀跡が想定される25・26地点ではトレンチ調査が行われ、堀底のみの検出となった。

oumi031.indd　39　　2010/11/17　12:20:15

Tab.5　蒼海城堀跡一覧表

遺跡名	区・地点	遺構名	平均値（m）			断面形状	確認長	軸方向	堀の形態	出土遺物	備　考
			上幅	下幅	深さ		(m)				
元総社蒼海遺跡群（1）	4トレンチ	W－3	12	1.2	3.5	逆台形	14.4	北西－南東	空堀		
元総社蒼海遺跡群（6）	西側調査区	W－3	11	0.3	3	V字状	13.5	南－北	空堀・薬研堀		
元総社蒼海遺跡群（14）	1トレンチ	W－1	2.2	1.1	0.6	U字状	5.5	東－西	－	古銭	
元総社蒼海遺跡群（14）	5トレンチ	W－31	(8.0)	1.6	4.5	V字状	24.3	東－西	薬研堀	擂鉢、焙烙	
元総社蒼海遺跡群（21）	9地点1区	W－1	10.2	2.3	3.3	逆台形	11.5	南－北	空堀	内耳鍋	
元総社蒼海遺跡群（21）	9地点1区	W－3	4.6	0.5	3.0	V字状	7.6	南－北	空堀		
元総社蒼海遺跡群（21）	27地点	W－2	(2.6)	(1.8)	1.5	［逆台形］	21.0	南－北	［空堀・箱堀］		
元総社蒼海遺跡群（21）	27地点	W－3	1.3	0.6	1.1	逆台形	－	－	空堀か	中位から白磁碗	丸馬出に伴う堀跡
元総社蒼海遺跡群（23）	23地点	W－1	(5.0)	0.4	2.6	逆台形	30.5	南－北	空堀	青磁碗	
元総社蒼海遺跡群（23）	23地点	W－2	2.5	0.5	1.2	逆台形	11.7	東－西	空堀	内耳鍋・鉢	
元総社蒼海遺跡群（23）	24地点	W－1	(3.3)	－	(2.7)	－	16.0	東－西	－	青磁碗・宝篋印塔	本丸－二の丸間の堀跡
元総社蒼海遺跡群（23）	24地点	W－5	2.7	1.5	1.8	逆台形	22.9	東－西	－	貿易陶磁器他	
元総社蒼海遺跡群（23）	24地点	W－6	1.3	0.5	1.2	逆台形	－	－	－	常滑大甕	丸馬出に伴う堀跡
元総社蒼海遺跡群（23）	25・26地点	1·2号トレンチ	－	－	3.9	－	－	－	－	漆塗碗、板碑	
元総社蒼海遺跡群（29）	1区	W－1	4.5	(3.5)	1.8	逆台形	18.5	東－西	箱堀か	かわらけ、宝篋印塔	
元総社蒼海遺跡群（29）	1区	W－2	(9.5)	(1.5)	4.0	逆台形	11.5	南－北	箱堀か	内耳鍋、火鉢	
元総社蒼海遺跡群（30）	－	W－1	4.5	1.4	1.2	逆台形	23.2	東－西	空堀・箱堀	かわらけ、五輪塔	
元総社蒼海遺跡群（30）	－	W－2	(1.0)	－	(0.7)	－	17.5	南－北	－		
元総社蒼海遺跡群（31）	－	W－1a	3.5	0.6	3.18	V字状	38.5	東－西	空堀・箱薬研堀		
元総社蒼海遺跡群（31）	－	W－1b	(1.5)	0.4	2.86	V字状			空堀・箱薬研堀		
元総社蒼海遺跡群（31）	－	W－1c	－	－	(3.81)	V字状			－		
元総社蒼海遺跡群（31）	－	W－2	3.5	0.8	1.0	逆台形	20.6	南－北	空堀・箱堀		
元総社小見内Ⅲ遺跡	6区	W－1	(4.6)	－	(2.3)	逆台形	3.6	南－北	－		
元総社小見内Ⅷ遺跡	B区	W－2	4.6	4.2	0.9	逆台形	5.5	北西－南東	空堀か		
元総社小見内Ⅷ遺跡	B区	W－3	1.83	1.18	1.17	U字状		北西－南東	空堀か		

（　）は現存値、［　］は推定形状・形態を示す。

元総社蒼海遺跡群（29）の1区では現道を挟んで東西方向（W－1）と南北方向（W－2）に走行する堀跡が確認された。W－1は東端部で底面が段状に上がる。底面土層では水成堆積の痕跡を確認、雨水によるものと考えたい。

元総社蒼海遺跡群（30）では南北・東西方向に走行するW－1・2が確認されている。W－1底面は西へ向かって緩やかに傾斜しており雨水の流れ込みの痕跡が確認できる。W－2は調査区壁際のため全容は把握できていない。

元総社小見内Ⅲ遺跡の6区ではW－1が確認されている。前述した元総社蒼海遺跡群（23）23地点、W－2の北延長部にあたると想定される。

小見内Ⅷ遺跡のB区ではW－2・3が確認されている。元総社蒼海遺跡群（1）・（6）と同様の堀跡と考えられる。

堀跡の検討

山崎一氏の縄張図（Fig.26）は地形・現存遺構を基に描かれたものであり、現況からの蒼海城の姿を示している。また総社資料館には「蒼海城絵図」が収蔵してあり、総社長尾氏時代といわれている蒼海城が描かれている。ここでは調査で確認された堀跡を「蒼海城絵図」と山崎氏の縄張図を参考に蒼海城の堀跡の想定を試みたい。なお今回想定する堀跡ラインは総社長尾氏在城時（ここでは古段階と考えたい）のものとし新段階の堀跡は省略、調査結果で時期判別されていないものは今回の想定に限り古段階のものとして考えた。

蒼海地域の発掘調査結果を前橋市発行都市計画図に落とし込み、「蒼海城絵図」と山崎氏の縄張図から想定される堀跡ラインを描いたものがFig.27元総社蒼海遺跡群（31）周辺蒼海城想定図である。[4] 発掘調査で確認された堀跡は概ね絵図に記載されているものと一致する。調査例の少ない本丸以西では明確な堀跡ラインはみられず想定の域を出ない。ラインに乗る堀跡は概ね深さ3m以上で郭間の区画·防御性からみても十分なものであり、空堀の薬研・箱堀の形態を示す。時期差・改修が認められる堀跡は本遺跡を含めて5地点[5]である。

次に本遺跡について考えたい。W－1は絵図によれば諏訪屋敷と記載されている箇所の北側の堀跡にあたる。W－1は3時期の造り替えが確認できるため一番古いW－1cがこれに該当する。根拠としてはW－1a・bが

oumi031.indd　40　　2010/11/17　12:20:16

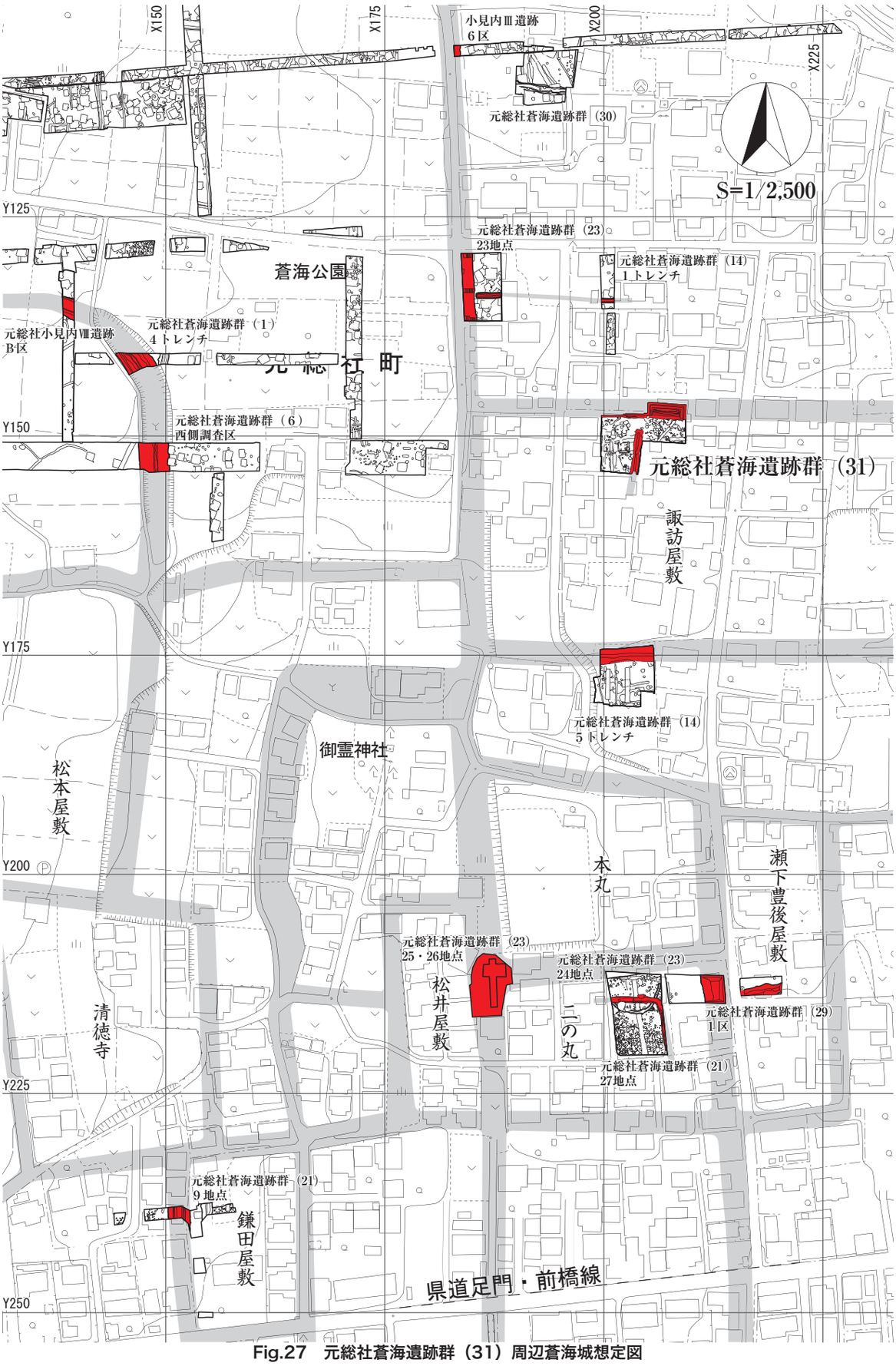


Fig.27　元総社蒼海遺跡群（31）周辺蒼海城想定図

oumi031.indd　41　　2010/11/17　12:20:18

W－１ｃと比較して堀底が浅いということが挙げられる。これは防御性を重視せずに簡易・早急的な修築を主として行われた可能性が高く、初期段階においては十分な防御性を確保するため深く掘られたと考えるからである。W－１ａ・ｂは大規模な修築を必要としなかった諏訪・秋元氏時代のものとするのが妥当ではないだろうか。W－１と比較するとやや小規模のW－２は絵図に記載はないがW－１との位置関係をみれば付随する堀跡だと理解できる。この種のものは元総社蒼海遺跡群（23）23 地点でもみられ、共に大（W－１）小（W－２）の関係にある。規模や位置関係からW－２は郭間の堀跡というよりは、郭内を区画する堀跡と考えるべきであろう。この様な堀跡は元総社蒼海遺跡群（21）27 地点・（23）24 地点にも認められる（W－２・５）。ここでは二の丸の中央部を区画（方形か）しており、内側から大量の柱穴が確認されている状況からも建物を区画していた堀跡と考えられる。このW－２・５は他の堀跡との重複関係から古段階のものとされているが、絵図には記載がみられない。郭内の構造物等は省略して描かれているからであろう。

以上の事から本遺跡で確認されたW－１は諏訪屋敷の堀跡であり、総社長尾氏時代から廃城になるまで改修を受けながら存在していたと考えられる。またW－２は諏訪屋敷内を区画する堀跡と位置付けたい。

蒼海城の改修に関しては旧段階のものを踏襲している事例からも大規模ではなく部分的な修築に留まったようである。広大な城域・縄張の制約等が足柵（あしかせ）になっていたのかもしれない。

課題

本遺跡・周辺遺跡の調査結果から蒼海城堀跡の想定を試みたが全体像を知る上ではまだ調査事例が少ないというのが現状である。主要な堀跡の状況はある程度つかめてきたが、城の中核を成す本丸から西側は未調査地であるため解明には至っておらず、発掘調査が待ち望まれる地域である。また二の丸にあたる元総社蒼海遺跡群（21）27 地点で 700 基を越える柱穴が確認されているように郭内の建物の存在も注視しなければならないだろう。修築年代についても文献史料に乏しく、発掘調査による遺構・遺物からの想定に頼らざるをえない状況にある。「蒼海城絵図」と他絵図[(6)]との比較を行い年代・城内構造を把握する必要もある。

課題が山積みではあるが近年の発掘調査によって蒼海城解明への道がようやく開き始めたと考えたい。今回示した堀跡ラインは現状での調査結果・絵図・縄張図・踏査において報告者が想定したものであり、今後行われるであろう蒼海城周辺での発掘調査結果によっては修正される箇所が多々あると思われる。ここでの試案が今後蒼海城を調査・研究する上での礎の一部になれば報告者としては幸いである。

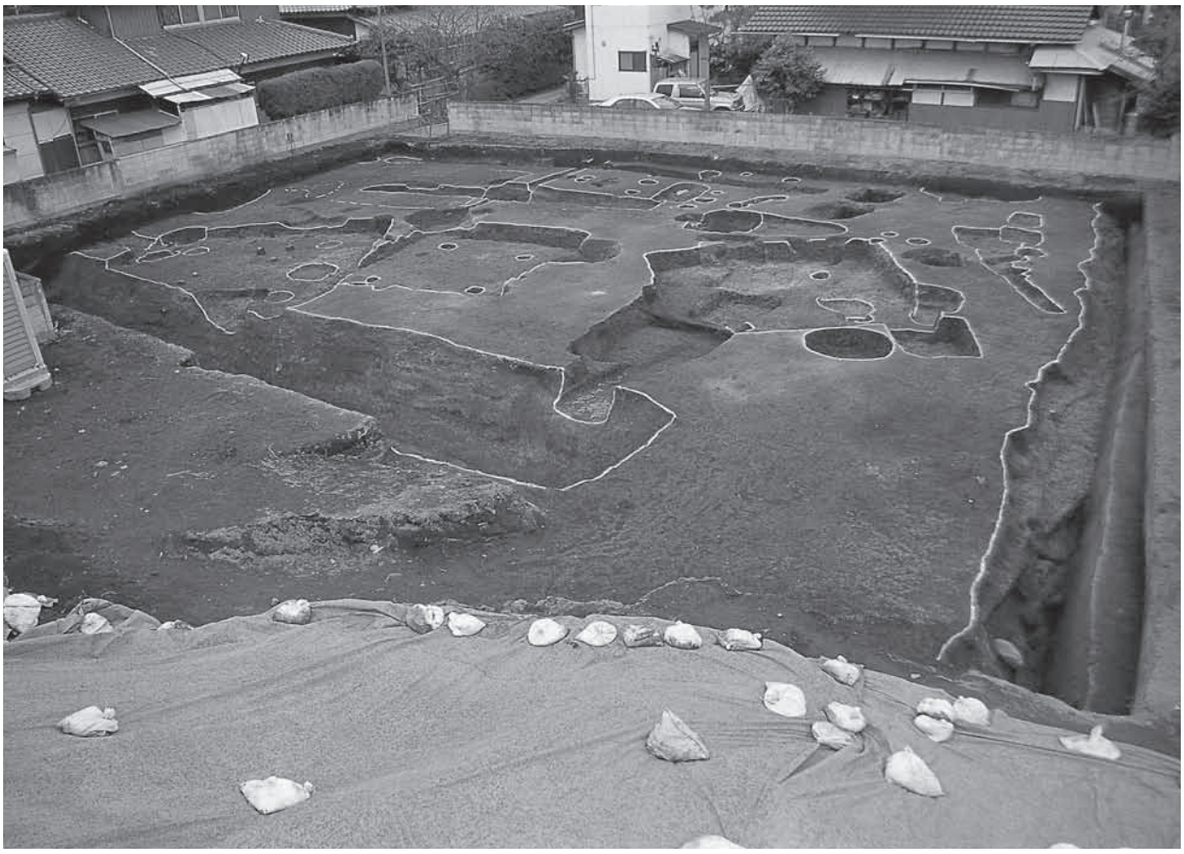
註

（1）『修史館本惣社長尾系図』応永元年（1368）三月九日、総社長尾氏の祖とされる長尾忠房が総社の地に相州御霊社を勧請する記載が認められるため、それ以前の入部と考えられる。
（2）小出哲夫　2001　『中世の瀬下氏』
（3）今回は本遺跡周辺の調査事例を中心に扱った。
（4）郭の名称は「蒼海城絵図」を参考にした。
（5）本遺跡W－１、元総社蒼海遺跡群（21）９地点、元総社蒼海遺跡群（21）27 地点・（23）24 地点、元総社蒼海遺跡群（21）23 地点、元総社小見内Ⅷ遺跡。
（6）『前橋市史　第一巻』に慶長年間ごろと推定される絵図が記載されている。

参考文献

勝守すみ　1978　『長尾氏の研究　関東武士研究業書　第６巻』　名著出版
山崎　一　1978　『群馬県古城塁址の研究　上巻』　群馬県文化事業振興会
山崎　一　1979　『日本城郭大系　第４巻　茨城・栃木・群馬』　新人物往来社
近藤義雄　1986　『図説前橋の歴史　群馬県の歴史シリーズ１』　あかぎ出版
久保田順一　1996　『上野武士団の中世史』　みやま文庫
黒田基樹　1997　『戦国大名と外様国衆』　文献出版
黒田基樹　2001　『戦国期東国の大名と国衆』　岩田書院
柴辻俊六・黒田基樹　2002　『戦国遺文　武田氏編　第二巻』　東京堂出版
久保田順一　2006　『室町・戦国期　上野の地域社会』　岩田書院
久保田順一・飯森康広　2009　「天地人と戦国上州」『上州風』Vol.31　上毛新聞社
市村高男　2009　『戦争の日本史 10　東国の戦国合戦』　吉川弘文館
国府村誌編纂委員会　1968　『国府村誌』
前橋市史編さん委員会　1971　『前橋市史　第一巻』　前橋市
前橋市史編さん委員会　1973　『前橋市史　第二巻』　前橋市
前橋市史編さん委員会　1985　『前橋市史　第六巻』　前橋市
群馬県教育委員会　1988　『群馬県の中世城館跡』
群馬県史編さん委員会　1989　『群馬県史　通史編３　中世』　群馬県
高崎市史編さん委員会　1994　『新編高崎市史　資料編４　中世』　高崎市
群馬県教育委員会文化財保護課　1999　『前橋城遺跡Ⅱ』
高崎市教育委員会　2008　『史跡箕輪城Ⅷ』
大橋康二・西田宏子　1988　『別冊太陽　古伊万里』　平凡社
江戸遺跡研究会　1990　『江戸の陶磁器』江戸遺跡研究会第３回大会
江戸遺跡研究会　2001　『図説江戸考古学研究辞典』　柏書房
九州近世陶磁学会　2009　『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通　関東・東北・北海道編』

oumi031.indd　42　　2010/11/17　12:20:18



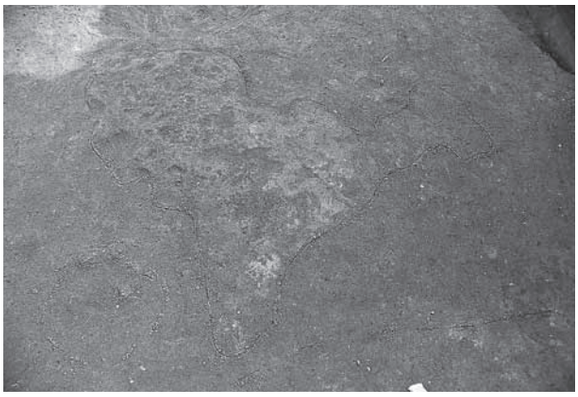
調査区西側　全景（東から）

調査区東側　全景（西から）

PL.2

Ｈ－１号住居跡　全景（北から）

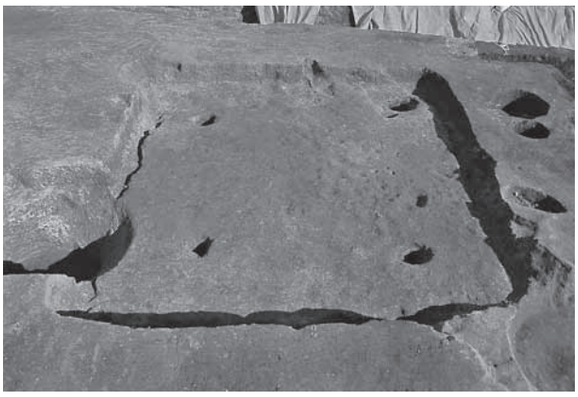
Ｈ－１号住居跡　遺物出土状況（北西から）



Ｈ－２号住居跡硬化面　硬化面検出状況（西から）

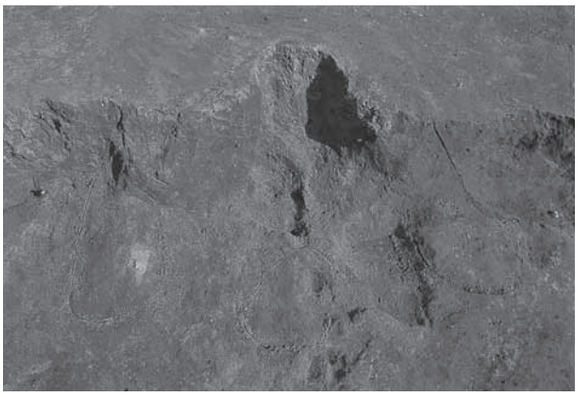
Ｈ－３号住居跡　硬化面検出状況（北西から）

Ｈ－４号住居跡　全景（西から）



Ｈ－５号住居跡　全景（西から）

Ｈ－５号住居跡　こも編石出土状況（北から）



Ｈ－５号住居跡　竈全景（西から）

oumi031.indd　44　　2010/11/17　12:20:21

Ｈ－６号住居跡　全景（西から）

Ｈ－６号住居跡　竈全景（西から）

Ｈ－７号住居跡　全景（北から）

Ｈ－７号住居跡　竈全景（北から）

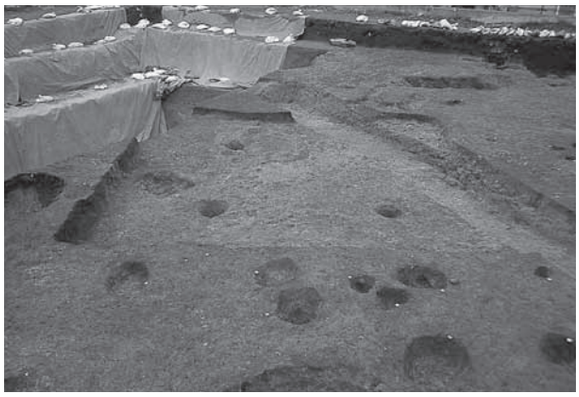
Ｈ－８号住居跡　全景（東から）

Ｈ－９号住居跡　全景（南から）

Ｈ－10号住居跡　全景（西から）

Ｈ－10号住居跡　竈全景（西から）

Ｈ－11号住居跡　全景（西から）



Ｈ－12号住居跡　全景（西から）

Ｈ－13号住居跡　全景（西から）

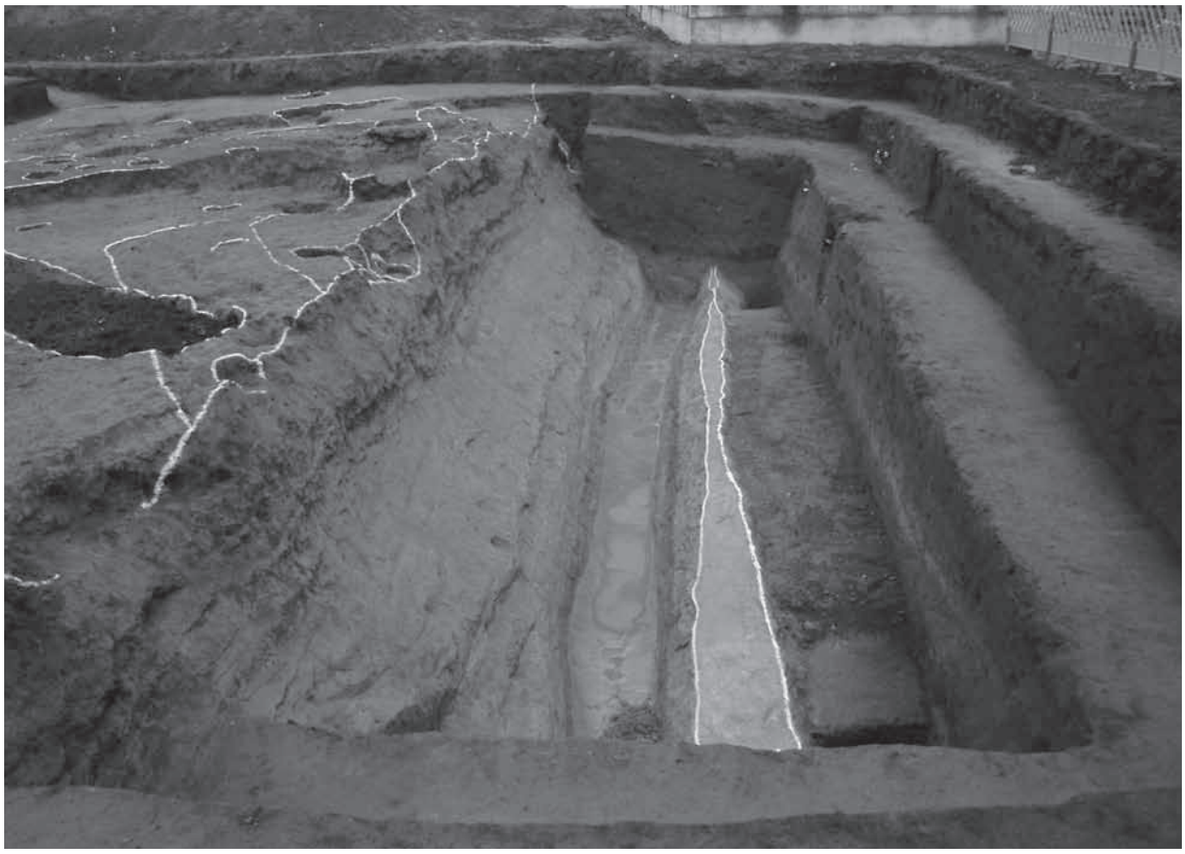
Ｈ－14号住居跡　全景（北から）

Ｈ－15号住居跡　全景（北から）

Ｈ－16号住居跡　全景（西から）

Ａ－１号道路状遺構　東側全景（西から）

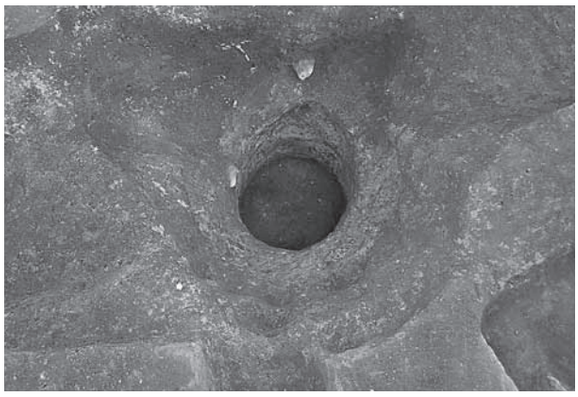
Ｗ－１号溝　西側全景（東から）



W－１号溝　東側全景（東から）

W－１号溝　土層断面（西から）

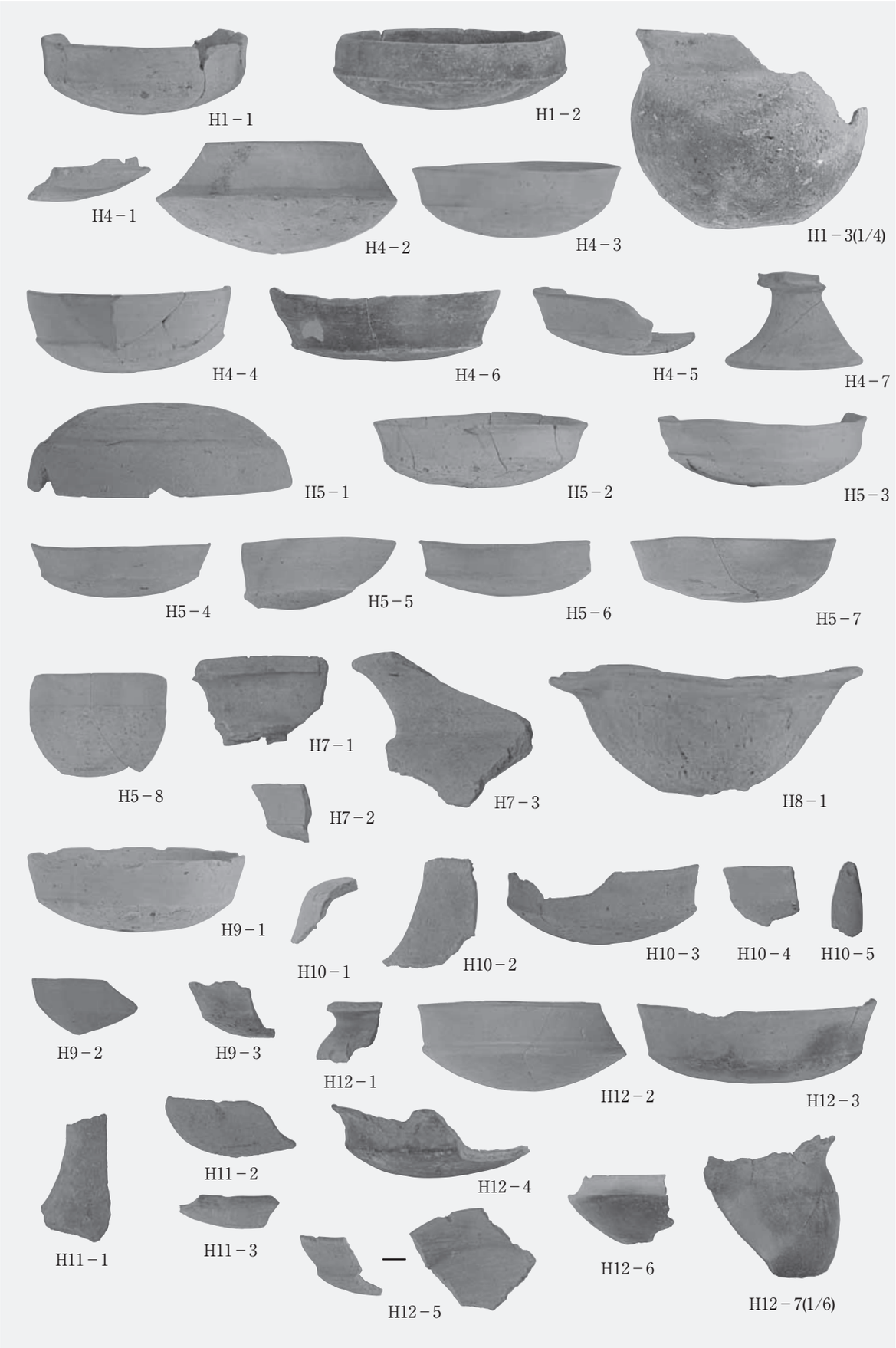
W－２号溝　全景（南西から）

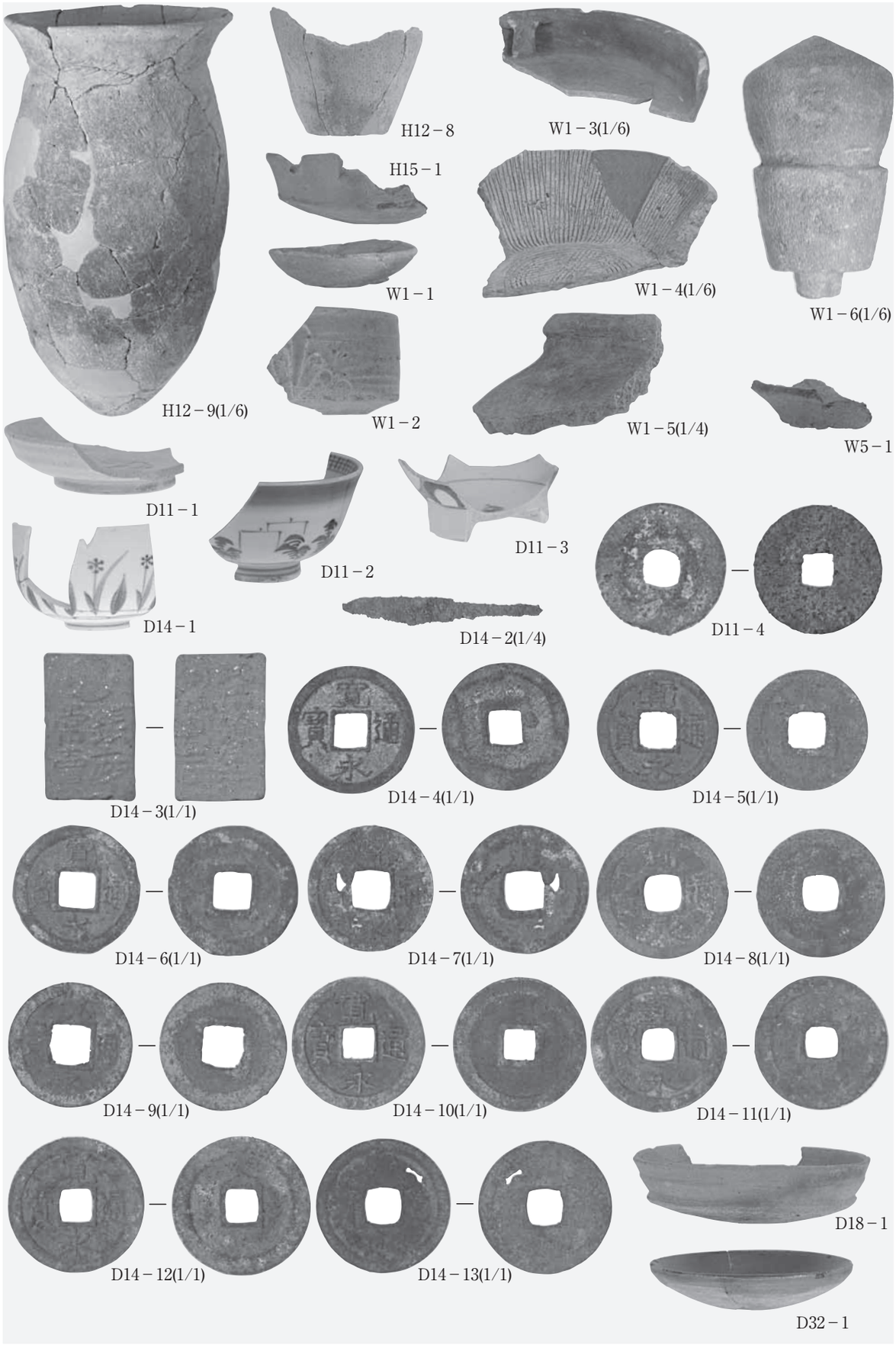


Ｉ－１号井戸　全景（西から）

調査風景（南西から）

PL. 6


H1－1
H1－2
H1－3(1/4)
H4－1
H4－2
H4－3
H4－4
H4－6
H4－5
H4－7
H5－1
H5－2
H5－3
H5－4
H5－5
H5－6
H5－7
H5－8
H7－1
H7－2
H7－3
H8－1
H9－1
H9－2
H9－3
H10－1
H10－2
H10－3
H10－4
H10－5
H12－1
H12－2
H12－3
H11－1
H11－2
H11－3
H12－4
H12－5
H12－6
H12－7(1/6)



oumi031.indd 49 2010/11/17 12:21:50

D32－2
D32－3
D32－4
D32－5(1/6)
D32－7(1/6)
D32－8(1/4)
D33－1
D33－2
(1/6)
D32－6
(1/6)
D33－3
D33－4(1/1)
遺構外－1(1/4)
遺構外－2(1/4)
遺構外－5
遺構外－6
遺構外－3(1/6)
遺構外－4(1/6)
遺構外－7(1/6)
遺構外－8(1/6)
遺構外－9(1/6)
遺構外－10(1/1)
遺構外－11(1/1)

報告書抄録

カタカナ	モトソウジャオウミイセキグン(31)
書名	元総社蒼海遺跡群(31)
副書名	前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	–
シリーズ名	–
シリーズ番号	–
編著者名	神宮　聡・佐野　良平
編集機関	技研測量設計株式会社
編集機関所在地	〒371−0031　群馬県前橋市下小出町1-15-3
発行機関	前橋市教育委員会
発行機関所在地	〒371−0018　群馬県前橋市三俣町2-10-2
発行年月日	2010年12月17日

フリガナ	フリガナ	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経			
モトソウジャオウミイセキグン 元総社蒼海遺跡群 (31)	マエバシシモトソウジャマチ 前橋市元総社町 1965ほか	102021	21A130-31	36°23'19	139°2'15	20100118 ～ 20100312	915㎡	前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
元総社蒼海遺跡群 (31)	集落跡 その他	古墳時代	竪穴住居跡　16軒	須恵器 土師器	古墳時代後期の集落遺跡。
		中近世	道路状遺構　1条 堀･溝　5条 井戸　1基 土坑　21基 ピット　51基	かわらけ 陶磁器 五輪塔 古銭	蒼海城の堀跡。

元総社蒼海遺跡群(31)

前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2010年12月７日　印刷
2010年12月17日　発行

発行　前橋市教育委員会文化財保護課
〒371－0018　群馬県前橋市三俣町２-10-２
TEL　027-231-9531

編集　技研測量設計株式会社
印刷　朝日印刷工業株式会社

oumi031.indd　51　2010/11/17　12:22:16

oumi031.indd 52 2010/11/17 12:22:16

oumi031.indd 53 2010/11/17 12:22:16

oumi031.indd 54 2010/11/17 12:22:16

oumi031.indd 55 2010/11/17 12:22:16

oumi031.indd 56 2010/11/17 12:22:16